
テイルズオブグレイセス + α ~ 守る強さを炎と共に ~

雪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブグレイセス＋α ～守る強さを炎と共に～

【Nコード】

N5820R

【作者名】

雪龍

【あらすじ】

テイルズオブグレイセスの世界にオリキャラを登場させて進んでいく物語です。基本はアスベル主人公ですが、大体オリキャラ視点です。

プロローグ

俺の名前はルイス・ラグゼリア。

アスベル達とは幼馴染にあたる。

出逢ったのは確か俺が7歳の時だったから、11年前だな。

いつも元気で皆を振り回すアスベル。

弱気だが優しくて頭の良いヒューバート。

病弱でも人一倍がんばっていたシエリア。

そして皆のお姉ちゃん的存在（年下だが）エリー。

花畑で出逢って友達になったソフィ。

王都から来た時に友達になったリチャード。

そんな皆が俺は大好きだった。

アストン様の言いつけを破って勝手に裏山に行ったり、友情の誓い
をしたりと、とにかく楽しかった。

こんな毎日がずっと続くと思っていた。

だがそれは叶わぬ夢だった。

ソフィが死んだんだ。

得体の知らない魔物^{モンスター}によって。

誰もが事故だったからしょうがないと言った。

でもアスベルは自分のせいで死んでしまったんだと言った。

本当なら自分達も死んでいた。

でも生きていた。ソフィが命懸けで守ってくれたんだと皆思った。

そして、それに引き続きヒューバートがストラタのオズウェルという家に養子に出されたのだ。

そのことでアストン様に反発しアスベルまでもが家を出て行ってしまった。

俺は無力だった。

何も守れやしなかった。

そして俺は強くなると決意した。

数カ月後、俺は木刀の素振りをしていた。

そんな所へ世界中を旅しているという男性—— ユイゴスに出逢った。

ユイゴスは俺を一目見て俺の弟子にならないかと言ってくれた。かなり嬉しかった。

強くなったらもう何も失わずに済む。そう思っていたから。

ある時、師匠コイゴスがこんな事を聞いて来た。

「戦いにおいて何が一番必要か…分かるか？」

俺には正直さっぱりだった。

「その答えを見つけた時、お前は誰よりも強くなれる」

俺は毎日その答えを考えるようになった。

師匠に弟子入りしてから6年、師匠がまた旅立つと言った。
俺はそれに着いて行こうとしたが却下された。
でもその代りに俺は、あの時の答えを言った。

「師匠は俺に戦いにおいて何が一番大事か。聞きましたよね」
「ああ、答えは見つかったか？」

「はい、それは何かを守ろうと思う事だと俺は思います」

「…良い答えを見つけたな。その言葉を絶対に忘れるなよ」

そう言い残して、師匠は旅立った。
それから数ヵ月後俺達は、思いもよらない形で旅に発つ事になる。

プロローグ（後書き）

新連載始めちゃった。
でもまあ、もうひとつの方を優先して書くのでご了承ください。
とりあえずキャラ紹介します。

ルイス・ラグゼリア

R u i s ・ L a g z e l i a

ラント出身の18歳。黒髪。

アスベル達とは幼馴染。

他人の色恋沙汰は大好きでかなり鋭い。しかし自分の事はアスベル並みに鈍感。

武器は刀で、技は大体アスベルと同じ。

エリス・ライレージ

E l i c e ・ L a i r e a g e

ラント出身の17歳。銀髪。愛称はエリー。

明るく、元気だが涙もろい。

ルイスには積極的にアプローチするものの気付いてもらえない。

武器は槍で、回復術も使える。

的な感じです。

次回はアスベルとの再開です！

お楽しみに。

第1話 再会

「何っ！フレデリックさんが攫われた！？」

ルイスはバリーから聞いて、すぐさま飛び出した。

北ラント道に出て少し行くとフェンデル兵とフレデリックの姿があった。

「待てっ！フレデリックさんを返せ！！」

ルイスは九人のフェンデル兵に向かって啖呵を切った。

フェンデル兵は一斉にこっちを見て笑みを浮かべる。

一人で何が出来るとかとも思っているのだろう。

銃を持った二人がこちらに歩み寄ってくる。

片方が撃ってくるが、それをすんでの所で避け

「魔神剣！まじんけん」

刀を振り上げると、赤色の衝撃波が地を走り、撃ってきた方を倒す。もう一人も撃ってくるが、先程と同じように倒してやった。

「俺を舐めんなよ！」

フレデリックを捕まえている奴以外の六人がこちらに来る。

「…1対6は卑怯だろ」

問答無用とでも言わんばかりに一斉に撃ってくる。

正直避けるので精一杯だ。
だがそこに

「魔神剣！^{まじんけん}！」

後ろから先程放った衝撃波と同じ物が、一人を倒す。

すぐさま振り返るとそこには、シエリア、エリー、ラントの兵の先頭に白い影が。

「アスベル！！」

「ルイス！心配したぞ。一人で出て行ったと聞いたから」

あつという間にフェンデル兵は倒され、フレデリックは救出された。だが向こう側から、大きな砲台を積んだ、機械を連れてフェンデル兵がやってきた。

「フェンデルはあんな物まで持ち込んでいるのか！？」

「やべえな、向こうも本気って事だろ」

「あんな物が街になだれこんだら、大変な事になる。何としてもここで食い止めないと」

「でも、あんなのどうやって倒すんだ？」

「地形を利用するのはどうだろう。例えば崖から落とすとか」

「そんなのどこに…あつ」

アスベルは正面に向きなおして言った。

「裏山の花畑ならそう遠くない」

アスベルは皆にラントへ戻るよう言うと、前に出て

「聞け、フェンデル兵！我はウィンドル王国騎士にして、ラント領主の子、アスベル！」

アスベルは剣を抜き、フェンデル兵に向けると続けた。

「そちらに真の勇気を持ち主あらば、出てきて我と戦え！」

アスベルは剣を構えなおす。

「ルイスも行け。ここは俺が何とかする」

「一人でかつこつけんよ。それに…ほら」

そう言つて後ろを指差す。

そこにはエリーと、シェリアが走つて来ていた。

「…皆、花畑まで走るぞ！」

「追いつかれる！」

「後少しだ！皆がんばれ！」

花畑まで着くと、アスベルは崖まで寄って一体落とす。

「上手いじゃん！なら俺も」

そう言っでルイスも一体落とす。残りは四体。
だが

「ちょっと、ヤバいわよ！」

四人全員が崖まで追い込まれてしまった。
すると一体が、砲弾を撃ってくる。

何とか皆避けられたようだ。

だがどんどん迫ってくる。

とうとう一歩も引けない状況になってしまった。

「俺はまた何も守れないで終わるのか？」

その言葉に、ルイスは驚いた。

全く同じ事を自分も考えていたからだ。

「そんなのは……嫌だあああつ！！！！！」

そう叫んだ途端、全員の身体が光り出し、砲弾を弾く。

やがてその光は一点に集まり、柱の様になり、機械を吹き飛ばす。
その光がやむと、少女が姿を現した。

「まさか…あれって…」

「いや、でもそんな筈は…」

「ソフィ！？」

驚くのも束の間、生き残っていた一体がソフィに似た少女へと向かっていく。

「まずい！」

アスベルは少女の前に、庇うように立ち

「こうおそく衝撃震！」

横に一閃させて、衝撃を起こす。

「裂壊桜！」
れつかいおう

「この名を以ちて裁け！リリジャス！」
も

「崩蹴月！」
ほつでめづつ

それぞれが技を繰り出し最後に

「鷹爪襲撃！」
ようそうていめげき

ソフィの一撃で機械は壊れた。

少女とアスベル達は向かい合っている。
何から聞けば良いのか分からないので、沈黙が続いている。
だがシェリアが前に出て

「ソフィ…なの？」

と聞いた。
だが少女は何も答えず、じっとこっちを見ているだけ。

「…ソフィの筈がない」

全員がアスベルの方を向く。

「そんな事があるわけがない…ソフィはあの時…七年前に死んだんだ」

「……ソフィ？」

少女は首を傾げながら聞いてくる。

「でも…まさか…記憶を失っているのか…？」

全員が目を見合わせる。

そしてアスベルが少女の前まで行き

「見て欲しいものがある。こっちへ来てくれ」

と言うと、大きな樹の前まで連れて行く。

そこにはアスベル、リチャード、ルイス、そしてソフィとエフィネア文字で書かれていた。

「七年前にリチャードが来た時、ここでソフィも交えて四人で友情の誓いをやったんだ」

樹を撫でながら言う。

「この木の幹を見てくれ。どうだ？何か思い出さないか？」

少女は樹の幹をじっと見た後、アスベルの方に向きなおして

「わからない」

と首を横に振りながら言った。

分かるはずがない。そう思っただけでも心のどこかで期待をしていた。

「でも…」

「！」

「この樹を見ていると不思議な気持ちになる」

少女は樹をじっと眺めながら言った。

「とても大切な物を見ているような、そんな気になる」
「どういう…事？」

ずっと後ろで黙ってやり取りを見ていたルイスが、入ってきて

「常識的に考えるとソフィ本人って事はありえない。でも赤の他人
って言うのはあまりにも…」

ソフィの顔を見ながら続ける。

「あまりにも、似過ぎてる」

その言葉の後また沈黙が数秒続いた。
だがアスベルが少女に近づき

「なあ、これからどうするんだ？良かつたら一緒に来ないか？」

そう言いながら手を少女の頭に乗せるが、すぐに離す。
離された後少女は頭に自分の手を乗せる。

「私もそうした方が良いと思う。ここに一人じゃ危ないし」

エリーも続けて言う。

「じゃあ、急いで街に戻ろうぜ」

「ああ、あれから皆がどうなったかも心配だ」

「さあ、行きましょう」

シエリアが歩き出した後ろを少女が頭に手を乗せたまま、着いて行く。

アスベルも着いて行こうとすると、足元に何かが落ちているのが分かった。

「クロソフィの種…」

クロソフィと言うのは、ソフィの名前の由来となった花だ。その種を拾い

「これは、ソフィが導いてくれた縁なのか…？」

「おーい、何やってるんだー？早くしろよー」

「あっ、今行く！」

ルイスの呼びかけに反応して、アスベルが走って追いかける。クロソフィの種を握りしめて。

第1話 再会（後書き）

（雪龍）「いやー、この手があつたかー」

（ルイス）「どんな手何だ？」

（雪）「うおっ！びっくりしたー。まさかこつちでもここに来る奴がいるとは」

（ル）「？ 何の事だ？」

（雪）「いや、何でもない」（カイン達もだけど、こつて楽しいのか？）

（ル）「で、どんな手なんだ？」

（雪）「ああ、なんとね、台詞とかの事なんだけどさ」

（ル）「それがどうしたんだ？」

（雪）「プレイ動画見ながらだと正確な台詞が使えるんだよ！」

（ル）「…当り前だろ」

（雪）「えっ？」

（ル）「まあ、こんな感じで行くんでよろしく」

（雪）「ちよっ、待ってよ！！」（こつちでも強制終了かよっ！！）

第2話 長男として（前書き）

考えてみたけど、主人公はやはりアスベルですかね。
……じゃあ、ルイスの立場って一体…

第2話 長男として

ラントに戻るとバリーが泣いている男の子を連れてやってきた。

「皆は無事に逃げられたか？」

「はい、お陰様で全員無事に帰還出来ました。負傷者は何人か出ましたが…」

そう言うとバリーは男の子に目をやる。

「お父さんが…ぼくのお父さんが…」

男の子は泣きながら、ゆっくりと呟く。

するとシェリアが、男の子の頭に手を置いて優しく話しかける。

「安心して。お父さんの事はお姉ちゃんが治してあげるから」

男の子は泣きやみ、シェリアを見上げる。

それを笑顔で返し、バリーの方を向く。

「負傷した人達はどこ？」

「広場にいる」

それを聞いてシェリアはアスベル達の方を向く。

「私は怪我をした人達の所に行きます」

「あつ、じゃあ、私も行くね」

二人はアスベルに礼をした後、男の子に着いて行った。

そして行つたのを確認すると、パリーが口を開く。

「彼女達は本当によくやってくれています」

そしてシエリア達が行つた方向に振り返つて、続ける。

「奇跡の力で俺達を癒してくれる。今のラントには天の使いの様な存在です」

「天の使い、ねえ…シエリアはそうでもエリーはおてんば過ぎるっしょ」

ルイスがいらない事を言つたがバリーはそれを無視する。

「フェンデル軍の状況は？」

アスベルも無視し顎に手をやりながら、バリーに尋ねる。

「ひとまず後退はしましたが、依然としてラントの領内に入り込んだままです」

俯いていた顔を上げて続ける。

「奴らは、国境砦の手前に野営地を築いております」

国境砦と言うのは、その名の通りウィンドルとフェンデルの国境を結ぶ橋の様なものだ。

「そこを叩かない限り、本当に奴らを撤退させる事は出来ないと思います」

「野営地の詳しい位置は分かるか？」

「はい。以前アストン様にも詳しい報告書を提出しています」
「そうか。屋敷へ戻ったら調べてみよう」

アスベル達が歩き出そうとした時、バリーが何かを思い出したように呼び止めた。

「ケリー様とフレデリックさんがお屋敷でお待ちです」
「わかった。すぐに行く」

それを聞いてバリーは深くお辞儀をし、踵を返し歩き出す。

「七年ぶりか：まさかこんな形で戻ってくる事になるとはな」
「ほらほら、感傷に浸ってないでさっさと行こうぜ」
「そうだな。よし、行こうか」

屋敷に行くとケリーとフレデリックが庭で待っていた。

「アスベル！」

ケリーはアスベルの顔を見ると、口に手を当て、今にも泣きそうな顔で話しかけてきた。

「母さん…ただいま戻りました」

「良かった…！あなたが帰ってきてくれて本当に良かった」

ケリーは遂に泣き出してしまった。

「お父様があんな事になってこれからどうなるのかと心配で心配で

…」

「心細い思いをさせてすみませんでした」

アスベルは深々と頭を下げ詫びる。

「フレデリックも無事でよかった」

「助けていただいたご恩は一生忘れません」

「…父の葬儀は終わったのか？」

「はい。アスベル様の帰りを待たず、申し訳ございません。アストン様は最期までラントを思い、勇敢に戦い抜かれました」

「そうか…父の最期を看取ってくれてありがとう。フレデリック」

「もったいないお言葉でございます」

今更ながら、こんな口調で喋っているアスベルを見ると、七年前のアスベルしか知らないルイスにとって、かなり違和感があった。

「アスベル、もうどこへも行かないわね？」

ケリーは顔を上げ、涙を拭いてアスベルに尋ねる。

「お父様の後を継いでくれるわね？もう頼りはあなただけなのですから」

「…俺が帰ってきたのは、母さんやラントの様子を見るためで…」

「アスベル、あなたまさかこんな状況だと言うのにまた王都へ戻るというのですか」

「母さんの言いたい事はもちろん分かっています。でも少しだけ時間を下さい」

アスベルは申し訳なくなってきたのかだんだん俯いていく。

「考えを…整理する時間を…」

それを聞いてケリーはまた俯いてしまう。
その様子を見て、フレデリックは話を変える。

「アスベル様のお部屋は以前のままにしております。今までの様にお使いください」

「ありがとうございます、フレデリック。ソフィ、俺は部屋へ行くが来るか？」

それにソフィは無言で頷いて答える。

それを見てアスベルは自分の部屋に行こうとする。

「アスベル…」

「すみません、母さん」

「で、どうするんだ？」

「！　ルイスか」

ルイスは壁にもたれかかって腕を組んでいる。

「まだちょっと悩んでるんだ」

「俺は好きにしても良いと思うぜ。夢だったんだろ？」

「だが…」

「まあ、街の皆は許さないだろうけどな。良く考えとけよ」

そう言っていると、ルイスは部屋から出て行った。

「アスベル様、お茶をお持ちしました。それとルイスさんと何かお話でも？」

「ああ、フレデリックか。まあ、少しな。ところで今手紙を書いたので出しておいてくれないか？」

「これは…！　騎士学校の退学届ではありませんか」

「俺は父の跡を継ぐ。俺はラント領主アストンの息子で長男なんだ

から」

「ケリー様にご報告いたします。きっとお喜びになるでしょう」

「ああ、それとフレデリック」

アスベルは先程バリーから聞いた事を思い出した。

「フェンデル軍の野営地に関する報告書があると聞いたんだが」

「それでしたら執務室にございます。よろしければ一緒に行ってお出しいたしますか？」

「そうだな。よろしく頼む」

そして二人は執務室に向かった。

第2話 長男として（後書き）

（ル）「何で強化月間駄目なんだよー」

（雪）「てか何で許されると思ったの」

（ル）「てか良いのか？」

（雪）「何が？」

（ル）「本編の台詞まんな上に、俺アスベルの台詞奪ってんだけど」

（雪）「良いの良いの。その内オリジナルストーリーも入れようと思ってるから」

（ル）「それより、俺の秘奥義考えとけよ」

（雪）「任せとけ！！」

（ル）（ホントに大丈夫か？）

（雪）「次回はあのブラコンツンデレ眼鏡野郎が出てきます！」

（ル）「すごい言い様だな」

（雪）「では、お楽しみにー」

第3話 海辺の洞窟より（前書き）

オリジナルチャットなる物に挑戦してみました。
では、お楽しみください。

話の後半をを大きく変えました。

第3話 海辺の洞窟より

（親父もここでよくこうして書類を読んだっけ…）

アスベルは執務室の椅子に座って書類に目を通していた。

「フレデリック。ここに書かれている内容は今もその通りか？裏山の先にある海辺の洞窟を通れば、フェンデル軍の野営地の近くまで迫れると書いてあるが」

問いに対しフレデリックは無言で頷き答える。

「うまく洞窟を利用すれば野営地に奇襲をかける事もできそうだな…」

その時部屋にコンコンと言う音が響いた。

「失礼しますアスベル様」

声の主は部屋に入ってきてアスベルに近づいた。

「そのご様子だと新しいご領主様におなりになったのですか？」

「若輩者ではあるが、精一杯ラントの為に尽くそうと思う。バリー、よろしく頼む」

「こちらこそよろしく願います」

声の主——バリーは頭を下げ言った。

「早速ですがアスベル様。騎士団は動いてくれそうですか？今とな

「つてはそれが頼りで…」

「残念ながら、難しそうなんだ…自分達の力で今の状況をなんとかしなければ」

「そうですか…」

バリーは不安になり俯いた。

「もちろんフェンデルへの対策は考えている」

「何かお考えがあるのですか？」

「フェンデル軍に対し攻勢に転じようと思う。海辺にある洞窟を使って敵の前線基地に夜襲をかけるんだ」

「なるほど。あの洞窟なら人目につかずに動けるかも」

「行動は少人数に分かれて行い、洞窟の出口の手前で集合する。そこで夜を待ち、奇襲をかける。攻撃の指揮は俺が執る」

「それ俺も行つて良い？」

アスベルとバリーは急に話しかけられて驚く。

アスベルは隣に置いてあった自分の剣を取り構えた。

後ろの窓のサッシに座っている黒い影。

だがそれは、二人の見知った顔だった。

黒い髪で、服はアスベルと似ているが、地の色は黒く縁は黄色くてそれ以外の模様はなかった。

「ルイス…!」

「ルイス…何処から入って来たんだ？」

「何処からつて…ここから」

そう言い開け放っている窓を指差す。

アスベルはまだしも、正面から見えるはずのバリーにさえ気付かれ

ないように入って来たらしい。

「ちゃんとドアから入ってきてくれ」

「俺にはこっちの方が合ってる気がしてな」

ルイスはサッシから降り、机の横にあった椅子に座る。

「で、俺も行って良いの？」

「いや、もしも俺達が失敗した時の為にラントにいてくれ」

「そんなに失敗するような作戦なのか？」

「どんな作戦でも絶対は無理」

「まあ良いや。そういう役も必要だろうしな」

「よろしく頼む」

ルイスは納得したのか、立ち上がり部屋から出ていく。

「ドアから出るよ！」

ルイスはそんな事は気にせず、窓から出て行った。
空気を変えようとバリーは咳払いする。

「すいません。あいつには後でよく言っておきますので」

「いや、必要ないよ。ルイスは昔からああいう奴だったから」

「そうですか…ところで作戦はいつ決行ですか？」

「決行は今夜だ」

「そんな急にですか!？」

「激しい戦いの直後こそ敵に隙が生まれるんだ。今は好機だと思う」

アスベルは立ち上がり、続ける。

「この作戦を絶対に成功させ、フェンデル軍の脅威を取り除く！」
「了解しました。直ちに準備に取りかかります」

バリーは深々と一礼した後部屋を出て行った。

するとバリーと入れ替わり今度はシェリアとエリーが入って来た。

「その奇襲作戦に私達も加えてください」

「私達もフェンデル軍をなんとかしたいんだよ」

「シェリア…エリー…」

そしてソフィも近づいてきて

「……わたしも行く」

「ありがとう。皆、よろしく頼む」

「ちよつと待ったあ！！！」

またもや後ろから今度は大声で話しかけられた。と言うより怒鳴りこんできた。

やはりルイスだ。

「ちよつ！ルイス！！どこから入ってんの！？」

「そんな事はどうでも良い！何で三人は良くて俺は駄目なんだよ！お前はハーレムでも作る気か！？」

「ハーレム？何だそれ？」

アスベルの言葉にルイス、シェリア、エリーの三人は沈黙する。
一応アスベルは18歳だ。

「まあそんな事は良いとして、三人が行くなら俺も行くぞ！」
「アスベル。こうなったらルイスは曲げないよ」

「はあ…分かった。ルイスもよろしく頼む」

「サンキュー」

「よし。準備ができ次第出発しよう。昼の間に現地に到着して、そこで夜を待ちたい」

「わかりました」

一行は今北ラント道を歩いていた。

「ソフィ、あまり離れるなよ」
「うん」

そう言いながらソフィは側にあつた花の所に走って行った。

「ホントに分かったのかね…」

「まあ、ちよつと位活発な方が良いのよ」

ルイスとエリーはソフィを見ながら話している。
シエリアはアスベルの方に近づいて

「どうしてその子をソフィって呼ぶの…？」

「どうしてって…名前が無いと不便だからな」

「まだ、あのソフィだとはつきりしていないのに…？」

「それは…」

先程からアスベルは少女をソフィと呼んでいるが、ソフィは七年前死んでしまっているのだ。

「あなたは現実を見ていないのよ…」

その言葉にアスベルは心を殴られた気分になった。

「あの頃とは…何もかも…違う…なのに…」

シエリアは消え入りそうな声で呟いた。

「…確かにあの頃とは色々変わってしまった」

アスベルは俯いて続ける。

「ソフィが死んで、ヒューバートがストラタへ行って、親父も死んでしまった。久しぶりに会った幼馴染はすっかりよそよそしくなつて昔のように笑ってくれない」

「あ…」

「分かつてる！全部俺の責任だ！…分かっているからここに残ると決めたんだ」

「ねえ、このお花はなんて言うの？」

ソフィが走ってきて尋ねる。

手にはここにいる全員にとって、最も大切な花を握っていた。

「…クロソフィだ」

「ソフィと言う名前はこのクロソフィから取ったのよ」

「ソフィ…アスベルがわたしの事そう呼んでる」

「ごめん、勝手に…」

「いいよ。ソフィって呼んで。このお花、好き。あつたかくて懐かしい感じ。このお花から取った名前とっても嬉しい」

「そんなに好きなら育ててみるか？」

そう言つてアスベルはポケットから種を取り出す。

「ほら、クロソフィの種だ。これをやるよ」

「これがクロソフィのお花になるの？」

「屋敷に戻ったら花壇に植えるといい」

「わかった」

「まーまー、こんな所で立ち話もあれだしさっさと行こうぜ」

ルイスがそう言うときアスベル、ソフィ、エリーの三人は洞窟に向かって再度歩き出した。

そしてシェリアも着いて行こうとするとルイスに止められた。

「全部俺の責任だ！なんてまだ全然分かってないよな…」

「……………」

「俺達にも多少なりにも責任はある。それなのに……」

「それ以上は言わないでも分かっている。けど……」

「大丈夫だって。ちゃんと分かりあえるよ」

そう言うときシェリアは先に行った三人の所に走って行った。

「……たく、二人共不器用だったらありやしねえ」

ルイスもその後を追いかけるように走って行った。

「ここが洞窟の中か。ラントの領内だというのに来るのは初めてだな」

「ここまでは見つからなかったね」

「この先もそうだと良いが。よし、奥へ進もう」

洞窟に入って少し進むと、大きな水溜りの様なものがあつた。

「どうすんのこれ」

「泳ぐしかないようだな」

大体はそれに賛成していたが一人だけ反対している者がいた。

「わ、私…無理泳げない…」

エリーだ。

「えっ？お前って泳げなかったの？」

どうやらルイスやシエリアも知らなかったらしい。

「ごめん。私ここまでみたい…」

「しょうがねえなあ。ほら」

そう言つてルイスはエリーの前で、しゃがみこみ乗るように言う。

「えっ!？」

「ここで帰るわけにもいかないし、一人だけ残していくのも駄目だろ」

「俺もそれが良いと思う…どうしたエリー、顔赤いぞ？」

「何だつて？熱でもあるんじゃないか？」

本編をご覧になった事がある人は分かるだろうが、アスベルはかなり鈍感だ。

そしてルイスは他人の事はかなり鋭いが、自分が関係してくると途端に鈍感になる。

そう、グレイセス一番の鈍感と作者のオリキャラクターの鈍感の夢の共演しているのだ。

「じゃあ……」

エリーは押し負けてルイスの背中に乗った。

「お、重くない…?」
「ぜーんぜん」

こうして全員水の中を通る事が出来た。

オリジナルチャット——恐ろしいほど——

アス「大丈夫か?皆」

ルイ「俺は大丈夫だけど…エリーは大丈夫か?」

エリ「うん…」

ルイ「まだ顔が赤いぞ?やっぱり熱が…」

エリ「だ、大丈夫だから!」

ルイ「そうか。なら良いんだけど」

シエ（鈍感が揃うと手がつけれないわ…）

オリジナルチャット——『ゆーわく』って?——

ルイ「水に入ったり出たりと忙しいな」

シエ「確かに…?」

エリ「はー、ホントにびしょびしょになってもう嫌!」

ルイ「とか言いながら人の前で服脱ぐのやめてもらっていい?」

エリ「あ、あんたが向こう向きなさいよ!」

ルイ「あっちはシエリアとソフィがいるし…」

エリ「私は別に良いと?」

ルイ「そう言うわけではなくて…」

ソフ「あの二人仲良いね」
シェ「そうね」（エリーまた失敗ね）

一行は何度か水の中を通って少し広い場所に出た。

「もう少しで出口か？」

ルイスがそう言った次の瞬間、上から大きな緑色のスライム、クイーンスライムが現れた。

「何だこいつ！？」

「わあ、剣がたくさん刺さってるー」

「そんな事言ってる場合じゃない！皆構えろ！！」

ここからはしばらく声だけでお楽しみください。

「雷斬衝！」
らいざんごう

「紅蓮剣！」
くれんけん

「この名を以ちて裁け、リリースス！」
も

「仁麗閃！」
じんれいせん

「月影刃！うっ、キモチワル…」

「大丈夫？ファーストエイド」

「ソフィ、使っても意味ないと思うぞ」

「ちよっ！皆前見る！」

「えっ？うわっ増えた！」

「俺が周りのちっこい奴相手するから皆はでっかい奴を！」

「」「」「分かった！！」「」「」

ここからは普通に行きます。

ルイスは一人で周りのスライムを相手し、残りの者はクイーンスライムを相手した。

柔らかいので中々攻撃が通じないが少しずつダメージを与え、よう

やく倒す事ができた。
所要時間はおよそ8分。

「やっと倒せたね……」

「ああ、てかコイツ何なんだ？」

「たぶん、ここに棲み付いてたんだろっな」

「じゃあ、私達が来なければこの魔物^{モンスター}は……」

シエリアの言葉で空気が重くなる。

「だけどやらなきゃ俺達がやられてた」

「……うん」

一行は勝利したが、良い気分ではなかった。
そんな気分の中で一行は夜が来るのを待った。

第4話 まさかの救援

数時間経って、ラント兵が全員集まった。
広場から外に出て、岩陰に身をひそめる。
アスベルが後ろを向いて頷く。

それが合図で、全員フェンデル軍の野営地に走った。
だが、そこはもぬけの殻だった。

「誰もいない…？　どういう事だ！？」

そこにいる誰もが驚いた。

その時ラントのある方角から、一人の兵が走って来た。

「アスベル様！　大変です！」

「どうした！？」

兵は息を少し整えると、報告を始めた。

「フェンデル軍の夜襲です！　敵は既に野営地を後にし、街へと迫っています！」

「何っ！？」

「行き違いになったの？　それともこちらの動きが向こうに気付かれたから？」

「くそっ…！！！」

ルイスは齒軋りして、一人で走っていく。

「俺達も早く戻ろう…！」

あの時無理を言っ
て着いて行かなければこんな事には
…!!

ルイスは道に倒れている兵を見る度に、自分を心の中で責めた。街の中に入ると、既にフェンデル軍が街の人を襲っていた。兵たちも応戦しているが、全くと言っていいほど歯が立たない。血が飛び交い、家は燃え、道にはひびが入っている。ルイスは刀を抜き、フェンデル兵に向かっていった。その時、ルイスの手が光り出した。

「これは……!!」

手が光り出してから体の奥底から、力が湧いてくる。そんな気がしていた。

「行ける!!」

止まっていた足を再度動かし、フェンデル兵に接近し

「火斬衝!!」
かざんしょう

刀を振り下ろすと、斬撃と共に火が噴き出し、フェンデル兵を襲う。

「しまった!もう街の中に!」

どうやらアスベル達も戻ってきたようだ。シエリアは怪我人の手当てをしている。突然一人のラント兵が叫ぶ。

「西ラント道の方からも軍勢が来たぞ!!」

その言葉にその場にいる全員が、そちらを向く。

そこには青い服に青い旗を持った軍勢——ストラタ軍がいた。

「全軍展開して攻撃開始。フェンデル軍を掃討せよ！」

先頭に立っている、隊長らしい男は眼鏡を元の位置に戻し、部下に命令した。

あっという間にストラタの軍勢が、次々にフェンデル兵を倒していく。

アスベルが隊長らしい男に近づこうとすると、フェンデル兵が立ちふさがる。

「くっ！こいつら！」

「ぐあっ！！」

後ろにいたフェンデル兵が、吹っ飛ぶ。

隊長らしい男が、両方に刃が付いている、両剣を振り回していた。

「あいつは……！？あそこにいるのは、もしかして……」

顔を見た途端昔の記憶が甦る。

背や顔つきが変わってはいるものの、確かに見覚えがある、否、アスベルにとって忘れるはずがない人物が立っていた。

「ヒューバート……！」

アスベルはヒューバートの横に立ち、戦いに加わる。

フェンデル兵を全て倒したのを確認して、アスベルはヒューバートの方を向く。

「ヒューバート…帰ってきてくれたんだな」

「少佐。掃討が終わりました」

「少佐！？お前そんなに偉くなったのか？」

ヒューバートは何も言わずに、住民がいる階段の方へ向かう。階段を登り終え、住民の前に立つと、演説のように話し始めた。

「ラントの皆さんご安心ください！皆さんの仇敵のフェンデル軍は我らストラタ軍の手により、この街から駆逐されました！」

ヒューバートは顎に手を当て続ける。

「皆さんは何故我々が来たのか、疑問に思われている事でしょう。私自身がその答えとなります」

顎に当てていた手を胸の前に持つていき、更に続ける。

「私の名はヒューバート・オズウェル。かつての姓はラントでした。先の戦いで戦死した領主アストンの息子です！！」

住民達から歓声上がる。
それを左手で制止させる。

「私は今はストラタの人間ですが、故郷ラントに関しては常々格別の思いを抱いてきました。ですからラントの苦境を知り、いてもたってもいられず、こうして助けに来たのです！」

またもや住民達から歓声上がる。

「ここで皆さんにご報告する事があります」

「ストラタとウィンドルはこの度同盟を締結いたしました。我々は皆さんの味方です!!」

第4話 まさかの救援（後書き）

（ル）「さて、とうとう始めやがったな……！！」

（雪）「げっ、ルイス……」

（エ）「まあまあ、良いじゃん♪」

（ル）「いや、今回で俺に恥かかせやがった！絶対^{ぜって}え許さねえ」

（エ）「それはあんたの勘違いでしょーが……！！」

（雪）「では、今回出てきたオリ技紹介で今回は終わります」

火斬衝^{かざんしょう}

B技 ? 2 威力210 ヒット数2

有効特性：暴星 / 火傷

使用者：ルイス

雷斬衝の火バージョン。

暴星バリアを破れる。

（雪）「では次回もお楽しみに！」

（ル）「待てええええええ……！！」

第5話 追放（前書き）

アスベルとヒューバートの決闘の所は飛ばすので、少しと言つより、結構短いです。

第5話 追放

ラントを出た所で立ち止まると、ストラタ兵に背中を押された。アスベルはヒューバートとの決闘に敗れ、ラントを追放されたのだ。一度振り返って、ラントを見た後再度歩き始めたら、後ろから聞きのれた声に呼び止められた。

「ソフィ…俺についてきたら駄目だ。街へ戻るんだ。シエリアの所へ行くと良い。彼女ならきつと…」

ソフィは首を傾げる。

ストラタ兵はぐずぐずするな！と怒鳴る。

アスベルは何も言わず、歩き始めたが、ソフィが小走りになってついて来た。

「アスベル、ヒューバート…こんな事になってしまふなんて」

屋敷の庭でシエリアは一人佇んでいた。

するとそこにシエリアの祖父である、フレデリックがやって来た。

「雨が降りそうだ。中に入っていないさい」

「もう私は昔の私じゃないわ。心配しなくても大丈夫よ」

「たとえお前の体が丈夫になったとしても心配は尽きんよ」

シエリアは俯く。

「…みんな…変わってしまったのね」

それを聞いてフレデリックは、いつものように微笑みながら話す。

「お前たちはまだ若い。これからより良い方向へ変わっていけばい

い。たとえ今が苦しくても、立ち向かう事を恐れてはいかんだよ」

「おじいちゃん…」

「ぐす…さすがフレデリックさん…良い事言うなあ」

ルイスが何処からともなく、泣きながらやって来た。

「ルイス！？何で此処に！？」

「いやあ、アスベルとヒューバートの決闘をちよつと見てたんだよね」

「じゃあ、何故止めなかったの？」

「止める必要が無いと思ったから。いやあ、それにしてもアスベルはてんで駄目だったね」

ルイスが涙をようやく止め、言った。

「どういう事？」

「ヒューバートに挑発されて、全く集中できてなかった。挑発に乗ってさえないければ、もうちょいマシだったろうに…」

ルイスは少し笑みを浮かべながら言う。

シエリアは何も言わない。

「…今のあいつを一人にしてたら、何しでかすか分かんねえ。だから俺もちよつと行ってくるわ」

そう言うのと、ルイスは走って行ってしまった。

シエリアはその背中をただ見守ることしかできなかった。

（ルイス様、アスベル様を頼みましたぞ）

その頃、アスベルとソフィは小屋の手前まで来ていた。

「ソフィ、もういい。ラントへ戻るんだ」
「…守る」

ソフィはじつとアスベルを見つめ、そう言った。
その言葉にアスベルは、目を見開いて驚く。

「はは…懐かしいな。そう言えば昔、そんな事を言われたのもこの
辺りだったか。女の子に守るって言われて悔しくて…守るのは俺だ、
って張りきったけど結局駄目だった。そして、今も…」

アスベルはその場に崩れ落ちる。
そして無情にも雨まで降りだす。

「何一つ出来やしないんだ！俺は…！あの頃も、今も…！」

アスベルは悔しそうに眼を閉じる。
そして、頭に何かとても優しく、温かい物が乗せられた。
ソフィの手だ。

雨はまだやむ気配が無い。
その雨は全てを流してしまいそうだった。
いつそ、流れてしまえば良いのに。
痛みも、苦しみも、憎しみも――

悲しみも…

第5話 追放（後書き）

（ル）「何最後の。なんかかつこよさげじゃね？」

（雪）「でしょ！春休み明けの僕は一味違っよ！」

（ル）「でも短かったけどな。いつもの半分位だよ」

（雪）「…それ言っちゃう？」

（ル）「それは置いて、たまにはちゃんと次回予告やってみよ
うかな」

（雪）「おっ、頼んだよ！」

（ル）「次回はいいよりチャード登場！」

（雪）「新オリキャラも出るかもね」

（ル）「マジか！？」

（雪）「多分！！」

（ル）「…お前作者だろ？」

第6話 死の疑惑

アスベルとソフィは小屋で雨がやむのを待っていた。

「取り乱して悪かった。俺相当に見苦しかったな…」

二人は暖炉の火で温まっていた。

アスベルは胡坐あぐらをかいたままソフィに尋ねる。

「ソフィ…このまま俺と一緒に来る気か？」

ソフィはただ黙って頷いた。

「そうか…だったらせめてソフィだけは守らないとな。それだけは…なんとしても…」

アスベルの声がだんだん弱弱しくなってくる。

アスベルは頭に手を当てる。

「…おかしいな。さっきから頭がぐらぐらする」

こんどはソフィが手を当てる。

「あたま、あつい」

「くそっ！こんな時に…」

アスベルは立ち上がろうとするが、後ろに倒れてしまう。
ソフィが思わずアスベル！、と叫んだ。

「はあ…はあ…み、水…」

「おみず、持って来る！待ってて」

ソフィは急いで小屋を出て行った。

アスベルはそれを止めることもできず、力尽きて、目を閉じた。

「はぁ…何やねん。雨が降るなんて聞いてへんで」

アスベルは声に反応して、目を開けた。
声からして女性の様だ。

「あれ？誰か倒れとるわ。大丈夫か？」

「あ……」

何か言おうとしたが、声が出ず、体も動かなかった。

「喋れへんの？…こら大変やな」

「アスベル？」

またもや小屋の扉が開き、今度は聞きなれた声のアスベルの耳に届いた。

「あなた、誰？」

「ウチ？ウチはメイリ。メイリ・アル・スロツテスや。それよりこの子風邪ひいとるみたいやけど…水持って来たんか」

ソフィは黙って頷く。

「水飲めそうか？…無理か。しゃーないなあ」

メイリはアスベルに手をかざした。
すると、メイリの手から光が出てきて、アスベルの身体を包む。

「これでだいぶマシになるやる」
「うつ…ん…」

アスベルは上半身を起こした。
すると、メイリが突然叫んだ。

「何や何や！兄ちゃんイケメンやな！！めっちゃタイプやわ。名前なんて言うん？」

「アスベル・ラント…そっちはソフィだ」

「アスベルにソフィね。覚えてたわ」

メイリが足を伸ばして座る。
その瞬間外から声が聞こえた。

「おい、この小屋怪しくないか？」

「中を調べてみるか」

どうやら二人、もしくはそれ以上いるようだ。

「ん？何かあったの？」

「ルイス！？」

次に聞こえてきたのは、紛れもないルイスの声だった。

「一般人には関係ない！どっか行ってる！！」

「いや、俺もこの部屋の中を確認したいんだけど」

「何故だ？」

「友達がラント追放されちゃってさ…もしかしたらここにいるかな
あと思つて」

「そいつの名は？」

「何で言わないと駄目なの？」

「言わない場合公務執行妨害として牢屋にぶち込んでやる！！」

「あんたらさあ…こんなんで公務執行妨害になつたら滅茶苦茶理不尽じゃねえか。ちゃんと勉強しろよ」

「貴様、舐めた態度をとるのもいい加減にしろよ！！」

剣を抜いた音が聞こえてきた。

それに合わせて、もう一人も剣を抜く。

「あんたらそれでも騎士か？一般人に剣を向けるなんて正気か？」

「騎士！？」

それを聞いてアスベルは急いで外に向かった。

「どうしたんだ！？ルイス！」

「おっ、アスベ——」

「アスベル・ラント！！」

二人いる騎士の片方が、剣を向けながら叫ぶ。

「我々と来てもらおうか」

「お前達、誰だ……？」

「何や？急に飛び出して」

「アスベル、どうしたの？」

「二人とも！出てきちゃ駄目だ！！」

アスベルが二人に向かって言う。
その瞬間二人の騎士は倒れる。

「……ルイス？」

「いや、何もしてないのに公務執行妨害なんて言われたからさ。どうせなら本当にやっちゃおうかと…」

「わあ！！！！」

後ろにいたメイリがルイスを見て、叫ぶ。

「何や！そっちの兄ちゃんもイケメンやな！名前は？」

「ルイスだ」

「やーん、メツチャタイプやわ〜」

ルイスは苦笑しながらメイリを見ている。

「そういえば、ソフィも一緒だったんだな」

「一緒に来るって聞かなくてな。それよりこいつらの目的は何だったんだ？」

「アスベル、大丈夫？」

ソフィがアスベルに尋ねる。

「何だ？怪我でもしてんのか？」

「いや、何でもない。ソフィ、ありがとう」

ルイスはアスベルの態度に違和感を感じたが、深くは聞かなかった。

「それよりこれからどうするんだ？」

「とりあえず、ここにこれ以上留まるのは危険だ。港へ行こう」

「うちもついて行ってエエか？」

「良いけど…何処かへ行く途中ではなかったのか？」

「エエねん。別にまた来ればいいだけやし」

「そうか。じゃあ行こう」

こうしてアスベルは新たな仲間と共に、バロニアへ向かうのだった。

オリジナルチャット——何だっただんだ？——

（メイ）「さっきの奴ら何やったんや？」

（アス）「あれはウィンドルの騎士だよ。でも何故……」

（ルイ）「おい、早くしないと船が行っちまうぞ」

（アス）「そうだな。急ごう」（バロニアに何かあったのか……？）

一行は何とかバロニアまで来ていた。

「よし、バロニア城へ行こう」

「バロニア城に行って何す――」

「やはりか」

後ろから声がして、振り返ってみると先程の騎士がいた。

「バロニア城へ行ってどうするつもりだ！」

「リチャード殿下に会いに行くのかな？」

「あんたらなんなん。鬱陶しいで」

メイリが邪魔くさそうに言う。

それを無視して、騎士は笑みを浮かべアスベルを見る。

「図星か。死んだはずのリチャード殿下にどうしたら会えるというのだ？アスベル」

「死んだ…？リチャードが！？どういう事だ！？」

「猿芝居をしても無駄だ。お前がとばけているのは百も承知だ。さあ、お前の知っている事を話してもらおう」

「…いい加減にしるよ…！！」

先程まで黙っていたルイスが騎士を睨む。

「リチャードが死んだ？しかもアスベルを疑ってる？ふざけんのも
いい加減にしろよ！！！」

「黙れ！犯罪者共め！！」

「ふざけんなつつたろうが！！！」

ルイスは一気に刀を抜き、騎士を斬りつける。

そして、もう一人の騎士も剣を抜かせる前に斬る。

「急所は外してる。二度とさっきみてえな事言つなよ……！！」

「ぐ……くそっ……！」

「ルイス……」

「ちょお、ヤバいで！！騎士に手え出したらアカンやん！！まあ、
スツキリしたけど……」

「確かに……逃げるぞ……！！」

一行はとりあえず走った。

（リチャード……本当に死んでしまったのか？）

オリジナルチャット——ヒーローは手を汚しても……——

（メイ）「いやあ、ルイスかつこえかったなあ」

（ルイ）「そんな事は……」

（ソフ）「うん、かつこ良かった」

（ルイ）「ソフィまで……」

(メイ)「もう、さっきの調子でどんどん騎士を倒してっや」
(ルイ)「…俺にそこまでの罪を被れと？」

一行は聖堂に辿りついていった。

「アスベル、この建物に何かあるの？」

「…昔この聖堂の中に隠し通路の入り口があった。今はどうなんだろうな」

「ほな、行ってみるか？」

「…そうだな」

アスベルは頷く。

此处に来たのも、何かある気がしたからだ。

アスベルが扉に近づこうとすると、ソフィが思い切り扉を殴って破った。

「おいおい、また扉を破ったのか」

「…また？」

ソフィは首を傾げながら尋ねる。

「あ、いや、そうじゃないか。ごめんごめん間違えた」

「それにしてもソフィは凄いな。扉を素手で破ってもうたで」
「とにかく中に入ってみよう」

一行は聖堂に入って行った。

隠し通路に入って、少し進むと金髪の青年が蹲っていた。

「あれは…！」

アスベルとルイスは青年の元に走る。
それは、二人の良く知る人物だった。

「リチャード！？」

「無事だったか。良かった！」

「君達は…」

「アスベルとルイスだ！」

「アスベル…ルイス…本当に君達なのかい？」

リチャードは赤い左目でアスベル達を捉えて、嬉しそうに優しく微笑んだ。

第6話 死の疑惑（後書き）

（ル）「本当に出したな」

（雪）「はい。とりあえず紹介でもしときましようか」

メイリ・アル・スロツテス

Mayli.al.Srotes

緑色の肩ほどまである髪の20歳。

関西弁で、一人称は『ウチ』。

イケメン大好きの面食い。

武器は二丁拳銃で、A技は拳銃技（パスカルのA技と同じ）で、B技は万能術（ほぼオリジナル）。

（メイリ）「ほな、次回もお楽しみに」

（雪）「自分の紹介だけさせて終わらせやがった!!」

第7話 玉座での真相（前書き）

少し小説版の話が混じっています。

第7話 玉座での真相

「こんな所で君達とまた会えるとは思わなかったよ」

リチャードは嬉しそうに微笑む。

「それはこっちの台詞だ！お前が死んだと聞かされて驚いたんだぞ」
「僕が…死んだ…」

リチャードの顔が一瞬曇る。

その瞬間アスベルは自分達の立場を思い出したのか、敬語に直して話す。

「無事で本当に良かったです。お立ちになれますか？リチャード殿下」

リチャードの腕を首の後ろに回し、立ち上がらせる。

「アスベル…君は…」

「やはり生きていましたか。リチャード殿下」

格好は違うが、二人の騎士が現れる。

どちらもウィンドルの騎士だろう。

「…セルディクの手の者たちか」

騎士たちは何も言わずに剣を構える。

アスベルもいつでも抜刀できるように構えるが、ルイスが前に立つ。

「お前はリチャードを守ってる」

「いや、俺も――」

「病み上がりはすっ込んでろっての」

「…分かってたのか」

ルイスは当然と言って、刀を構える。

メイリもルイスの横で両手に一丁ずつ銃を構える。

「お前銃なんて使うのか？」

「せやないとこんなもん出してへんで。それに…」

メイリはリチャードの方を見て、笑みを浮かべる。

「リチャードイケメンやもん！絶対守つたる！！」

「おいおい…」

そんな話をしていると、騎士は二人に向かっていく。

「騎士学校で何習ってたの？そんな真つ直ぐ来て攻撃が当たるとでも？」

ルイスは騎士の攻撃を避け、刀を振り上げ――

「火弾衝かだんしょう！！」

一気に振り下ろし、火の弾を出現させる。

その火の弾は騎士に直撃し、騎士は倒れる。

「ほんならウチも…咲き狂くう空いのちの生命よ！」

詠唱を終え、銃を騎士に向ける。

「エアームーム!!」

銃から黄色い弾が発射され、騎士に当たった途端、花の様な爆発を起こした。

「思い知ったか!」

「これがウチとルイスの連携や!」

ルイスとメイリが何もない方に、掛け合いをしている間にリチャードはアスベルに話しかけていた。

「アスベル…君達は本当に僕を助けに来てくれたんだね。君達が来てくれなかったら僕は本当に死んでいたと思うよ…ありがとう。アスベル」

「はっ。間に合ってよかったです!」

アスベルはリチャードに向かって敬礼をする。

「そんな他人行儀な話し方をしないでくれ。君と僕の仲じゃないか」

「しかし、立場がごいますので」

「僕がこうやって頼んでもかい?」

「殿下…」

アスベルは困ったように頭を?く。

「…わかった。それなら昔の通りする。それでいいか?」

「ありがとう。やはり君にはそうやって話しかけてもらうのが一番しつくり来るよ。おや?この子は…」

リチャードはソフィの方を見る。
ソフィはそれに首を傾げる。

「ソフィ、リチャード殿下だ。ご挨拶を」

「ソフィ…死んでしまったと聞かされたが…」

「例の花畑で会ったのでそう呼んでいるんだが、本人かどうかはわからないんだ」

「…本人だろう。ソフィと同じ雰囲気を感じるよ。君もそれがわかってるからソフィと呼ぶんじゃないのかい？」

「それは…」

その時、リチャードが突然苦しそうに蹲る。

それに気付いたルイスとメイリも駆けつける。

「大丈夫か？リチャード」

「わからない…急に胸が…」

「向こうから声がするぞ！！」

姿は見えないが誰かがこちらに向かってきている。

恐らく、先程の騎士の仲間だろう。

「詳しい話は後にして、さっさとここ出るぞ！」

「ここを進んだ先に外へ通じる通路がある。そこから街道を真っ直ぐ行くとグレルサイドに至る。僕はそこを目指していたんだ」

リチャードが言うには、グレルサイドのデール公という人なら、味方になってくれるかもしれないらしい。

それを聞くと、一行は急いで外に向かった。

(メイ) 「もう何や〜」

(アス) 「どうしたんだ？」

(メイ) 「このパーティーイケメン多いやんか〜。リチャードも入って更に増えたわ〜」

(リチ) 「それはありがとう。メイリさん」

(ルイ) 「それはそうと、メイリはこんな事してて大丈夫なのか？する事あるんじゃない？」

(メイ) 「あゝエエねんエエねん。探しとる人ならおるけどそいつメツチャしぶといから」

(ルイ) 「へー、その辺で死んでるって心配はないわけか。一回会ってみてえな」

(メイ) 「せやなあ。ウチも早く会いたいわあ」

一行はようやく外まで出てくる事ができた。

「メツチャ明るい」

リチャードは先程よりも苦しそうだ。

「リチャード、大丈夫か」

「心配はいらない…ちょっと疲れたただだよ」

「少し休もう。どこか一息つける場所はあるか？」

「街道沿いに小屋があったはずだよ。でも、僕の事を心配して立ち寄のならその必要は…」

「まあまあ、俺も疲れたしその小屋行こうぜ」

そう言つて小屋がある方に歩いて行つた。

小屋はすぐ近くに会つた。

リチャードは小屋の手前で、ここで良いと言つてその場に座つた。アスベルもソフィに遠くに行かないよう注意し、リチャードの近くに座つた。

ルイスとメイリもそれに続いた。

「リチャード。王都で何があつたのか教えてもらえないか？」

「父上を殺したのは…王家に忠誠を尽くすべき、騎士団の一隊だ」
「何だって!？」

ある時、セルディクがフェンデルの新兵器を一部極秘入手した、ついでにはそれを見て欲しいという事でファードイナント四世に報告してきた。

そして、半日ほど前セルディクがかなり大きな箱を持ってやって来た。

リチャードが箱の中身を確認したところ、仲に入っていたのはただの剣や槍だった。

「これのどこが新兵器なのだ!!」

ファードイナント四世はセルディクに問いただした。

すると、セルディクは箱の中から剣を握り――

「これはこうして使うんですよ…兄上！」

刹那、セルディクは剣を鞘から引き抜き、ファードイナント四世を突き刺した。

刃は腹から背まで貫通していた。

そして、ファードイナント四世が倒れる前に、剣を引き抜き振り下ろし、ファードイナント四世の首を落とした。

「叔父上…!!よくも…!!」

リチャードと周りにいた護衛の兵士は、全員剣を鞘から引き抜きセルディクに向かって行った。

セルディクはリチャードの攻撃を受け流し、部下に命令した。

「武器を取れ！片を付けるぞ！！」

セルデイクの部下たちは、すぐさま剣を引き抜き、護衛の騎士が動揺している間に斬りつけた。

「よくも父上を…っ！！！」

リチャードとセルデイクの剣が交わった。

リチャードは何度も何度も剣を振るが、セルデイクには掠り傷すら付けられない。

逆にセルデイクの振るった剣が、リチャードを無情にも斬り裂いた。即死には至らなかったものの、リチャードはあまりの痛みに膝をつく。

すぐ側には、先程セルデイクによって落とされたファーディナント四世の首が転がっていた。

まるで、仇を、復習をとでも言わんばかりに焦点の合っていない目が、こちらを捉えているような気がした。

「ふん。大人しくしていれば、苦しまず逝けたものを」

セルデイクは止めを刺そうと、振りかぶる。

リチャードは無我夢中で、空の木箱をセルデイクの足元へ押しやった。

箱は、セルデイクの足に当たり、セルデイクはよろめいた。

その隙を見計らって、リチャードは相手の利き手目掛けて渾身の一撃を放った。

セルデイクはかわそうと身をよじったが、かわせず、刃がセルデイクの腕を掠めた。

しかし、致命傷を負わせることはできず、部下に守られながら引き下がった。

「…この手で打ち取れないのは口惜しいが、仕方あるまい。後は任せた。王子を討ち、末代までの手柄にせよ！！」

セルディクと入れ替わりに、槍を持った部下がりチャードを囲む。

「殿下、お覚悟を！！」

リチャードは唇を噛み、セルディクの部下達を睨みつけた。
深く息を吐く。

その時、左目の色が黄金の様な色から、周囲と同じような赤色になった。

その瞬間、バロニア城の玉座に無数の断末魔が轟き、周りはセルディクの部下達の鮮血が舞った。

第7話 玉座での真相（後書き）

（ル）「おい、最後の方、ほとんど小説のパクリじゃねえか」

（雪）「失礼いたしました。気を取り直して、オリ技紹介に行ってみましょう」

火弾衝かだんしょう

【B技／？2／威力：210／クリティカル率：40／ヒット数：2】

その名の通り、刀を振り下ろし敵に火の弾をぶつける技。
暴星バリアを破れる。

エアブルーム

【B技／？2／威力：410／クリティカル率：120／ヒット数：5】

黄色い弾を発射し、敵に被弾した時、花のような爆発を起こすメイリの術。

詠唱は

『咲き狂う空の生命よ』
くう いのち

（雪）「オリ技が増えたら技紹介だけの回とか作ってもいいかも」

（ル）「何回も更新する事になるぞ？」

（雪）「その位やるよ」

（ル）「まあ、頑張れ」

第8話 やつと会えました（前書き）

小説の台詞がーか所だけあります。

第8話 やつと会えました

「——そして、わずかな隙を衝いてあの通路へ逃げ込み脱出の機会を疑っていたんだ」

「…騎士団が、国王陛下を手にかけた…」

「父上が死んだ事ももちろんだが騎士団に裏切られたという事実も僕にとっては衝撃だった」

「俺も騎士学校の生徒だったんだ…」

アスベルは申し訳なさそうに俯く。
それに優しくリチャードは微笑む。

「話には聞いていたよ。家を出て騎士学校に入ったって」

「親父が死んで跡を継ぐ事になったので辞めたんだ。もしあのまま騎士学校にいたら今頃俺も…」

「お前を狙ってたかもしれないってか？」

「アスベルはそんな事せえへんやろ。命令でも無視する思うわ」

ルイスが苦笑しながら言うと、続けてメイリはとてもにこやかに言った。

「そうだよ。君達は僕を助けてくれたじゃないか。七年前のように。暗い地下通路に身を潜めている間、君の事を考えていたよ。ここに君がいてくれたら、と。そうしたら本当に君が現れた。僕がどれだけ嬉しいと思ったかわかってもらえるだろうか」

「…そっぴアスベルはこれからどうするんだ？ ラントには…戻らないよな」

「どういう事だい？」

リチャードが先程とは一転、真面目な表情に戻し尋ねる。

「戻れなくなっただ。例のストラタの同盟のせいで」

「ストラタとの同盟？それは何の話だ？」

アスベルはリチャードの返答に驚き、知らないのか！？と尋ねる。
もちろんリチャードは知らないと答える。

リチャードによると、ファーディナント四世はストラタに対し強硬姿勢を貫いていた。故にストラタとの同盟などあり得ないらしい。

「しかし現に今、俺の故郷はストラタに進駐されている。そうなたのはつい最近だが」

「王都の反乱と時期が同じ…という事は…」

「セルデイク…だろうな」

四人が話しあっているとソフィが走ってきて言った。

「アスベル大変！誰か来る！」

四人は立ち上がりソフィの走って来た方向を見る。
すると剣や弓を持った騎士が五人現れた。

「見つけたぞ！殿下だ！」

「しまった…もう追っ手が」

「リチャード、無理すんなよ」

ルイスが言つと、リチャードは何も言わずに剣を抜いた。

「しつこい奴は嫌われるって親に習わなかったかよ！！」

ルイスが剣を持った騎士に対し、魔神剣、衝皇震、裂壊桜の順に技を繰り出し倒す。
他も丁度倒したところらしかった。

「この兵たちは…」

「叔父のセルディク大公…今や国王を騙るあの男の手の者だよ」

リチャードは剣を納める。

「皆、聞いてくれ。デルの元に辿り着いたら僕はすぐに兵を挙げ
る。父上の敵を討つためだ！」

リチャードは玉座の間での惨状を思い出していた。

彼は絶対にセルディクを許さないだろう。

目の前で殺されたのだから。

「皆、僕と共に戦ってくれないか？僕にはこれからも君達の力が必
要なんだ。頼む」

「…わかった。どこまで出来るかわからないが俺に出来る限りの事
はしよう」

「まあ、俺はアスベルについて行くだけだから」

「ウチも行くぞ！お城かぁ、楽しみやわぁ」

「早速目的忘れてないか？」

アスベルはリチャードに手を差し出す。

それはアスベルなりの、これからよろしくという意味なのだろう。

「ああ…ありがとう。ありがとう、皆！」

リチャードは差し出された手を握り返す。

「こうしていると七年前の友情の誓いを思い出すな…」

アスベルとリチャードの横にソフィが寄ってくる。

「ソフィもやりたいのか？」

ソフィは何も言わずにただ頷く。

そして手を重ねた。

その瞬間、リチャードが突然ソフィの手を弾いた。

「二人とも…急にどうしたんだ!？」

「へ、変だな…急に悪寒が…」

ソフィはおびえてアスベルの後ろに隠れる。

「リチャード、大丈夫か？体の具合が良くないんじゃないか？」

「僕なら大丈夫だ。それよりもすぐにグレルサイドへ向かおう」

オリジナルチャット ————— 男勝り…？ —————

(ルイ) 「そっぴやさ。メイリが捜してる人って他にはどんな特徴があるの？」

(メイ) 「一言で言うとな変人やな」

(アス) 「他には？」

(メイ) 「えー…天然やけど頭は良いんよ」

(ルイ) 「ふむふむ」

(メイ) 「それから研究が大好きで…」

(アス) 「頭が良くて、研究が大好き…」

(メイ) 「後風呂が嫌いでも下手したら一週間入らんねん」

(アス) 「それって…女性か？」

(メイ) 「せやけど？」

(ルイ) 「…言っとくけど男でもどうかと思っぞ」

一行はウォールブリッジを見つけた所で岩の陰に隠れる。

「橋がそのまま砦になっているのか…」

「警備しているのは叔父の軍勢かい…？」

アスベルは黙って頷く。

「リチャード、別の道はないのか？」

「うーん…他の行き方もあるにはあるけれどどれも王都を經由しないと…」

ソフィがふと気配に気付き、後ろに振り返る。

「今王都へ戻るのは危険過ぎる。弱ったな…」

ソフィは気配がした方に歩く。

そこにいたのは先端が赤い、白い髪で動きやすそうな服を着た少女だった。

気にもたれ掛かって寝ている。

少女は目を擦り、ゆっくりと瞼を開く。

そして立ち上がり、ゆっくりとソフィに歩み寄る。

少女はしっかりとソフィの確認した後、目を見開きソフィの肩に触れる。

「…！！」

「——ぐぼばあ——！！」

肩に触れた瞬間、少女はソフィに思い切り吹き飛ばされる。

音に気付いて全員駆けつける。

「ソフィ！？どうした！何があった！？」

ソフィはアスベルの後ろに隠れる。

「あの人が…触った」

「何っ！触っただって！？…えっ？触った？」

吹き飛ばされた少女は右手を見て呟く。

「さ、触れた…今触れたよね…」

少女はもの凄いスピードで腕を回しながら走って帰って来た。

「もう一回！お願い！もう一回触らせて〜」

「何者だっ！？」

アスベルはいつでも剣が抜けるように構える。

「あたし？パスカル！ぴちぴちの二十二歳！よろしく〜」

「えっ？二十二歳！？」

「問題点そこ！？」

「ん？パスカル！？」

「その声は…メイリ！？」

二人は姿を確認すると抱き合おうとする。

だが、メイリは直前でパスカルの肩を掴む。

「あんたまた風呂入ってへんやろ！」

「いやゝ入ったよ。一週間前に」

「それは入ったって言わんねん！」

「まさか…メイリの捜してた人って…」

「うん——」

メイリはパスカルの肩を軽くたたく。

「パスカルや」

第8話 やつと会えました(後書き)

(メ)「やつと会えたわぁ」

(雪)「そうだねえ」

(メ)「次回は地下遺跡やな」

(雪)「そうだねえ」

(メ)「…次回もお楽しみに」

(雪)「そうだねえ…ってあっ!ごめん!ちゃんと話聞くからああ
!」

第9話　また置いていかれた？

「メイリ」

「ちよっ！やめえ！あんた風呂入ってへんのやろ！？」

「いや、だから一週間前に…」

「せやからそれは入った言わんねん！！」

パスカルが抱きつこうとするのを必死に食い止めるメイリ。

「あの…あなたがメイリの捜してた人？」

「うん、そだよ！…いや、メイリがこのパーティにいた理由がわかったよ」

パスカルが満面の笑みでメイリを見る。

メイリは何の事かあまり分かっていない。

「このパーティ、メイリの好きそうなイケメンばかりだもん」
「せやろ！せやろ！ウチもう感激やで！！」

メイリはテンション高めでパスカルの手を掴み上下に振る。

「…じゃあ、俺達は行くんで…」

「ちよい待ちいな！このままお別れなんか！？そうなんか！？」

「いや、そう言われましても…」

ルイスが行こうとすると、メイリが半泣き状態で止める。

そして、二人は何かゴチャゴチャやっている。

「あの二人は仲が良いね」

「そうだな」

リチャードとアスベルが子を見守る親の様な眼で見る。

その時パスカルがソフィもルイス達の方を見ている事に気付き、これはチャンスとばかりに触ろうと近付く。

しかし、後少しという所でソフィに気付かれ、またもや吹っ飛ばされる。

「いたたたた…」

「そう言えばパスカルは何故ソフィを触ろうとしたんだ？」

「いや、まさか触れるとは思ってなくてさ」

「どういう事だ？」

パスカルは戻ってきながら説明する。

「ほんのついさっき、その子の幻を見たんだよね」

「幻…？それはどういう意味だ？ソフィの事を何か知っているのか！？」

「うーん、口で説明してもわかんないんじゃないかな」

パスカルは何かを考えるように頭を掻く。

そして、思いついたように目を見開く。

「実際に見た方が早いと思うよ。すぐそこだし」

そう言つてアスベル達の後ろ側を指差す。

行つてみると、その地面に不思議な模様が描かれた台座があった。

「これは…？」

「これを使つと地下にある遺跡に行けるんだけどね。幻があるのは

そこ」

「遺跡だつて…？」

リチャードが興味ありげに尋ねる。

「期待しないで潜ったんだけど、結構面白かったよ！」

パスカルは笑顔で感想を述べた。

「結果的に塞がってる端を通らずに反対側にも来られたしね」

アスベルとリチャードは顔を見合わせる。

「遺跡の中に兵士はいたかい？」

「いなかったよ。あたしの他はだれも」

パスカルは右手を大きく振り否定する。

「どうする？アスベル」

「行ってみよう。このままここにいてもどうにもならない。ソフィの幻の事も気になるし…」

そう言い、アスベルはソフィを見る。

「わかった。君がそう言うなら僕に異存はないよ」

「決心ついた？そんじゃ、一つ皆で潜るとしますか！」

「…一緒に行くのか？」

「うん」

「パスカルさんに遺跡を案内してもらおうと言う事で良いのかな？」

「もちろん！」

「…そうだな。わかった。一緒に行こう」

という事でアスベル、リチャード、ソフィ、パスカルの四人は遺跡に入った。

その時ルイスとメイリはというと…

「あれ？アスベル達どこ行った？」

「パスカルもおらへん…まさか」

「置いてかれた！！？」

二人は見事にハモる。

「おい冗談じゃねえぞ！あいつらマジで何処行きやがったんだ！？」
「もしかしたらウォールブリッジか！？」

二人は急いでウォールブリッジに走る。

門の前まで来ると当然ながら兵士に止められた。

「おい！貴様ら何者だ！！」

「いや、ちょっと友達を捜してるんだけどここに誰か来てないか？」

「誰も来ていないが…？」

「ここ来てへんのか！参ったな…パスカル達どこ行ったんやろ」

「一体誰を捜しているんだ？」

「えーとな。美男美女が揃った四人組や」

メイリが真面目に言うと、ルイスと兵士はそんなので分かるはずがないだろう…と訴えるような眼でメイリを見る。

「あれ？わからへん？どう言えばエエかな…」

「もう良いよ。あの、すいませんでした。行くぞ」

ルイスはメイリの首根っこを掴み引きずっていく。

「もしかしたら向こう岸に向かったんちゃう？」
「どうやって？」

メイリは周りを見る。
そして、川を指差した。

「泳いで」
「行けるわけねーだろー!!」
「人間諦めたらアカンで！どんな困難にも…」
「分かった！ちよつと黙つててくれ」

ルイスは顎に手を当てて考える。
メイリを見た後、川を見る。

ルイスは何か閃いたように目を見開く。

「どしたん？」
「泳ぐか」
「…ほんの冗談やったんやけど」
「人間諦めたらアカン、だろ？」
「そうは言つてもやなあ…」
「……………」

二人は顔を見合つたまま動かない。

「やっぱ今の無しな」
「せやな」

その後、ルイス達がいらない事に気付いた四人が戻ってきて、一緒に遺跡に向かった。

オリジナルチャット ————— 結局ね —————

(メイ) 「ウチら置いてくなんて酷いやんか」

(ルイ) 「滅茶苦茶焦ったんだぞ」

(パス) 「ごめん、二人とも！」

(アス) 「ごめん」

(リチ) 「すまなかった」

(ソフ) 「ごめんね」

(メイ) 「ちよつ、そんな謝られたら言いたい事も言えへんやんか」

(ルイ) 「そうだ！そうだ！」

(パス) 「そんな事言われてもさあ」

(メイ) 「大体前も急におらんかったやんか！！」

(パス) 「いや、何か面白そうなのがあつたからさあ……」

(メイ) 「今回に関してはウチら川泳ぐ事になりかけてんぞ！！」

(アス) 「結局言いたい事言ってるな……」

(ルイ) 「…そうだな」

台座に乗った瞬間光に包まれたかと思うと、一瞬で見知らぬ場所に
着いていた。

「ここはどこだ!？」

「遺跡の中だよ」

「遺跡?何の話や?」

「あゝそっか。二人は聞いてなかったんだっけ」

パスカルは先程言った事をルイスとメイリに説明した。

「なるほど…ソフィの幻か」

「しかもここは地面の中なんか…」

「てか、どうやってここまで来たんだ？」

「別に大した事してないよ。適当にチャカチャカポンってしただけ」
「全然分かれへん」

メイリがパスカルの意味不明な言葉にツツコミをいれる。
だが、当の本人は全く気付かずに続ける。

「ね！ね！凄いでしょ！地面の下にこんな広い所があるんだよ？
驚きだよね！！」

「これが遺跡か…僕達の街の様子とはまるで違ったものに見えるね」
「遺跡を作ったのは大昔のアンマルチア族だからね。違ってるのは
当然でしょ」

「アンマルチア族…？」

「アンマルチア族ってのはこうやって世界各地に残っている遺跡を
作った種族の事ね」

「もしかしてパスカルさんは考古学者なのかな？」

「んゝまゝそんなところかもね。参考になった？だったらお礼に触ら
せて！ねえねえ！」

パスカルはソフィに手を伸ばす。

しかし、ソフィはアスベルの後ろに隠れる。

そして――

「さわるの、だめ」

その言葉でパスカルは少し拗ねる。

「むっけちんぼめ」

「早く先へ行かないか？」

「はいはい」

パスカルは右手と右足を上げて返事をした。
一行の遺跡探索が始まった。

第9話　また置いていかれた？（後書き）

（雪）「今度からこれの更新スピードを上げた方が良くかもしれない」

（メ）「何で？」

（雪）「今回でも分かるように全然進まないんだもん」

（メ）「確かに。今回は遺跡入る所までしかいかんかったもんなあ」

（雪）「てか、10話にしてまだ地下遺跡だよ！？『未来への系譜編』までいけるだろうか？」

（メ）「話数制限無いんやからいけるやろ？」

（雪）「いや、気分的に」

（メ）「それは頑張れや！！」

第10話 ウォールブリッジ地下遺跡より

一行は地下遺跡攻略を頑張っていた。

「いや、こつちだよ」

「そつちは来た方向やんけ！」

「こつちじゃねえ…の…？」

ルイスは移動する床に乗り、一人見当違いな方に行ってしまう。

「こつちか？…うおっ！！！」

ルイスが移動した先は魔物モンスターが大量にいた。

「ヤベツ！ちよつ、うわあっ！！！」

ルイスはまた別の床に乗り移動してしまう。
そして、また大量の魔物モンスターに襲われた。

「ルイス！？何やってるんだ！？」

「助けてくれええ！！！」

「でも、床が無い」

「そんなああ！！！」

ルイスは必死に逃げ回り、何とか床に乗って戻って来た。

「はあ…はあ…」

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃ…ない…」

ルイスは袋に入れていたアップルグミを食べる。

「さて、進むか」

「あっちだよ！」

パスカルはルイスが行ってしまった方を指差す。
ルイスは冷たい目でパスカルを見る。

「またあっちに行くのか？」

「大丈夫！今度は皆行くから！」

パスカルは親指を立ててウインクする。

ルイスも腹を括り、行く事にする。

まあ、行かなければ進むも何もないのだが。

「あつた〜！これこれ！これが幻を映す装置だよ」

アスベル、リチャード、ルイスの三人は興味深そうに装置を見る。
その時、ソフィが何かに気付き振り返る。

「何かがこっちに近付いてくる。変な足音が…聞こえる」

すると、青いトカゲのような魔物モンスター——メルクリウスが現れる。

「うわっ、何これ！」

「襲ってくる！」

ルイスが刀を抜き、火弾衝を浴びせる。

するとメルクリウスは後ろを向き、ルイスに尻尾を叩きつける。それをガードすると、後ろからアスベルが魔神剣を放つ。

その後、リチャードが甘言、雷神剣、秋沙雨の順に素早く斬りつける。

それを全て食らったメルクリウスは体を回転させ、全員を吹き飛ばす。

だが、パスカルがウィンドニードル、メイリがエアールームを食らわせる。

「なんや、まだ倒れへんのかいな！」

「来たれ安息無き剣、連なるは悲痛！レストレスソード！！」

リチャードのレストレスソードでメルクリウスの体力がかなり減る。

「後少しだ！」

ソフィは刀輝、鷹爪襲撃、双月の順に拳や蹴りを叩きこむ。

すると、メルクリウスは赤い光を出し、ソフィを石化させてしまう。そしてメルクリウスの長い尻尾が石化したソフィを襲う。

「やらせへん！そや！氷霧の白薙^{フリージング}！！」

メイリの流転からの氷霧の白薙によってメルクリウスは倒れた。

「ふいー、危なかったなー」

「でもま、流石俺達ってどこかな」

「1対6できつかったんだよ？」

「…それを言うなよ」

ルイス、メイリ、パスカルが何やらやっているがそんなことは放っておく。

「この装置はどうやれば動く？」

アスベルはパスカルに尋ねる。

それに気付いたパスカルは近寄ってきて答える。

「簡単だよ。横の所にあるのをパカパカってやって最後に大きいのをピコってやれば良いの」

「わかったか？アスベル」

「悪いが…全然」

アスベルは手を横に広げる。

「まあ、やってみればわかるって。簡単だから」

アスベルは一通りボタンを見た後、適当に一つ押してみる。すると、横に浮いている物が暴走し出す。

驚いたアスベルは（全員驚いていたが）急いで、先程と同じボタンを押して止める。

「しょくがないね。あたしが模範を見せますか」

アスベルとパスカルは入れ替わる。

（最初からパスカルがすれば良かったんじゃないか？）

（…確かに）

パスカルが操作すると、装置は正常に動き出した。

「動いた…」

思わずリチャードはそう言ってしまった。

装置は幻を映す。

すると、そこにはソフィと瓜二つの少女が映しだされた。

「これは…」

「わたし…？」

「これがパスカルさんの言っていたソフィの幻なのかい？」

リチャードの問いにパスカルは黙って頷く。

アスベルはソフィと幻を見比べる。

「確かに…ソフィとよく似ている…」

「ね？本物そっくりでしょ。あたしがソフィを見て思わず触っちゃったのも頷けるでしょ？」

パスカルは指を動かし、ソフィを触ろうとする。
しかし、パスカルはメイリに後頭部を叩かれる。

「頷けへんわ！」

「いたたたた…」

「…この装置もアンマルチア族が大昔に作った物なのかい？」

「たぶんね。まあ、その辺は色々と調べ中なんだけど」

その時、装置の幻が消える。

「あゝあ。消えちゃった」

「ソフィ、今の幻を見て何か思い出したりしたか？」

ソフィは首を横に振る。

「駄目か…」

「まあ、気長に行こうぜ」

「ソフィと関係があるのかどうかも、あれだけではなんとも言えないね」

「説明書きでもあれば良かったんだけどね。ここんところに書かれてる文字も消えちゃってほとんど読めないんだよね。かるうじて読めるのが…」

パスカルは装置を見る。

「ラ…ムダ…って書かれている所だけど…その先が…」

「ラムダ…？どういう意味だ？」

パスカルは手を横に振る。

要するにわからないという事だろう。

「ラ…ムダ…昔どこかで…聞いた事があるような…」

「ラムダ…パスカル、他にも何か分からないのか？」

「ん、今のところはそれだけだね」

「とりあえず先へ進もう。ここでこうして考えていてもすぐに答えは出ないだろう」

一行は出口に向かう事にした。

オリジナルチャット——もう二度と——

(ルイ) 「いやあ、驚いたなあ」

(メイ) 「めっちゃ似とったもんなあ」

(リチ) 「とりあえず出口に向かおう。話はそれからだ」

(ルイ) 「そうだな…今度は気をつけないとな」

(メイ) 「え？何に？」

(ルイ) 「あの動く床だよ」

(パス) 「そうだよ。一人で行っちゃったらあたし達は助けに行けないんだからね」

(ルイ) 「…左様でございますね」

入って来た時と同じ様な台座に乗り、一瞬で外に出ると、そこは先程とは別の場所だった。

「どうやら無事に対岸へ渡れたようだ」

「これで予定通りグレルサイドへ向かえるね」

その言葉に反応したパスカルが振り向く。

「お、グレルサイドへ行くんだ」

「ん？言ってなかったっけ」

「パスカルさん、遺跡の中では色々とお世話になったね。ありがとう」

「あたしも一緒にグレルサイドに行こうかな」

それを聞いて、少し低めだったメイリのテンションが一気に上がる。

「せや！行こう！グレルサイド！！いやあ、ウチも行きたかったんだよなあ、グレルサイド！」

「…良からぬ目的があって付いて来ようとしているんじゃないだろうな？」

「ウチは別に…」

「くくくく…ばれたか…」

パスカルは笑みを浮かべる。

その場にいる全員が身構える。

「お前…！？」

「ズバリ！！あたしの目的はソフィと仲良しになる事だよん」

「はあ…？」

「ソフィの事もっと知りたいし、調べたいし、触りたいの！悪いけどあんたには興味はないですよ」

ソフィはいつの間にかアスベルの後ろに隠れていた。

自己防衛本能というものが働いたのだろうか。

「アスベルと…え〜と、何だっけ」

「リチャードだよ」

「ルイスだ」

「ん、ルチャードとリイスね」

「全然違うわ…！！」

ルイスとメイリのWツッコミが炸裂した。

「ねえソフィ〜、この中で誰が一番好き？」

「…アスベル」

「むお〜！悔しい〜！仲良くなりたい〜。ソフィと仲良くなりたいたいよ〜」

「その前にまず皆の名前を覚えよな」

メイリが悔しがるパスカルの肩を掴む。

「この人は…悪い人ではない気がするよ。一緒に行っても平気じゃないかな」

「リチャードが言うんだったら大体間違いないだろ。昔からリチャードの勘は結構当たるし」

「…そうだな。もうしばらくこのまま行こうか」

「ありがと。やっぱり旅は道連れって言うしね！」

その後ろでメイリが滅茶苦茶嬉しがっていたのは言うまでもない。

「それじゃ、グレルサイドへ向かうか」

一行は正式にパスカルとメイリを迎え、グレルサイドへ向かう事にした。

第10話 ウォールブリッジ地下遺跡より（後書き）

（雪）「いやあ、久々の二日連続投稿だね」

（ル）「それは俺達にとってもありがたいな」

（雪）「今回はウォールブリッジ地下遺跡からお送りしました」

（メ）「それは見てくれてるやろうから、わかるやろ」

（雪）「いや、そうは言うけど…」

（ル）「そうだぞ。こんな事より次回予告でもしたらどうだ」

（雪）「…明日天気予報雨だったっけ？」

（ル）「明日は那覇以外晴れが曇りだよ！！」

（雪）「そっか。じゃあ中国^{この辺}地方は雨は降らないと」

（メ）「それはエエから次回予告」

（雪）「えーと、今回はグレルサイドよりです！」

（ル）「それでは次回も」

（メ）「お楽しみに」

第11話 伝統の湖畔街―グレルサイド

「なんかさあ、遠くね？グレルサイド」

ルイスが誰にという訳でもないが、とりあえず愚痴ってみる。
それに言い返したのはリチャードだった。

「もうすぐだけど…確かに遠いね」

「だろ？しかもジャガイモなんてあそこだけで作ってるわけでもないのにわざわざデイスカバリーしなくてもなあ」

そう、ルイスとリチャードは少し離れた所で見ているが、アスベル、ソフィ、メイリ、パスカルの四人はジャガイモをデイスカバリーしている。

何故ルイス達が離れているかというと、先程リチャードの体調が悪くなったようなので休んでいたところで、ソフィがジャガイモを見つけ、四人でデイスカバリーに行ってしまった、と言う事だ。簡単に言えば。

「しかし、どうしたんだ？さっきもソフィにあんな態度をとって」

「…僕にもわからないんだ。急に悪寒がして…」

「そうか…まっ、体調が悪いみたいだし、あんま無理すんなよ」

「そうだね。ありがとう」

そして、またアスベル達の方を見る。

今度はジャガイモを作っているらしい人と何か話しているらしい。

「…あいつら目的を忘れてないだろうな」

「…やはりアスベルは変わらないね」

「だな。まあ、昔のヤンチャっぷりはだいぶマシになったけどな」
「確かにね。でも君もあまり変わってないようで安心したよ」
「えっ！？俺も！？」

ルイスは驚いて目を丸くする。

「でも君の場合は少しヤンチャっぽくなってしまったかな？」
「要するにまだガキっぽいつて言いたいわけだな」

ルイスはジト目でリチャードを見る。
それに対しリチャードは頬笑みを返す。

「でも、一番変わっていないのは……」
「ああ、ソフィだな」

リチャードは真剣な顔で頷く。

「彼女は昔と何も変わっていない。それに僕は死んでしまったと聞かされた」

「俺もそう聞かされたし、人間ならそんなこと絶対にありえない……」
「……もし彼女が人間でないとしたらどうする？」
「そんなの決まってるだろ？——」

ルイスはリチャードの方を向いて微笑む。

「今まで通りで何も変わんねえよ。ソフィはソフィだからな」
「フフ、本当に君も変わらないね」
「それは褒め言葉として受け取っておくよ」

そう言ってルイスは立ち上がり、リチャードに手を差し伸べる。

リチャードはその手を握り、立ち上がる。

「さ、行くか。おーい！お前らー、そろそろ行くぞー！」
「わかった！」

アスベル達と再度グレルサイドへと向かった。

オリジナルチャット——決して違う——

（ルイ）「それにしてもお前マンガとかなり読んでんだろ」

（リチ）「おや、どうしてだい？」

（ルイ）「普通の奴ならあんな所で『もし人間じゃなかったら——』なんて言わないだろ」

（リチ）「先に『人間ならそんなこと絶対にありえない』と言ったのは君だよ？」

（ルイ）「そりゃまあ、そういう流れだったからだろ？」

（リチ）「でも、人間でないなんて発想は中々出てくるものじゃないと思うけど」

（メイ）「何の話かわからんけど、要するに二人ともマンガオタクなんやな？」

（リチ&ルイ）「オタクじゃない（ではない）——！」

—— 伝統の湖畔街 グレルサイド

一行はようやくグレルサイドの入口に到着した。

「今は非常事態につき許可無き者を街へ入れる事はできぬ！」

門番らしき兵が言う。

すると、もう一人の兵がリチャードの顔を見て驚く。

「あ、あなた様はもしや…王子殿下であらせられますか!？」

リチャードは黙って頷く。

すると兵達は敬礼した。

「少々お待ち下さい!公爵様にお知らせしてまいります!」

そう言つと兵は街の奥まで走つて行つた。

「へえ、リチャードつて王子様なんだ?偉かつたんだね」

「リチャードは王子…ならアスベルは何？」

「俺は…今の俺は、何者なんだろうな…」

「アスベルはアスベルだ。リチャードも王子だけどリチャードつて
いう一人の人間だ。そうだろう？」

ルイスは全員に問いかける。

その時知らせに行つていた兵が戻つてきて言つた。

「お待たせいたしました。どうぞお通りくださいませ」

「ありがとう。デールは屋敷にいるのかな？」

「はっ!」

兵は敬礼をする。

「聞いての通りだ。まずはデールの下へ行つて状況を確認しよう」

一行はデールがいる屋敷へと向かつた。

「…屋敷って遠い？」

「歩いて5分位かな」

「そっか」

「ルイス…さっきはありがとう」

「はて、俺には皆目見当もつかないが何の事かな？」

そう言うところルイスはまた前を向いて少し早めに歩き出した。
その背中を見たりチャードは微笑んだ。

「本当に変わって無いね」

十字路に差し掛かったところで、突然パスカルが立ち止まり左の方を見る。

「どないしたんや？」

「…誰かが走ってくる」

それを聞いて全員パスカルが向いている方を見る。
確かに誰かが手を振って走ってくるのが見えた。

「なあ、アスベル。すごい見たことがある奴がこっちに向かって
きてるんだけど」

「俺もだ。でも何でこんな所に…」

「ルイスー！アスベルー！」

「「何でエリーがこんな所に！！？」」

そう、走って来たのは紛れもなくエリーだった。

「なんや、知り合いか？」

「知り合いというか…幼馴染」

「ルースー!!」

エリーは思い切りルースに抱きつく。
ルースはそのまま後ろに倒れる。

「心配したよ。てゆうか、何でこんな所にいるの？」

「それはこっちの台詞だ」

「えっ、心配してくれてたの？」

「その後の方だ！」

「あつ、何でここにいるか気になるの？」

エリーは立ち上がり、話し出した。

「えつとねえ。港に行ったらさあ、黒服の男が暴れ回って船は出せないって聞いて、たぶんルースの事だろうなあと思って追いかけてうと思ったの。でもどこにいるかわかんなくてさ。よく考えたの。そしたらバロニアからだとゲレルサイド以外に行ける場所が無いから、ラントを通ってここに来たの。その道の途中で山賊らしき人に会って、超古典的な脅し文句を言ってきたんだ。で、鬱陶しいから倒したの。そしたらまた超古典的な捨て台詞吐いて逃げてったの。これが証拠ね」

そう言つて緑色に輝く輝石クリアスを見せる。

「その後——」

「もうわかった」

「ねえねえ、ちょっとそれ見せて」

エリーはパスカルに輝石を渡す。
すると、輝石から風のエレスの精霊——グリムシルフィが現れた。

そしてなんやかんやで、パスカルと契約した…ぽい。

「今のは…何だったの？」

「…さあ？」

「てか、デールさん待たせてんだから早く行こうぜ」

一行はとりあえずエリーを含めて、デールの屋敷へと向かうのであった。

第11話 伝統の湖畔街―ゲレルサイド（後書き）

（雪）「こつちも久々に投稿できたね」

（ル）「そうだな。全然ストーリー進まなかったけどな」

（雪）「良いの良いの。今やってる連載の中で一番長くなる予定はこれだから」

（ル）「だいたいどの位続くんだ？」

（雪）「えゝ、多分200話位じゃない？」

（ル）「長ッ！！」

（雪）「まあ、そんな先の事はさておき、次回もお楽しみに」

（ル）「感想もよろしく！質問でも良いぜ！」

（雪）「…敬語使わせるのはもう諦めようかな」

グリムシルフィの契約の所はいくら探してもなかったので適当にしています。

シアンデームとブラドフランムはたぶんやりません。

第12話 剣と風の導きを

「はあ、全っ然寝ね〜」

ルイスは一人で散歩をしていた。

9時間ほど前にデール公の屋敷で作戦会議を開き、リチャード、アスベル、ソフィ、エリー、パスカル、メイリ、そしてルイスの七人でウォールブリッジを攻め落とすという作戦を立てた。

最初はリチャード、アスベル、ソフィ、ルイス、パスカルのメンバーで行くはずだったのだが…

「パスカルは目離したら何するかわからへんからウチもついていくわ」

「ルイスが行くなら私も行きたいなあ…」

という事でこの七人になったのだ。

「しかし、誰か一人でも起きてないもんかね…おっ！」

ルイスは橋の近くで見慣れた後姿を確認した。

長い紫色の髪を二つに束ねた少女、つまりソフィだ。

「おい、ソフィ。何やってんだ？」

「…！…しー」

「？」

ソフィは人差し指を立てて、口の前まで持つてくる。

言わなくても分かると思うが、『静かに』や『黙りなさい』などという時に使うサインだ。

ルイスは黙ってソフィに近付く。
そして、先程ソフィが見ていた方を見ると、アスベルとリチャードが何かを話していた。

「何々？ソフィ盗み聞きしてたの？」

「それって…いけない事なの？」

「まあ、しない方が良いけど…いつか」

という事でルイスも一緒に様子を見ることにした。

だが途切れ途切れにしか声が聞こえず、何を話しているかは分からない。

「共に…覚悟は…しないでくれ…俺はリチャードの…存分に使ってくれればいい」

「…打ち明ける…本当は僕は…したくない…それでも僕は…選ばざるを得ないんだ」

「一日も早く…終わらせて…戻そう…そのための…いくらでもする」

「ありがとう…勝とう！アスベル」

二人は顔を見合わせて勝利を誓った。
その近くのルイスは。

「…全然わからねえ」

頭を抱えていた。

「…ソフィはわかったか？」

「…」

「ソフィ？」

「！何？」

ソフィは呼ばれていた事に気付いていなかったようで、少し驚いていた。

「何か悩み事か？そうだとしたら誰かに話した方が良いぞ？」

「じゃあ…良い？」

「ああ」

ソフィは俯いて胸に手を当てる。

「…不安なの」

「…何が？」

「アスベルとリチャードと一緒にいる事。リチャードはアスベルの友達なんだから…悪い事する筈…ないのに…」

最後はほとんど声にもならない位小さな声だった。
だが、ルイスはちゃんと聞きとっていた。

「そうか。確かにアスベルとリチャードは友達だ。でも、その事で心配なのは俺もなんだ」

「ルイスも…不安なの？」

「ああ。とてつもなく、な。特にリチャードの方だ。七年前のあいつの事も知ってるけど、何かが違うって感じかな」

「何かが違う？」

「そりゃまあ、アスベルだって成長はしてる。それは皆一緒だ。…！」

ルイスはそう言ってはつとする。

ソフィは昔から何も変わっていない。

もしその事を気にしているのであれば、ソフィを傷つけてしまった

だろう。

だが、ソフィには記憶が無い。

だから昔の事は何も覚えていない。

それどころか、本人かどうかもわかっていないのだ、という事に今気付いた。

今後は発言に注意しようと思心に決めて話を続ける。

「でもな。リチャードは、よくわからねえけど何かが違うんだ。よくはわかんねえけどな」

「……………」

「ソフィにとつちアスベルもリチャードも友達だろ？」

ソフィは小さく頷く。

それを見てルイスは、子供をあやす様に微笑みながら頭を撫でる。

「ならそれだけで十分だ。お前は難しい事は考えなくていいんだよ」
「……………」

「それでも不安ならこの件が終わってから三人で話し合え。とりあえず今は明日に備えて寝ろ。な？」

「…ありがとう。ルイス」

「ああ」

そう言うソフィは宿屋に帰って行った。

ルイスは周りを見回し、アスベルとリチャードがいない事を確認して自分も宿屋に戻った。

「若い者を見守る先生的なポジションの人って重要だよなあ…」

ルイスは軽く溜め息をついた。

— 次
の
日
広
場

広場には100人ほどの兵士が集まっていて、リチャードは全兵士の前に立っていた。

「勇敢なる兵士諸君！これより我々はリチャード殿下に付き従い王都へ向かう！」

デールが堂々とした態度で宣誓した。

「殿下、出撃のご合図をお願いいたします」

デールが小さい声でささやくと、リチャードは小さく頷いて数歩前に出る。

「これはウィンドル王国を我々の手に取り戻す正義のための戦いだ！兵士諸君の奮闘を期待する！」

リチャードは腰に差していた剣を抜き掲げる。

そして、ウィンドル王国に伝わる掛け声を口にした。

「剣と風の導きを！！」

兵士達もそれに続いて同じ掛け声を繰り返した。

「全軍！出撃！！」

「おおおー！！！！！！」

兵士達は歩幅をきっちりと合わせてウォールブリッジへ向かった。

「それでは僕達も潜入任務を開始しよう」

「殿下の事をくれぐれも頼むぞ。アスベル・ラント」
「はっ！かしこまりました！！」

アスベルは敬礼をする。
するとルイスがアスベルの肩を掴む。

「俺達もいるんだぜ？忘れてくれるなよ」
「そーだよ。私達だってリチャードの友達だもん」

ルイスとエリーが立て続けに言うものだから、アスベルも困った顔になる。

「ちよっ、二人とも！」

「良いのだ。頼もしい限りだ」

「それでは良いかな」

リチャードが真剣な表情に戻して話す。

「まずはあの遺跡に戻る。そこから上の砦を目指すんだ」

「りょーかいや！」

「メイリまで……」

一行はこんな感じでウォールブリッジに向かうのだった。
その後ろ姿を見送るデールは溜め息をつく。

「せいぜい口だけにはなるなよ。ラグゼリア」

第12話 剣と風の導きを（後書き）

（雪）「さて、次回から『王都奪還編』突入です！」

（ル）「あれ？そんなの本編にあっただっけ？」

（雪）「さあ？」

（ル）「さあって……」

（雪）「では、ネタが尽きたんで終了します」

（ル）「質問なんかがあったらここで答えるんで」

（雪）「では、次回もお楽しみに」

（ル）「感想も待ってるぜ！」

早く教官パーティーインさせたいー！！！！

第13話 憎悪に満ちた…

「そう言えばさ。ルイスって昔は右利きじゃなかったか？」

アスベルが尋ねる。

先程戦っているときルイスが左手に刀を持っている事に気付いたのだ。

「ん？別に今でも右利きだが？」

「でも左手に刀を持って…」

「ああこれ？これは懂れてる人の真似だよ」

「その懂れてる人って——」

「さて、ウォールブリッジ潜入の前に手順を確認しておこうか」

リチャードの言葉によりアスベルは黙るしなくなる。

リチャードはその後説明を始めたが、ルイスは全くと言っていいほど聞いていなかった。

手順を知らない人に軽く説明しよう。

「ウォールブリッジ攻略手順」

「目的は南側の橋を下ろして門を開ける。

「ついでに北側の橋を上げてしまつとセルディク側の増援を絶つことができる。

「セルディク側の戦力を少しでも減らすためにまずは北側の橋を上げよう！

「その後南側の橋を上げよう！

「ウォールブリッジ攻略成功！！

…となっている。

「――説明は以上だよ」

いつの間にか説明が終わっていて、ルイスは少し驚いた。

「それじゃパスカルさん。動かすのをお願いしていいかな？」

「了解、こんなのパカパカポコってやれば楽勝だよ」

これを聞いて誰もが思った。

（どう楽勝なんだ！？）

パスカルが装置を動かすと、いつの間にかどこかの部屋にいた。全員が周りを警戒する。

潜入に成功したとしても、いきなり見つかってしまっただけは元も子もない。

「ここがウォールブリッジの中か」

「潜入に成功したんなら早く行こうぜ」

「せやな。捕まってもうたら八つ裂きにされてまう…」

メイリは自分で言うておいて少し震えている。

「よし！そうしたらまずは北橋を上下させる装置の所を目指すとしてよう」

一行は装置のある場所へ向かう事にした…のだが。

「ちよつ、こつちだつて」

「何言うとんねん。どう考えたってあつちやろ」

「まあまあ、間をとってそつちに…」

「「なんでだよ（やねん）！」「」」

若干迷子になりかけていた。

皆さんもなったのではないだろうか。

攻略本を見ても中々に難しかった。というより面倒臭かった。

「君達、こつちだよ」

リチャードがある扉を指差す。

それき、ルイス、メイリ、パスカルの三人の内誰も指していない扉だった。

「大体よお。ここ梯子多過ぎんだよ。砦の中で遭難でもさせる気か！」

「ホンマやで。リチャードがおらんかったら今頃ウチら…」

ガチャッ

「あ…」

「「あ…」」

ルイスとメイリが梯子を登る前に一人の兵士が入ってきて、目があつた。

一分ほど目があっていたが、ルイスが兵士を殴って気絶させ、メイリがどこからか出した縄で縛りつけた。

「悪く思つなよ」

「ウチらかてここでしくじるわけにはいかんねん」

「…行くか」

「せやな」

オリジナルチャット——最強コンビ？——

(ルイ) 「さっきの俺達完璧だったな」

(メイ) 「もうウチらに敵無しやな！」

(ルイ) 「最強コンビここに結成ってな」

(メイ) 「このままウチと夫婦という名のコンビに——」

(アス) 「何してるんだ？二人とも……ってうわっ！」

(メイ) 「人のプロポーズを邪魔して楽しいんか……？」

(アス) 「えっ！いや……何の事だ？」

(ルイ) 「……アスベル。ドンマイ」

(アス) 「えっ！？どういうことだ！？」

(メイ) 「ウチのプロポーズを返せええ……！！！」

(アス) 「ちよっ？うわあああ……！！！」

(ルイ) 「……あの二人仲良いな」

(エリ) 「あんたにはそう見えるんだ……」

「これで、OKと」

ルイスは装置を動かす。
すると、北橋が上がる。

「次は…南側やったっけ？」

「ああ、でもその前に鍵を取りに行かないとね」

「鍵？」

「中央塔にあるはずだ。まずはそこに行ってみよう」

という事で一行は中央塔へ向かった。

そして、一行は兵を倒し、中央塔に辿り着いた。

「あつた、鍵だ。これさえあれば…」

鍵はリチャードがすぐ見つけた。

リチャード以外は階段を上っていたが、見つかったとこのことで降りていく。

だが、突然ソフィが階段の上を見て言った。

「誰がいる…！」

「何っ！？」

リチャードも上を見る。

だがその時にはもう遅かった。

一人の兵が階段から飛び降りてリチャードに斬りかかっていたのだ。誰もが時がとまったように思えた。次の瞬間リチャードから鮮血が舞った。

「『リチャード…！』」

アスベル、ルイス、メイリの三人が同時に叫んだ。
リチャードはその場に崩れ落ちた。

「大変…！」

「やった…やったぞ！この手で王子を…！！」

兵は部屋から出ようと走る。

誰かに報告でもされてはまずいと思い、ルイスは兵を捕まえ一発殴る。

「リチャード！しっかりしてくれ！」

アスベルはリチャードの体を揺する。

しかし、何の反応もなくただ血が床を満たしていった。

「くそっ！てめえ…！！」

ルイスはもう一度殴ろうと兵に近付く。

その時だった。

誰の耳にもわかるほど大きな心音が鳴った。

「え…？」

アスベルは驚いて思わずリチャードから離れる。

そう、心音はリチャードのものだった。

リチャードの体が小さく揺れる。

そしてゆっくりと体を起こし立ち上がる。

「リチャード…？」

「一体…どうしたんだ？」

リチャードが兵のいる方に振り返る。

リチャードの左目は床に溜まっている血のように真っ赤だった。

「下衆^{ゲス}が…！！」

それは常人には耐えられないほどの憎悪に満ちた目だった。

第13話 憎悪に満ちた…（後書き）

（雪）「人間って良いとこまで行っても結構失敗する生き物だよね」

（ル）「どうしたんだ？急に」

（雪）「今回そんな感じの話じゃん」

（ル）「そうだな…」

（雪）「ま、だから成功があるんだけどね」

（ル）「それ誰の受け売りだ？」

（雪）「こういう事って色んな人が言ってるでしょ」

（ル）「まあ…な。てか話変わるけど今回はテンポ良かったな」

（雪）「最近グツダグタだったから、たまには良いかって」

（ル）「なるほどな。では、次回もお楽しみに」

（雪）「このタイミングで!？」

第14話 惨劇

「下衆が…!!」

その言葉を聞いた時ソフィは何か気付いた。

「リチャード…?」

「無事だったか！良かった」

リチャードはふらふらとしながらも兵に近付く。

そして兵の胸倉を掴み、机に向かって投げ飛ばす。

リチャードも机に乗り、兵の上に立つ。

「よくも…!」

リチャードは腰に下げている剣を引き抜く。

そして、その剣を思い切り振りかぶる。

「まさか…リチャード！やめろ…!」

ルイスが叫ぶがもう遅かった。

「この下衆が…!!」

リチャードは振りかぶっていた剣をそのまま凄い勢いで振り下ろす。

兵は恐怖や痛みで絶叫する。

パスカルは反射的にソフィの目を手で遮る。

「貴様のしでかした事の報いだ!!その身で思い知るがいい!!」

リチャードは何度も何度も斬りつける。
その度に兵の血が飛び散る。
恐らくもう意識はないだろう。

「このっ…！このっ…！」

だが、まだ斬りつける。

「リチャード！もうエエやろ！やめえや…！」

メイリが見ていられなくなり叫ぶ。

「まだだ…こんなものじゃない。僕の受けた痛みはこんなものじゃないぞ…！」

「やめろ！リチャード…！」

「僕に命令するなあ…！！…！！！」

リチャードは上を見上げて叫ぶ。

だがその後も、口を開けたままずっと上を向いている。

「リチャード…？」

アスベルは心配になり呼びかける。

するとリチャードは気が付いたように下を見る。

そこには先程自分が斬りつけていた兵の死体があった。

「僕は…一体…」

リチャードはその場でうろたえる。

「ごめんアスベル！僕は…君にこんな事を言うつもりじゃ…うぐっ！」

リチャードは突然苦しそうに胸を抑えて机から飛び降りる。

「胸が苦しいのか？大丈夫か！？リチャード！」

「平気だ…それよりも急いで南橋へ向かおう。折角鍵も手に入った事だ」

「おい、バカな事言うなよ。さっきやられた傷が…」

「僕なら何ともない。思ったよりも傷が浅かったようだ」

「はあ！？だつてあんなに血が——！！！」

ルイスはリチャードを見て驚く。

あんなにも大量の血が出ていたのにも関わらず今はもう止まっている。

「皆！何をしているんだ。早く門を開けよう！」

「あ、ああ。わかった」

一行は惨状となっている部屋を後にした。

オリジナルチャット ———— ずっと

(ルイ) (さっきのリチャード…何かおかしかった…一体何が…)

(エリ) 「どうしたの？そんな暗い顔して」

(ルイ) 「エリーか…」

(エリ) 「さっきのリチャードの事？」

(ルイ)「ああ」

(メイ)「確かにさっきのリチャードは何かおかしかったもんなあ

…」

(ルイ)「メイリ…」

(エリ)「でもリチャードはリチャード！私達の友達。でしょ？」

(ルイ)「友達…か。そうだな」

(メイ)「さっ、そうと決まれば早よ行こうや」

(ルイ)「リチャード。俺達はお前がどうなってもずっと友達だからな！！」

アスベルは装置を動かす。
すると外で橋が動く音がした。

「よし！後は門を開くだけだな」

「ほんなら早よ行こうや。敵がぎょーさんおる所にこれ以上おりと
うないで」

「確かに早くした方が良いな。ここまでは順調だったけどいつ見つ
かるか分からない」

「ということで次行こう！」

エリーの言葉で一行は門を開く装置のある部屋に向かった。

オリジナルチャット——スパイの秘密——

（エリ）「そう言えば私達ってさっきの一回しか見つかってないよ
ね」

（ルイ&メイ）「……！」

（アス）「確かに」

（パス）「あたし達ってすごいよねー！スパイになれちゃったりし

て」

(エリ) 「スパイってあの潜入とかするやつ？」

(パス) 「うん、それぞれ！」

(アス) 「潜入と言えばルイスってよくうちに忍び込んでたよな」

(ルイ) 「えっ!？」

(エリ) 「普通にドアから入ればよかったのにね」

(ルイ) 「そ、そっぴや、そんな事もあつたかなあ……」

(パス) 「メイリも気配消すのは得意だよね」

(メイ) 「え!?!いや、ウチはそないな事……」

(パス) 「よし!この調子でどんどん行こう!」

(ルイ&メイ) (さっき見つかったただなんて絶対言えない……!
!)

アスベルは装置を動かした。

すると、外から門が開く音がして、兵達の掛け声が聞こえてくる。
これで一行の任務は完了した。
ここが制圧されるのも時間の問題だろう。

「歓声が聞こえるよ！うまく行っただけだね」

「僕達の役目は終わった。後は兵達の働きに期待しよう」
「そうだな…」

一行は外に出る。

すると目の前を何かが飛んで行った。

「ひゃあ！？な、何！？なんなの！？」

「き、きつとアレや！と、鳥や！鳥！！」

「いや。今のは…剣か…？」

剣の様なものは弧を描いて一行の後ろに飛んでいく。

「この武器は……！」

「何だ？アスベル。心当たりでもあんのか？」

ルイスが尋ねると、アスベルはゆっくりと後ろを向く。

「物事は完全に終わるまで油断してはならない。オレはそう教えていた筈だ」

先程一行が出て来た塔の上には男が一人立っていた。

男はそこからジャンプして一行の前に降り立つ。

「あんた誰だ！」

「ほ、ホンマや！そんなもん放り投げて危ないやろ……！」

「マリク教官……！」

そう、その男とは騎士学校時代のアスベルの恩師である、マリク・シザースだった。

第14話 惨劇（後書き）

（雪龍）

「やっと教官来たあああああ！！！！！！！！！！」

（ルイス）

「うるせえ！！」

（雪龍）

「ああ、ごめんね」

（ルイス）

「にしても最後のアレ誰だよ」

（雪龍）

「え？知らないの？皆の教官だよ！？」

（ルイス）

「知るか！」

（雪龍）

「まあ、良いや。今回はメイリやって」

（メイリ）

「りょーかいや！！では、次回もお楽しみに」

（ルイス）

「え？俺じゃないの？俺主人公でしょ？」

（雪龍）

「自惚れるな！！あくまで主人公はアスベルだ！！」

（ルイス）

「ええええ……」

第15話 炎の鎖と三連弾

全員武器を構える。

だが、マリクは顎に手を当てて目を閉じる。

「少人数で砦の内部に潜入し、扉を開けて味方を引き入れる。そこまでの手際は見事だった」

マリクは目を開けてこちらを睨む。

「だが、最後の詰めが甘い。ここでオレがお前達を倒せば戦局は一気に逆転する」

「何だアンタ、随分偉そうじゃねえか」

ルイスが一步前に出る。

「渋くてカッコエエのに戦わなアカンなんて残念やわ」

「オレも残念だ。教え子やその仲間、そして陛下と戦わないといけないとはな」

「僕が誰かを知って尚、刃を向けるつもりか」

「数的に言つとこっちのが有利だぜ？そっちは三人、こっちは七人」

マリクはフツと鼻で笑う。

「数だけで勝敗は決まらない。それにこいつらは今までのオレの教え子の中でも優秀な奴らだ」

「じゃあ、一番足を引っ張るのはあんただろうな」

「何だと？」

ルイスの言葉に全員驚く。
それに対してルイスは笑っていた。

「それはどういう事だ？」

マリクは睨みをきつくしてルイスに尋ねる。

ルイスは「だってよ…」と言うが続きを言つのを渋る。

「ルイスどうしたの？」

「この続き言ったらあの人がかawaiiそうな気がする」

「安心しろ。オレは言葉などで心が折れるほどヤワじゃない」

「じゃあ言わせてもらっけど…」

ルイスはビシッとマリクに人差し指を向けて言い放った。

「アンタ、メチャクチャ足震えてるぞ」

「！！！！」

その場にいた全員が固まる。

マリクの後ろにいた兵は二人でこそこそ話し合っていた。
恐らく気付いていたのだろう。

「体調が悪いなら無理しない方がいいと思うぜ？」

「大丈夫だ。問題ない」

「せやかて体調悪い人と戦うのもなあ…」

「大丈夫だ。早く始めるぞ」

「もうちよつとゆつくり話し合おうや。騎士学校時代のアスベルの話とか聞きてえし」

「敵であるお前達と何かを話す義理はない」

「そないな事言わんというーな。ウチも気になるから頼むわ」

「早く下の加勢に行かないといけない。始めるぞ」

その後もルイスとメイリによるいじりは続く。

心なしか笑っているように見える。

そして遂にマリクは限界に達した。

「いい加減にしろ！！お前達はここへ何しに来たんだ！！！」

「えっ、いや、その…」

（（（そんなに怖いならここにいなきゃいいのに…）））

ルイス、メイリ、パスカル、エリーの四人の心がシンクロする。

マリクは肩で息をしている。

「そろそろ始めるぞ…」

『…はい』

今度は全員（ソフィとリチャードを除く）の心がシンクロした。

（おい、始め辛^{づれ}えよ。何だよこの空気。出来る事なら今すぐにでも立ち去りてえよ…）

（こんな空気の中で戦う方が無理やわ。参ったなあ、皆やり辛そうやわ…）

二人がそんな事を考えていると、兵が向かって来た。

兵はルイスに向かって剣を振り下ろす。

それを刀を鞘に納めたまま受け止める。

「あつぶねえ、急にそんな物騒なもん振り回してんじゃねえよ」

「ここは戦場だ。剣を使って何が悪い」

「そんなご尤もな事言つなよ…」

ルイスはこの兵が自分の一番苦手な真面目・優等生タイプだと気付いた。

「メイリー、手伝ってくれー」

ルイスが振り返るがそこには誰もいない。

メイリはもう一人の兵と戦っていた。

ならばと思って他を見るが、他は全員マリクの方に行っていた。

「いや可笑しいだろ！！何で7対3なのに何で五人でそっち行っただよ！！！」

「ルイスとメイリなら大丈夫かと」

「それどういう事だ（やねん）！！！」

ルイスはマリクの方に集中して、自分の戦いを忘れてしまっていた。そこに兵が隙ありとみて、剣を左から右へ薙ぐ。

ルイスは反応が遅れ、右腕に掠る。

「なんとか利き腕は回避できたな」

「良い反応だ。犯罪者には勿体ない」

「俺は犯罪者なんかじゃねえっての」

「兵士二名に怪我を負わせた。しかも刃物でな。これを犯罪と言わず何を犯罪というんだ」

「兵士二名？…刃物…怪我…ああ、あれか！」

ついこの間自分がバロニアでした事を思い出した。

「あれはあいつらが悪いんだよ。あいつらも犯罪者って事でよろしく」

「舐めた事を……！！」

兵はルイスに向かって走る。

それに合わせてルイスは魔神剣を放つ。

だが、それは簡単に避けられ逆に攻撃される。

それを刀で受け止めた。

「へえ、この前の奴とは違って良い動きするじゃん」

「当たり前だ。舐めてもらっては困る」

「優秀つてのは本当だったんだな。火弾衝！」

至近距離で火の弾を放つ。

これはいったと思ったが、あまり傷を負わせることはできなかった。

「なら、これはどうだ！炎烈牙^{えんれつが}！！」

ルイスは刀に炎を纏わせ斬りかかる。

それは躲されたが、次の蹴りはクリーンヒットして吹っ飛ぶ。

だが、兵はすぐに立ち上がり剣を構えなおす。

「蹴りなんかじゃ倒れないってのは流石つてところか」

「くっ……」

「でも安心しろ。今スゲエの思いついたから」

そう言うと、ルイスの周りの空気が変わる。

「行くぜ！」

ルイスは右手を前に出す。

すると、そこから炎でできた鎖を出す。

炎の鎖は兵に絡みつき動きを封じる。

「次で詰みだ！この技で塵と化せ！」

剣を横に構える。

「紅蓮！！」

ルイスは兵に一閃しそのまま後ろへ駆け抜けた。

「爆鎖塵！！！」

その掛け声と同時に右手から炎の鎖を切り離す。
すると、鎖は大爆発を引き起こした。

「どうだ…さすがにもう立ってねえだろ」

ルイスは後ろを振り返る。

そこにはうつぶせで倒れている兵がいた。

「あんま犯罪者を舐めてかかんねえ方が良いぜ…」

そこまで言っただけでルイスは気付いた。

「自分で犯罪者って言ってんじゃ世話ねえな」

——メイリサイド

「おお、流石ルイスやな。あんなスゴイ技初めて見たわあ」
「ラグゼリア……」

兵はルイスに向かって走り出す。
それをメイリは弾を放って止める。

「あんたの相手はウチやで？間違わんでほしいわ」
「……………」

兵は無言でメイリに向かって走る。

「なんや、偉い大人しいんやな。それっ、氷霧フリージングの白薙、悪運ガトリングイビルの連鎖
……」

凍結の特性がある弾や、着弾すると減速する弾を放つ。
それを喰らっても兵は構わず向かってくる。

「なんや、何も喋らんと技喰らって走ってくるなんて不気味やで」

兵は剣を振り回す。

動きが変則的で躲し辛い。

「咲き狂う空の生命よ、エアールーム！」

銃から発射された銃弾は着弾して花の様な爆発を起こした。
しかし、兵は相も変わらずメイリに向かって行く。

「今ので駄目なら…出でよ、蒼穹の海神よ、パドルブレイク！！！」
わだつみ

銃から蒼い弾を発射する。

その弾が着弾すると、それが合図となって下から水が吹きあがる。

「ちょっとは大人しくなってくれたか？」

兵は何事も無かったかのように立ち上がる。

「あら？あかんかったか。そら残念」

「今の程度ではオレは倒せない」

「やっと喋ってくれたか。無愛想やなあってずっと思ってたんや
で」

「…ザコには用はない」

「無視かい。まあ、エエわ。そこまで言うなら見せたるわ」

兵は向かってくる。

「やったるで！」

メイリは両手の銃を斜め前に向ける。

そして放つ。

「この技からは逃げ出せへんで！」

今度は兵に向かって両方の銃を向ける。
そこから同時にレーザーを放つ。

「もう終いや」

斜め前に撃った銃弾も兵に向かって飛んで行く。

「ふっ飛べ！トリプルシューティング！！！」

二つの銃弾とレーザーが同時に兵に当たる。
兵はそのまま地に伏した。

「ウチの大勝利やな！」

メイリがそう言うのとルイスが近寄ってくる。

「こっちも終わったんだな」

「せやで！スゴイやろ。まあ、さっきのルイスには劣るけどな」
「そんなことねえよ。さっきのは驚いた」

二人は顔を見合わせて笑った。

「ほんでこれからどないしようか」

「先に下行こうぜ」

「エエんやるか…」

「大丈夫だって。あっち手伝うよりかは下手伝う方が良いだろ」

「…それもそうやな！」

という事でルイスとメイリは下へ降りる梯子へと向かった。

第15話 炎の鎖と三連弾（後書き）

（ルイス）

「今回はスゲエ良かったぞ！」

（メイリ）

「ウチらの秘奥義初お目見えやー!!」

（エリー）

「私のは…?」

（雪龍）

「それはまだ…とりあえずオリ技紹介でもどうぞ！」

えんれつが
炎烈牙

【B技/?2/威力:230/クリティカル率:50/ヒット数:3】

有効特性:衝撃 / 火傷

使用者:ルイス

炎を纏わせた刃で斬りつけた後、右足で蹴り飛ばす技。

パドルブレイク

【B技/?2/威力:430/クリティカル率:130/ヒット数:4】

有効特性:水棲 / 鈍足

使用者:メイリ

青い弾を発射し、敵に被弾した時、地面から水飛沫を上げる術。
スプレッドに似ている。

詠唱は『出でよ、蒼穹の海神よ』
わだつみ

ぐれんはくさじん
紅蓮爆鎖塵

【秘奥義／威力：2000／ヒット数：7】

有効特性：斬撃／火傷

使用者：ルイス

炎の鎖で縛り、斬りぬけて爆発を起こす秘奥義。

因みにルイスの秘奥義発動時の台詞は『行くぜ!』

秘奥義中の台詞は『次で詰みだ!この技で塵と化せ!紅蓮!!爆鎖塵!!!』

トリプルシューティング

【秘奥義／威力：2000／ヒット数：8】

有効特性：衝撃／無機物

使用者：メイリ

最初に二発弾を発射し、次にレーザーを撃ち、同時にぶつける秘奥義。

因みにメイリの秘奥義発動時の台詞は『やったるで!』

秘奥義中の台詞は『この技からは逃げ出せへんで!もう終いや、ふっ飛べ!トリプルシューティング!!!』

(ルイス)

「あんま説明になってねえな」

(雪龍)

「それは仕方ないよ。僕に国語力が無さ過ぎて…」

(ルイス)

「開き直んなよ」

(エリー)

「それより言つとかなないといけない事があるんじゃないの？」

（雪龍）

「そうそう、前のオリ技説明で火斬衝と火弾衝を説明したんですがどちらも『ルイス版の雷斬衝』と書いていました」

（エリー）

「正確には火斬衝の方です。火弾衝は違います」

（ルイス）

「紛らわしい名前つけやがって」

（雪龍）

「ちゃんと直しておきましたんで」

（メイリ）

「今回は勘忍したってな」

（ルイス）

「随分優しいな（今回は）」

（メイリ）

「ウチはいつでも優しいやろ？」

（エリー）

「秘奥義出せて嬉しかったんだろっね…」

（雪龍）

「ちゃんとエリーのも出るから！」

教官のキャラが壊れてたって？

気のせいだと思うよ。

えっ、気のせいじゃない？

まあ、人間なんだもの。必死になるよ。

…僕も高所恐怖症だから。

第16話 唸る疾風 邪悪に満ちて

「あれ？二人ともどっか行っちゃったよ？」

パスカルがルイスとメイリの行った方を見ながら言う。
だが、全員集中していて誰一人として聞いていなかった。

「何これ、あたしだけ置いてけぼり？」

「パスカル！それとエリー！二人を追え！！」

「あ、気付いてたんだ」

エリーは渋々、パスカルはのほんと頭の後ろで手を組んで、ルイス達の向かった方に行った。

「良かったのか？5人で来てくれても構わなかったが」

「いえ、1対5では卑怯ですから」

（1対3は卑怯とは言わないのだろうか…）

リチャードは心の中で思うだけにして、口には出さなかった。

「では、そろそろ本当に始めるか」

そう言うと同時にマリクが投刃を投げる。

「腐食、其は希望の終焉！サイフォンタングル！！」

マリクが詠唱を終えた瞬間、アスベル達の足元に黒沼が現れる。
アスベル達はそれを避けるが、アスベルの避けた先にマリクが投刃を投げてくる。

「はっ！旋の炎！」
ロルフレア

投刃は回転しながら燃え上がる。

アスベルはそれを剣で止める。

その時にはリチャードはマリクに近付き、細剣を振りかぶっていた。

「てやつ！雷神剣！斬り刻め！！」

剣を振り下ろし、突き刺すとマリクに雷が落ち動きを止める。

その後、連続突きをし、斬り抜けた。

「くっ…其は耐え無き息吹！フォトンブレイズ！！」

マリクは技を喰らいながらも瞬時に詠唱を済ませ、リチャードの目の前で炎の弾を爆発させる。

「ぐあっ！」

「快方の光よ宿れ、ファーストエイド！」

リチャードの体を光が包むと、傷を癒していった。

「流石に騎士学校で教官をしているだけはある…」

「お褒めにあずかり光栄です。其は猛き兵戟！ロックランス！！」

アスベルの足元に岩が突き上げて来る。

それを何とかアスベルは回避し、マリクにア라운드ステップで近付いて、剣を横に構えた。

「衝皇震！！」

マリクはそれを簡単に避けるが時間を稼ぐだけで十分だった。

「来たれ闇の眷属！開くは絶望の扉！シェイドインペリアル！」

マリクは闇の球体に吸い寄せられる。

そして、その技を使った瞬間、リチャードの中で何かが目覚めるような感覚がした。

——何だ？この感覚…

——どこかで感じた事があるような…

——さっきだ、さっき感じたんだ…

——どうすればいいんだ…？

——何故僕は戦っているんだ…？

——僕が何かしたか…？

——僕は悪くない、悪いのは…

——ゼンプ、アイツラダ…！

「うおおおおお！！！！」

リチャードは上を向いて叫び出す。
左目は血のように真っ赤だった。

リチャードはとてつもない速さでマリクに近付く。

「一瞬で決める！」

リチャードは剣を振りかぶる。

「剣閃よ唸れ、疾風のように！」

秋沙雨の時よりも速く連続でマリクを突く。

「ヴァーテクス・ローズ！！」

その声と同時にリチャードは後ろを向き、手を振る。
するとマリクの後ろにバラが現れ、共に散っていった。

「リチャード……！」

「くっ……」

マリクはまだ立ち上がる。

それを見てリチャードは嘲笑う。

その時、マリクの後ろから兵が二人走ってくる。
グレルサイドの兵達だ。

「殿下！公爵様から伝令です。砦を無事制圧いたしました！！」
「……これ以上足掻いても仕方がないようだ」

そう言々とマリクは投刃を地面に放り投げる。
リチャードは剣を構えてマリクに近付く。

「往生際だけは良いようだな。感心だ」

そう言つて切つ先をマリクに向ける。

「待ってくれ！！教官はリチャードが憎くて齒向かつた訳じゃない
……」

アスベルは手を握る力を強くして言う。

「教官は……リチャードの目指す国家に必要な人物だ！だから……」

「必要かそうでないかは僕が決める」

「まあまあ、いっぺん落ち着いて。リチャード君」

「！ 誰だ……！！」

グレルサイド兵は頭を下げる。

その間から出て来たのは、茶髪の天然パーマの青年だった。

「フェザント……」

「久しぶり、何年ぶりだっけか？」

「話はちよつと聞いてたけどこの人を殺す気か？」

そう言つてフェザントはマリクを指差す。

「……それがどうした」

「それがどうしたつて……本気で言ってる？」

「……っ！ぐあっ……！！」

リチャードは左目を抑えてしゃがみ込む。

アスベルとフェザントは急いでリチャードに駆け寄る。

「リチャード!?!どうした!?!」

「違う…僕は…!?!」

「リチャード!」

「大丈夫だ…心配には及ばない。少し気分が優れないだけだ」

リチャードはよろよろと歩きながらマリクの横を通り過ぎる。

「この者達の処分は後で決める。とりあえず逃げないように皆のどこかに放り込んでおけ」

兵は敬礼をして、マリク達を連れていこうとする。

「…先にデールの所へ行っている」

そう言い残すとリチャードは行ってしまった。

「どうやらここが最期の場所ではなくなったようだ」

口を開いたのはマリクだった。

「アスベル…卒業こそ叶わなかったがお前はもう立派な騎士だ…」

マリクは腕を組み、後ろを向いて歩きだした。

「殿下の力になってこの国を支えてくれ」

「教官…ありがとうございます。これもひとえにこれまでの教官のご指導のおかげです」

アスベルは敬礼をして見送った。

「…そう言えば、あの人が連れてた兵つて二人じゃなかったか？」

「そうだったはずだが…？」

「いや、何でもない…」（逃げられたか…）

フェザントは振り返る。

するとそこにはたった今戻って来た、ルイス、メイリ、エリー、パスカルの四人がいた。

「おっ？友達か？」

「ん？誰だ？こいつ」

「そういえばまだ名前を聞いていなかったな…えーと」

「わし農か？わし農の名前はフェザント・エドセル」

「へえ、で、何でこんな所にいんだ？」

「そりゃあ、リチャード君の友達だからじゃ」

「そんなんで入れるもんなのか？」

フェザントは愉快そうに笑っている。

だが、密かに視線を感じていた。

「…どうだった？」

ウォールブリッジの上空を魔物に乗って話している男が二人。

「あのメイリとかいう女…まあまあできるな」

声からして先程メイリと戦っていた兵だろう。

誰にも気付かれないうように変装し、誰にも気付かれないうように姿を消していたのだ。

「それに…失敗作まで来るとはな」

「そんな奴らはどうでもいい。あいつはどうだった？」

「…実際やっていないからあまり分かんが…やはりあの血は侮れんな」

「そうか…」

一人の男が魔物に命令を出し、どこかへ飛んで行った。

もう一人の男はまだルイス達を見下ろしていた。

「いずれ我らのものにしてやる…」

そう言うとその男も魔物に命令を出し、どこかへ飛んで行った。

第16話 唸る疾風 邪悪に満ちて（後書き）

（雪龍）

「うーん…」

（ルイス）

「どうした？」

（雪龍）

「いやね、段々ティルズらしくなくなってきたるなあって思って」

（ルイス）

「俺達が入ってる時点でティルズらしくなくなってるんだよ」

（雪龍）

「…それで君は良いのか？」

（ルイス）

「良くはない!!」

（雪龍）

「だよねー…」

（ルイス）

「ということで会議だ！会議!!」

（雪龍）

「どうせ君達じゃまともにできないから認められないな」

（ルイス）

「頼む！この通りだ!!」

（雪龍）

「会話だけだからイケると思ったんだろうけど、そんな棒立ちでこの通りって言われても…」

（ルイス）

「頼むよ…」

（雪龍）

「分かったよ。ただし次回ね」

(ルイス)
「サンキュー！」

(メイリ)
「…次回とか言って忘れさせる気やろ。アレ
(エリー)
「…そうだね」

第17話 友達に向かって

一行はまだペチャクチャ会話していた。

下に行っても何をすればいいのかわからないので、ここで会話しているのだった。

「そうかそうか、君達もリチャード君のお友達か」

「フェザントは貴族か何か？」

パスカルが尋ねる。

フェザントは少しパスカルの顔を見た後、おお！と言って目を見開く。

「君はフリー姉さんによく似てるな！」

「あれ？質問は無視なの？」

「フリー姉さん？それってフェザントのお姉さんなん？」

今度はメイリが尋ねる。

すると、メイリの顔を見て答える。

「いや、正確に言つと命の恩人だ」

「メイリのは答えるんだ」

パスカルはふてた様に頬を膨らます。

そして、下を見ているソフィに近寄って抱きつこうとする。

だが、そう上手くいくものでもなく、パスカルはソフィに突き飛ばされ危うく川に落ちそうになった。

「いてて…」

「シェリア…」
「え？」

ソフィの呟きにアスベルが振り返る。

「シェリアが下にいる」
「何だつて!？」

アスベルも下をしてみる。
そこには確かにシェリアがいた。

「何でこんな所にシェリアがいるんだ？」
「とりあえず下行つてみるか」

という事で一行はやつと下に降りる事になった。

オリジナルチャット——小さい勘違いはやがて大きくなっていく——

(メイ) 「なあなあ、シェリアって誰なん？」
(エリ) 「私とルイスとアスベルの幼馴染だよ」
(メイ) 「幼馴染…小さい頃から仲が良い…ライバルか！」
(ルイ) 「何のだ？」
(メイ) 「いや何でもないねん。別にその子が幼馴染やからってハ
ンデにはならへん」
(ルイ) 「…マジで何の話してんだろ」
(エリ) 「すごい勘違いをしてるみたいだね」
(ルイ) 「お前…意味分かってんのか？」

(エリ) 「ルイスと一緒にしないでよ」

(ルイ) 「え？それどういう事？」

(エリ) 「…やっぱり鈍感だなあ」

シェリアは最近使えるようになった光の力で傷付いた兵の手当てをしていた。

「はあ…」 (アスベル…今どこにいるのかしら)

「シェリア？」

シェリアは振り返る。

するとそこにはたった今頭の中にいた青年が目の前にいた。

「アスベル！？どうしてここに…？」

シェリアはアスベルの横にいるソフィを見つけると、傍まで歩み寄

つて肩に手を掛けた。

「良かった…！あなたも無事だったのね」

横でパスカルが羨ましそうに見ているがそれは気にしない。

次にシエリアが見たのは後ろにいるメンバーだ。

白と赤の混じった髪の少女だったり、緑髪の少女だったり、茶髪の天然パーマの青年だったり、第一印象は全員髪だったが、とりあえず見た事のない人がたくさんいた。

「あの…あなた達は…」

「あたしはパスカル！よろしくシエリア」

「僕はフェザント・エドセルだ」（可愛い娘だなあ…）

「ウチはメイリ・アル・スロツテスや！皆の知つての通りルイスのフィアンセ婚約者や！」

「ええ！？」

「いや、違うから。知つての通りじゃないし、てか婚約者になった覚えはないし。あと、シエリアも普通に信じるな」

シエリアは苦笑する。

そして、一応よろしくと言っておいた。

「で、何でシエリアはこんな所にいの？」

「私はラント領の有志により結成された救護組織の一員として来たの。戦いで負傷した人々を助けたいと思って…」

「救護組織の一員…」

「立派だねえ。人助けの為に戦争してる場所にわざわざ来るなんて」「ホンマやな。どっかの誰かさんとは大違いで人の事を考えて行動できるなんて立派やわ」

「どっかの誰かさんって誰の事だろ？」

パスカルは周りをキョロキョロ見渡す。
すると、メイリに後頭部を叩かれた。

「……そういう事なら今からリチャードに引き合わせよう。その方が今後の活動もしやすくなるだろう」

「確かデール公の所に行くつつつてたよな」

「なら早いところ行っちゃおう？」

「でもどこにいるんだ？」

「「あ……」」

アスベルの言葉により言葉を失う一行。
だが、そこに救世主がいた。

「リチャード君なら中央塔だよ」

その救世主とはフェザントだった。

「何で知ってたんだ？」

「さっき僕にそう言ってきた兵がいるんだよ」

「ナイスだフェザント！じゃあ、中央塔に行くか」

一声は中央塔へ向かった。

シェリアはソフィの髪を見て気付いた。

「あなた…髪が少しバサバサしてるわね。それに全体にほこりっぽく…お風呂はちゃんと入ってる？」

ソフィは少し考えて首を横に振り言った。

「入ってない」

「ええ！！？」

シェリアはソフィの言葉に目を丸くする。

それにつられてソフィも驚く。

シェリアはアスベルとルイスのいる方に向いて言った。

「この子の面倒…ちゃんと見てたの？」

「ほったらかしにはしていない！」

「まあ、俺達ができる事にも限界があるって事だ」

「それはそうかもしれないけど…」

困っているアスベルの隣で何故かパスカルは笑っている。

シェリアはニコツと微笑んでソフィに言った。

「後で私がきれいにしてあげるからね」

「うん」

ソフィは今度は首を縦に振った。

その時、愉快的音楽と共にパスカルがシェリアに歩み寄る。

「お風呂かあゝ。別に二、三日入らなくても死なないんじゃない？」

「死にます！！…もう、清潔は健康の第一歩なのよ。あとで二人ともキレイに洗いますからね」

「へいへーい」

パスカルは右手と右足を上げて言った。

それを見てソフィも真似して

「へいへーい」

「コラ！真似しないの！」

怒られた。

パスカルもギョツとしている。

「まるで母親だな…」

アスベルは両手を広げて苦笑する。

「それは良いんだが…メイリは何してるんだ？」

「コレか？コレはラジカセ言うてな。音楽流せんねん」

愉快的音の発生源はメイリだった。

一行は途中道に迷いかけながらもなんとか中央塔についた。
そして階段を上りリチャードに近付く。

「殿下の勝利を知った諸侯や兵が続々と集まってきたております。もはや大公と言えど殿下の勢いを止める事は叶わないでしょう」

「偽王はまもなく滅びる…叔父セルディクよ。最期の時を震えて待つがいい」

「あれが…あのリチャード？」

シエリアは驚いたように言う。

だが、そんな事は気にせずフェザントはリチャードに話しかける。

「おい、リチャードくん、来たぞー」

「皆来たか…こちらにおいで」

そう言われたので全員リチャードに近付く。

「…ようやくここまで来た。後は王都を攻め落とせば戦いは終わるだ」

「見ている…正義が勝つという事を晴天の下に知らしめてやる」

その時、リチャードがシエリアに気付く。

「ん？君は…」

シエリアはリチャードの前まで寄り膝をつく。

「シエリア・バーンズです。お久しゅうございます。殿下」

「シエリアさんか！君も僕の発した檄に応じて馳せ参じてくれたのかい？」

「あ、私は…」

「シエリアは救護組織の一員として来とんのやって」

「そういう事なら頼むよ。傷つき苦しんでいる兵達を治してやってほしい」

「かしこまりました」

シエリアは一礼する。

「捕虜の治療はしなくていいから。味方を優先してやってくれ」

「え…？」

「叔父に手を貸すような連中は全て賊軍だ。負傷しようと慈悲を与える必要なんてない」

全員驚いてリチャードを見る中、一人リチャードの元に駆ける者がいた。

それはルイスだった。

ルイスはリチャードの胸倉を掴む。

それには兵やデールどころか、アスベル達も驚いていた。

「何をするんだ！ルイス！」

「お前…最近おかしいぞ！？」

「…どういう事だ」

「昔のお前は人の事を第一に考える優しい奴だったじゃねえか！！」
「聞いてなかったのか？賊に優しくしてやる必要はない」

ルイスは齒軋りし、手の力を強める。

「あいつらだってウィンドルの人間じゃねえか…！！」

「僕に敵対する人間など僕の王国の民ではない」

「リチャード…てめえ…！！」

「彼らは見せしめに処刑する。僕に逆らったらどうなるか思い知らせてやらなくてはね」

「なっ…！」

ルイスは絶句する。

明らかに昔のリチャードと違うからだ。

「しかも僕は奴らのせいで危うく死にそうな目にも遭った。絶対に許せない」

リチャードは胸倉を掴まれているにもかかわらず、淡々と続ける。

「とにかくそういう事だ。僕が奴らを処刑しようと思えるのも当然だろう？」

「それでも…あいつらは自分の意思で敵対してるわけじゃねえだろ！」

「そうだよ、リチャード君」

そこに入って来たのはフェザントだった。

「恐怖で人を縛る事は上に立つ者のする事じゃない」

「フェザント…君は僕に王の心得でも説いているつもりか？」

「違う！僕は…」

「うるさい！！黙れ！！！」

リチャードはルイスを撥ね退け、剣を抜き、フェザントに切っ先を向ける。

その場にいる全員が強張る。

「僕が目にかけているからと言って少しい気になっていないか？」

そう言った瞬間、ボゴツという音がしてリチャードが横に吹っ飛ぶ。

そしてその場に残ったのはルイスだった。
要するにルイスがリチャードを殴り飛ばしたのだ。

「何をする…!!」

「友達なんだろうが…」

ルイスの声が震えている。

「フェザントはてめえの友達だろうが!! 冗談でも友達に刃を向けるなんて真似すんじゃないかねえ!!!」

「き、貴様! 殿下! 大丈夫ですか!？」

デールはルイスを睨むと、リチャードを抱え起こす。

「…ぐっ! ぐああああああつ!!!!!!」

リチャードは頭を抱え、蹲る。

「殿下! 殿下を室内にお連れしろ!! それとすぐ医者だ!! そして…」

そして、デールは最後にこう言った。

「ルイス・ラグゼリアを牢屋に放り込んでおけ!!」

第17話 友達に向かって（後書き）

（雪龍）

「聞いて聞いて！！友達から『二つ名メーカー』って言うのが面白いって言うからやってみたんだ！」

（ルイス）

「へえ、で、どんなのなんだ？」

く皆の二つ名く

アスベル・ラント

デッドファアザー
『火燐屍毒』

ソフィ

ディバインワルツ
『電波封神』

ヒューバート・オズウェル

フラクタルフレイ
『増殖妄想』

シエリア・バーンズ

サイレントファントム
『私の可愛い論理』

リチャード

ノイジーインモラル
『蠢く振動』

マリク・シザース

ノイジーワールド
『蠢く狂乱』

パスカル
『グロテスク
殲滅』

ルイス・ラグゼリア
『インスタントベナルティ
壊滅定理』

エリス・ライレージ
『カスケイドワルツ
闇黒多面体』

メイリ・アル・スロツテス
『デリートミラージュ
忘却消去』

フェザント・エドセル
『カーニバル
悪の華』

雪龍
『バンタレイ
残響』

作者の本名
『カオティックチルドレン
四重断片』

(メイリ)

「…ツツコミ所多過ぎるやろ」

(ルイス)

「カッコイイのもあるんだけど…てか、リチャードとマリクの似てね？」

(雪龍)

「それは僕も驚いたよ」

（ルイス）

「シェリアのは…全く意味分からん」

（フェザント）

「儂は悪の華だ！」
カーニバル

（エリー）

「なんの！私は暗黒多面体だよ！」
カスケイドワルツ

（雪龍）

「…えーと、面白いので皆さんもぜひやってみてください」

（メイリ）

「後書きで何の宣伝しとんねん！！」

第18話 友への想いを友へと繋ぐ

「さあ！さっさと入れ！！」

「何で俺が牢屋なんかに入んねえといけねえんだよ！責任者出せ！！」

ルイスは両手を兵に掴まれている。

必死に暴れて逃れているが逃げ出せる気配はない。

「隊長！」

兵が前から走ってくる。

その兵はルイスの一步前を歩いている兵の前まで行って敬礼をした。

「どうした？一体……」

「それが……」

「はつきり言え！」

「は、はい！実は捕虜の数が多く、牢が開いていないのです！」

それを聞いてルイスはニタツと笑う。

「ほれ見ろ。やっぱり俺を牢に入れるなって神様が言ってたんだよ」

「……仕方がない。相部屋でも構わん」

「え！？」

兵はルイスの言葉に全く耳を傾けず、部下に命令した。

部下の兵はルイスを連れて行って牢に入れた。

「ちよつ、俺一人じゃねえと安心して寝ねえから！暴れちゃうか

ら!!」

「黙れ！犯罪者の分際で…!!」

「あつ！てめえ、今俺の事犯罪者つつたな。こっち来やがれ！三秒でのしてやる!!」

「全く…静かに出来んのか」

牢の奥から男の声がしてそちらを振り向くと、記憶に新しい人物がいた。

「あんたは…」

数秒の沈黙が流れる。

ルイスはあつ、と言って何かを閃いたように目を見開いた。

「○ ・ 〓??!!」

「それは何と読むんだ…覚えていないなら誤魔化すな」

「覚えてるよ…」

ルイスは男の前に座る。

「教官…だろ？」

ルイスが入れた牢にはマリク・シザースがいた。

ルイスを除いた一行はウォールブリッジ内の一室で休んでいた。

「ルイス…大丈夫かな」

エリーが心配して言う。

それには誰も確信を持つて大丈夫とは言えなかった。

「ヤバいで…もしかしたら拷問とかされてんのとちゃうん…」

「ええ！？拷問！？」

「何も聞き出す事なんて無いのに拷問する必要はないと思うが…」

「そ、そっか」

部屋にまた重い空気が立ちこめる。

「けど、簡単に出してもらえとは思えんな」

そう言ったのはフェザントだ。

別に一緒にいる必要はないのだが、流れでここにいるらしい。

「じゃけど儂が心配なのは…」

その時部屋にコンコンという音が響く。

そして、扉からデールが入って来た。

「殿下は落ち着きを取り戻された。君達が懸念していた捕虜の扱いに関しては一とまず保留となった。彼らはしばらくこの砦に拘留する」

「…わかり——」

「駄目！！！ぜつつつたい駄目！！！！！」

怒鳴ったのはエリーだった。

その場にいる全員が驚いてエリーを見た。

「せめて…せめてルイスだけは！！！」

「それは駄目だ」

「そこを何とか…！！」

「いくら頼まれても駄目だ」

「むう…」

「エリー…気持ちはウチも一緒や」

二人は泣いて抱き合う。

フェザントはデールの肩に手を置いて言った。

「あんな可愛げな少女達が泣いて頼んでるのに駄目なのか？」

「……君達は今後は殿下のお側から離れてもらう」

デールが言うには付いて来るのは勝手だが、特別扱いはいらない、要するに自由にしろということだ。

「な〜んか、予想外の展開になっちゃったね」

「ホントだよ。折角嘘泣きまでしたのに…」

「薄情なおっさんやったな」

そこにシエリアが入ってくる。

悪口を言っていたエリーとメイリはデールが帰って来たのかと思い、体を強張らせたが、シエリアの姿を見て安心した。

「シエリアか…驚かせないでよ」

「心臓止まるかと思ったわ…」

「え？私何かいけない時に入ってきてちゃった？」

「いや、こつちの話」

パスカルがベットから降り立ちシエリアの前に出る。

「あつ、シエリアお疲れ」負傷者の救護は終わったの？」

シエリアは無言で頷く。

それを見てメイリはシエリアに言う。

「パスカルのテンション正直ついていけへんやろ？」

「え？いえ、そんな事は…」

「気にせんでエエよ。皆そう思つとるから」

「…メイリとパスカルって仲が悪いのか？」

「…そんなことは無いよ（あらへんよ）」

「そんな事はどうでもいいとしてこれからどうする？」

フエザントが珍しく、もう一度言おう、珍しく真面目な顔で言った。
アスベルが口元に手を添えて考える。

「デール公のあの口ぶりだと俺はもうここにいてはいけないのかも
しれないな…」

「違うつて、君がどうしたいのか聞いてんの」

「俺は…」

「ラントへは…戻らないの？」

シエリアが悲しそうな目で見て尋ねる。

アスベルは俯いて目を閉じる。

「今のラントに…俺の居場所はない。知ってるだろ？」

「でも、ちゃんと話し合えば…」

「話し合うまでもない」

アスベルは語気を強めて言う。

「俺はラントの領主にはふさわしくなかったんだ」

「そんな…事…」

「諦めえや、シエリア」

メイリが会話に割って入る。

そして先程パスカルが座っていたベッドに座る。

「アスベルは追放されたんか知らんけど、今ここにおるんは自分の意志でや。何言っても無駄や」

「でも…」

「…そんな気になるんなら一緒に来ればいいやん」

「えっ？」

シエリアは思わず声を出す。

「それ賛成。シエリアと一緒にだと楽しいもん！」

「という事じゃけどどうする？」

「…良いんですか？」

その言葉に全員が頷く。

「でも勝手に救護組織を抜けちゃって良いの？」

沈黙。

パスカルの一言で一瞬にして場の空気が凍った。

負傷者の手当ての為にここに来ているのに勝手に単独行動をして良いのだろうか。

「というよりこれから何処に行くかも決めてないのにどうするの？」

沈黙。

パスカルの度重なる指摘により全員言葉を失う。

そこで口を開いたのはアスベルだった。

「俺は…このままりチャードの軍に加勢したい」

「ほんなら行く場所はバロニアで決定でエエとして…」

沈黙。

行き場所が決まったのは良かったものの、シェリアの事がまだ決まっていなかった。

次に口を開いたのはフェザントだった。

「じゃったら救護組織ごとバロニアに連れて行けばえんじゃねん？
どうせバロニアが戦場になるんじゃないやえさ」

『そ、それだ！！！！』

何の事だかわかっていないソフィ以外の声がハモる。
フェザントの名案に誰も反対しなかった。

しかしこれは後でわかる話だが、救護組織は何も言わなくてもバロニアに行くつもりだったらしい。

オリジナルチャット——似てるけど——

(メイ)「フェザン—」

(フェ)「フェザン？何じゃそれ？」

(メイ)「ただのあだ名やから気にせんでエエよ」

(フェ)「そうかー、ならメイリはメイメイじゃな。なんかマイマイに似てるな！」

(メイ)「…やっぱりフェザントって呼ぶわ」

(フェ)「そっか、そりや残念じゃなあ。で、何の用だったの？メイメイ」

(メイ)「わざとやってる？」

(フェ)「何が？」

(メイ)「…メイリって呼んでくれん？」

(フェ)「そうかあ…残念じゃな」

オリジナルチャット——独特だよな——

(エリ)「ねえねえ、フェザント！」

(フェ)「どうしたの？」

(エリ)「フェザントってさ。若いくせに『儂』とか『くじゃ』とかって何かその…」

(フェ) 「年寄りに思える?」

(エリ) 「うん、何でそんな喋り方なの?」

(フェ) 「これはな、方言といってな。地域によって違うんじゃないけど…メイリもじゃろ?」

(エリ) 「確かに…なら『儂』って言うのは?」

(フェ) 「…何でじゃったっけな」

(エリ) 「あら…」

一行は外に出る。

すると兵が何列かに並んでいて、その前にリチャードとデールが立っている。

一行がその後ろに並ぶと目の前の兵が振り返り言った。

「デール公からの伝言です。アスベル様御一行の参戦を認めるとのことです。ただし、扱いは本体ではなく、遊撃隊にすることでした」

「わかりました。公に全力を尽くすとお伝えください」

アスベルが敬礼すると、兵も敬礼し前に向きなおした。

「遊撃隊って…」

「要するに好きにやれってことでしょ」

「それはええんじゃないけど…エリーとメイリがおらん」

「「え——？」」

ここはウォールブリッジのどこかにある牢。

そこに人影が二つ。

エリーとメイリだ。

「ここまではバレなかったね」

「この調子でいけるとエエな…」

二人はルイスのいる牢に向かっている。

ルイスがどこにいるかは知らないがとりあえず向かっている。

「…でさあ…」

「「！ この声は…！」」

二人は急いで声のした方に走った。

その牢の中を見ると、向かい合って座るルイスとマリクがいた。

「「ルイス…！」」

「お？ よお、どうしたんだ？ こんな所で」

「い、今出してあげるから…！」

「アカン！ 鍵がない…！」

「何やってんだお前ら…！」

慌てふためくエリーとメイリに、呆れるルイス。

ルイスは立ち上がりエリーとメイリの前に立つ。

「お前らこれからどうするんだ？」

「えっと、リチャードの軍と一緒にバロニアへ…」

「そっか、頑張れよ」

そう言つてルイスは柵越しに二人の頭に手を置く。

「頑張れつて…ルイスは？」

「俺か？ まあ、もうちょっとこん中でのんびりしとくわ」

「でも…」

「お前らは俺の代わりにリチャードを助けてやってくれ」

ルイスは笑いながら言う。

「じゃっ、頼んだぜ」

「わかった！」

「行ってくるわ！」

「行つてらっしゃい」

ルイスは二人を見送るとまたマリクの前に座る。
マリクは目を閉じて笑いながら言った。

「信頼しているのだな」

「まあな、あいつらは……」

ルイスは二人の行つた方をもう一度見る。

「仲間であり、友達だからな」

第18話 友への想いを友へと繋ぐ（後書き）

（フェザント）

「ルイスが捕まってるから今日は儂じゃな」

（雪龍）

「フェザントって何弁なの？」

（フェザント）

「一応岡山弁じゃ」

（雪龍）

「フェザントの言葉でわからないことがあれば気軽に聞いてください」

（メイリ）

「それにしても今回から急に方言使い始めたやろ。何でや？設定盛らんでエエねん。方言キャラはウチだけでエエんや」

（雪龍）

「何言ってるのこの子!？」

（フェザント）

「別に今回からじゃないんじゃけど…」

（メイリ）

「いや、今回から多用し始めたやろ。ウチは知ってんで」

（フェザント）

「まあ、皆の雰囲気慣れたからかもしれんなあ」

（メイリ）

「フェザン…」

（フェザント）

「メイメイ…」

（メイリ）

「…ごめん」

（雪龍）

「メイリを倒した！？まあ、次回もお楽しみに！」

第19話 いざバロニア城へ

「よし！どんどん行くでえ！！」

「おー！！」

メイリとエリーの二人は言葉通りどんどん進んでいく。
只今ルイスを除く一行はバロニアに向かっている。
フェザントもリチャードが心配だとかで付いて来ている。

「あのさ、二人とも…」

アスベルが二人を呼び止める。

二人は振り向く。

「何やの？手柄立ててルイスを出してもらおう思ってたのに」

「そうだよ。早くしないとルイスが餓死しちゃうよ」

「しないと思うが…」

「二人には言つてなかったけど儂らは遊撃隊なんよ」

「…え？」

遊撃隊とは戦況に応じて味方の援護などをする部隊の事だ。
前日も言つたが要するに好きにすればいいのだ。

「なら余計良いやん！」

「私達だけで動いていいなら手柄立てやすいしね」

「…ポジティブだな」

二人はまたどんどん進んでいった。

(パス) 「ねえねえ、シエリアー」

(シエ) 「どうしたの？パスカル」

(パス) 「ソフィがいらないんだよ。どこにいるのかなあ？」

(メイ) 「ソフィならアスベルの後ろに隠れとるで」

(パス) 「あつ、ソフィ、触らせてよ」

(ソフ) 「…だめ」

(パス) 「えゝ、何で？」

(メイ) 「あんたの場合第一印象が悪かったんが原因やろ」

(シエ) 「そうなの？」

(ソフ) 「『だいいちいんしょう』？」

(メイ) 「最初に会ったときに受けた感じの事や。悪かったやろ？」

(ソフ) 「うん」

(パス) 「ガーン！そんなあ…」

(ソフ) 「メイリはアスベルを助けてくれたから大好きだよ」

(メイ) 「ありがとな！ソフィ」

(パス) 「メイリがソフィに触ってる…ガクッ」

(シエ) 「パスカルに止めを刺した…」

一行はバロニアの一步手前まで来たが、そこには兵が並んでおりバロニアへは入れそうになかった。

「あちあ、どうするの？バロニアに入れないんじゃないでしょうか？
いよ？」

パスカルが頭を抱えて悩む。

その時エリーが何かに気付いて近寄る。

そこには洞窟があり入り口には兵が一人立っていた。

「ねえねえ」

「ん？何だ？貴様は」

「私達遊撃隊なんだけどさ、王都に入れなくて困ってんの。どこから入れる？」

兵は遊撃隊と聞いて何か閃いた。

「もしかしてアスベル様ですか？」

「いや、アスベルはあっち」

エリーは向こうにいるアスベルを指差す。
それに気付いたアスベルが近付いて来た。

「どうしたんだ？エリー」

「この人からどうしたら王都に入れるか聞いてたの」
「どしたん？」

皆も近付いて来た。

全員に先程アスベルにした説明をする。

「なるほど。で、どうすれば入れるんや？リチャードも入ったんやろ？」

「先程入られたが……」

「どっから入ったんや？」

「それは……」

「教えれんのか？」

「デール公に特別扱いすると言われておりまして……」

「ええけえ、教えてや。な？」

「しかし——」

フェザントは兵の胸倉を掴んだ。

「じゃけえ、教える言うところうが！！聞こえんのかポケエ！！！！」
「で、殿下はこの中に行かれました……！！」

フェザントは兵を離し、振り返る。

「こん中じゃって。さ、行こうや」

オリジナルチャット——表と裏——

（エリ）「さっきのフェザント、すごい迫力だったね……」

（フェ）「そうか？」

（アス）「ああ、かなり驚いた」

（メイ）「普段はポケエってしとんのかな」

（フェ）「ポケエ」

（アス）「本当にしてるな……」

（エリ）「大人しい人ほど怒ったら怖いんだよ？」

(メイ) 「ならエリーにも気をつけなアカンな」
(アス) 「確かに。エリーは大人しいし」
(フェ) 「儂と同じか？」
(エリ) 「そう言われると…なんかやだ」
(メイ) 「今の地味に酷いな」

「ちやうて！これはそっちやって！！」
「えっ！？こつちでしょ？」

二人は仕掛けに頭を悩ませていた。
ブロックを溝に落として道を作るといふ仕掛けだ。
難易度はそれほど高くないと思う。

「…リチャード君は通ってわざわざブロックを持ち上げたんじゃない
うか」
「どついう事？」

フェザントの呟きにパスカルが尋ねる。

「だって、ブロックが全部上にあつたまんまじゃったろ？」

「んゝ、ブロックを落とさずに進んだとか？」

「どうやって？」

「溝を進んで」

「なるほど！その手があつたか！！」

エリーとメイリはようやく道を作れたようだ。

「次行こう！」

一行は階段を上る。

その上った先にはリチャードが一人立っていた。

「リチャード！」

「アスベル…来たのか」

リチャードは振り返って言った。

リチャードの足元には何人もの兵が倒れている。

「見ての通りだ。待ち伏せを受けて部下が全員やられてしまった。

何とか僕だけが残ったが…」

「この先は危険だ。後の事は俺達に任せてもらえないだろうか」

「それはできない。僕は何としても自分の手で叔父と決着をつけた
いんだ」

アスベルは少し考える。

「ならばせめて俺達を同行させてくれないか」
「…良いだろう」

リチャードは頷いて言った。
だがその時、リチャードは腹を抱えて蹲った。

「くっ…やめろ…出て…来るな!!」

「大丈夫か!? リチャード!」

「やっぱどつか悪いんとちゃうん?」

「もしかしてウォールブリッジの時の怪我が!?!」

「いや…セルディクに盛られとった毒か」

全員フェザントの方に向く。
真面目そうな顔をしている。

「…ああ、叔父は依然毒を盛っていた。だが、それが上手くないかったため今度は直接殺しにかかったんだ」

リチャードは最後にこう言った。

「…この借りは必ず返す! 僕の命を狙った事を後悔させてやる…!!」

「リチャード…」

リチャードは立ち上がり振り返る。

「…もたもたしてはいられない。さあ、行こう」

そう言い、リチャードは城に向かった。
アスベル達はその後を付いて行った。

第19話 いざバロニア城へ（後書き）

（雪龍）

「はぁ、ルイスがいないとすごいやり辛い…」

（メイリ）

「せやけどウチと」

（フェザント）

「儂がいるじゃんか」

（雪龍）

「目の上のごぶが二つで…両目に二つが…」

（メイリ）

「それという事やねん!!」

（ルイス）

「まぁ、やめろよ」

（フェザント）

「おっ、ルイス！」

（雪龍）

「どうしたの？」

（ルイス）

「本編で出番がないから出ようかと」

（雪龍）

「ごめんね。もうちょっと待ってよ」

（ルイス）

「俺主人公なのに…」

（雪龍）

「いや、だから君は——」

（エリー）

「待って！それ以上言わないで!!」

（雪龍）

「何で？」

（エリー）

「ただでさえ出番がないのにこれ以上傷ついたら何しでかすか分かんないよ……」

（ルイス）

「それどういう事だよ……」

（雪龍）

「エリーの言う事にも一理ある」

（ルイス）

「おい！！」

第20話　バロニア城より

ルイスとマリクは牢の中でのんびり（？）していた。

「しっかしあれだな。暇だな、獄中生活って」

「オレも初めて牢に入ったが…確かに暇だな」

牢の中はまた静かになる。

その時、ルイスは何か思いついたように立ち上がった。

「一緒に脱獄しようぜ！」

「…！　一体どうするつもりだ？」

「乗ってくれんのか？」

ルイスはニヤツと笑った。

「この城どないなつとんねん！」

メイリは怒鳴っていた。

「どうしたの？メイリ」

「もう嫌や！！」

メイリは壁に向かって乱射しまくる。

それをなんとかアスベルとパスカルの二人掛かりで止める。

「何があつたんだ！？」

「壁失くしたら一気にセルディクン所に行ける筈や！！」

「要するに広すぎて歩くの疲れたの？」

「ちやうちやう、歩くのメンドなつてん」

「殆ど一緒だよ」

パスカルが珍しく的確かつ冷静にツツコむ。

「それにしても本当に広いね」

「そうじゃな、リチャード君、後どれ位？」

「もう少しだ」

リチャードは一言で答えると先頭を歩きだした。

「リチャード、お前は特に狙われているんだから後ろに……」

「僕は大丈夫だ。それより早くセルディクの所へ……」

「！ 危ないリチャード！！」

アスベルがリチャードを押し飛ばす。

すると、リチャードのいた所に槍が刺さる。

「この武器はまさか…」

アスベルが槍の飛んできた方を見る。

そこには長い金髪後ろで括った眼鏡の女性がいた。

「ヴィクトリア教官…！」

「アスベル、今すぐ殿下をこちらに渡しなさい。そうすれば命までは取らないわ」

そう言った瞬間ヴィクトリアは横にジャンプする。

メイリがヴィクトリアに向けて弾を放ったのだ。

「こんな所まで来て大将渡す思うてんのか？」

「それに8対1じゃえこっちの方が圧倒的に有利だと思うが」

フェザントはそう言ってどこから弓を取り出した。

「フェザントは弓で戦うんか？」

フェザントは右手の親指をピンと立てる。

ここまで来る間に、何度も魔物モンスターと戦ったが、フェザントは戦っていなかったのだ。

「じゃないとこんな物騒な物出さんよ」

「それもそうやな」

メイリはクスッと笑って再度ヴィクトリアの方を向く。

「悪いけど退いてくれへんか？」

「それは無理な話よ」

「気が引けるけど、こっちは8人全員で行きます」

エリーも槍を構え、臨戦態勢に入る。

「あなた達は何か勘違いをしてないかしら。そっちは8人だけど…」

ヴィクトリアの後ろから続々と兵が現れる。

「こっちは20人よ」

「…な、何や！あんた、卑怯やで！！8対20でどないすればエエねん！！」

「…お、落ち着け、メイリ、ここはひとまず深呼吸せえ」

「ヴィクトリア教官！何故こんな事を」

「私はもう教官ではないわ」

「叔父の親衛隊か…！！」

リチャードは細剣を素早く抜く。

全員それぞれの武器を構える。

「一人につき二人ずつがノルマって事で」

「私はあの人と戦う！」

エリーがヴィクトリアを指差して言う。

「駄目よ、エリー！あの方は多分一番強い…」

「大丈夫シエリア。私頑張る！」

「いや、頑張るとかそういう問題じゃなくて…」

「ほんならウチも混ざるわ」

メイリはそう言ってエリーの横に並ぶ。

「それならエエやる？」

「でも……」

「やるならことんやれよ!!」

そう叫んだのはフェザントだった。

それにエリーとメイリの二人は頷いて答える。

「さて、ノルマ三人になったけど儂が五人……いや、十人やるから皆ノルマ二人じゃ」

「それってどういう——」

アスベルが何かを言おうとした瞬間、フェザントは自分の目の前に魔法陣を展開させた。

「一気に片づける!!」

フェザントは弓を魔法陣に向ける。

「闇を運ぶ暗黒の矢よ、仇なす者を虚空へ連れ去れ!!」

魔法陣に向けて矢を放つと、矢は魔法陣に溶けるように消えて、魔法陣が黒く輝きだす。

「クレードルアロー!!」

魔法陣から幾つもの黒い矢が放たれ、兵達を貫いた。

「十人抜きクリア！」

周りを見てみると、アスベル、リチャード、ソフィは大丈夫そうだが、シェリアとパスカルが結構苦戦していた。
フェザントはシェリアを助けに向かった。

多分パスカルならなんとかなると思ったのだろう。

「それどういう事？」

パスカルの眩きは気にしない方向で。

「誰かあたしにかまって〜」

エリー＆メイリサイド

「やるならとことんやれよ!~!」

フェザントの叫びに対し、二人は一度だけ頷いた。

「あなた達は殿下とどういう関係？」

「友達よ（や）！！」

エリーがヴィクトリアに向かって走る。

メイリは後ろから夜鷹の爪跡、ホークネイル悪運の連鎖の順にヴィクトリアへ弾を放つ。

ヴィクトリアはそれを避けるが、避けた先にはエリーが槍を構えていた。

「やつ！閃鋭突！！」

ヴィクトリアはエリーの攻撃を全て躲した。

「ストライダースピア！」

「きゃっ！」

突き攻撃をなんとか槍で受け止めるが、エリーは後ろに吹き飛ばされてしまう。

「燃やして燃えろ、聖なる炎！ボムロツク！」

ヴィクトリアの前後から炎の弾が飛んで行く。

前から来た炎の弾は防いだが、後ろからの炎の弾は防げず、モロにくらっ。

「くっ、ウィンドキルスパア！！」

「うわっ！！！」

メイリはヴィクトリアの攻撃を全てくらい倒れる。

「メイリ！」

「こっちは大丈夫や！」

「そろそろ終わりよ」

ヴィクトリアは地面に槍を付ける。

すると、槍の先に岩が集まりまるで隕石のように固まる。

「行けええ！たあ！！」

岩を投げ上げる。

そしてエリーに三連続の攻撃を見舞う。

最後の攻撃の後、岩がエリーの頭上に落ちて来る。

「自然には逆らえない！？」

ヴィクトリアは後ろを振り向いて驚く。

エリーが岩を槍で突いて砕いていたのだ。

「一発逆転！！」

エリーは両手で槍を持ち、地面に突き刺す。

「一気に決めるよ！」

ヴィクトリアのいた地面が山のように盛り上がり、ヴィクトリアは空中に飛ばされる。

エリーは槍を地面から抜き、縦に構える。

「行くぞー！」

エリーはジャンプし、ヴィクトリアと同じ高さまで来る。

「冥王^{めいおうそうつふせん}槍武閃^{しやうぶせん}！！」

一気に振り下ろし、ヴィクトリアを地面に叩きつける。
叩きつけられた衝撃でヴィクトリアは気を失った。

「どんなもんだ！エッヘン！」

エリーが終わった頃には、他の所も勝負はついていた。

「すごいぞ！エリー！」

「ええ、かつこ良かったわよ」

「ありがとう」

アスベルとシェリアの言葉にてれたのかエリーは頭を掻く。

「よし！この勢いで叔父を…セルディクを倒そう！」

ルイス&マリクサイド

「おい、全然駄目じゃねえか」

「お前は何も出来んくせに偉そうだな」

「この作戦はアンタの術があつてこそこの作戦だからな。アンタに頑張ってもらわないと」

ルイスとマリクは必死に脱獄しようとしていた。

ルイスの作戦は、マリクの？術で牢を壊してしまおうという、作戦とは到底言えないものだった。

「フォトンブレイズでは弱過ぎて駄目だったし、サイフォンタングルは当たりすらしなかったし…」

「オレも牢相手に戦うのは初めてだからな」

「威張って言うなよ!!」

二人は結局脱獄を諦めたそうだ。

第20話 バロニア城より（後書き）

（雪龍）

「聞いてよ皆！アクセス数が20000を超えたよ！！」

（ルイス）

「それって凄いのか？」

（雪龍）

「わかんない。けど何か凄そうじゃん」

（メイリ）

「まあ、そうやな」

（エリー）

「皆様これからもよろしくお願いしますね」

（雪龍）

「では、次回もお楽しみに」

（フェザント）

「オリ技紹介は次回します」

（雪龍）

「活動報告にはルイスのキャラが壊れまくった豹変ボタンがあるよ」

第21話 偽王は滅びる

「やっとここまで来れたか」

リチャードが扉の前で振り返る。
それを見て全員頷く。
準備は万端だ。

「よし！行くぞ！」

リチャードは扉を勢いよく開けた。

中には王座に座った金髪オールバックの男——セルディクと3人の騎士がいた。

「リチャード！よくもここまで…！」

「王都は我が軍勢により完全に包囲されています。あなたはもう終わりです」

「貴様…本当にあのリチャードか？」

セルデイクは武器を下ろして尋ねる。

「何を当たり前のことを」

リチャードが剣を抜いて切っ先をセルデイクに向け言い放つ。

「父上の敵を取らせていただきます！！」

セルデイクはそれを聞いて鼻で笑い、武器をリチャードに向ける。

「今度こそ兄の後を追わせてやる。王位にふさわしいのはこの私だ！！」

セルデイクがそう言うのと周りにいた3人の騎士が一斉に走ってくる。騎士はそれぞれアスベル、ソフィ&パスカルコンビ、エリー&メイリコンビが受け持った。

セルデイクと相対しているのは、リチャード、シェリア、フェザントの3人だ。

「落ちろ！リリジャス！」

シェリアが詠唱を終えるとセルデイクの頭上から雷が落ちる。セルデイクはそれを躲し、リチャードに近付く。

「雷神吼破！」

手に雷を纏わせリチャードに向かって突き出す。
リチャードが躲すと、先程リチャードのいた場所に電気が溜まっていた。

「行けっ！」

フェザントがセルディクに向けて一本の矢を放つ。

「二発！」

今度は二本同時に放つ。

しかし、速さが違う。

速いほうの矢を躲して安心していると、遅い方の矢がセルディクの方に向きを変えて突然速くなる。

それに反応できずに、二本目の矢はセルディクの左手に刺さる。

ライズアップ
「輝蒼天涯！」

そして、次は一気に地面に向けて三本放つ。

地面に放った矢は、セルディクの足元から出て、セルディクの体を持ち上げる。

ヴァイオレット
「刺矢墳塵！！！」

最後に大量の矢を空中にいるセルディクに向けて放つ。

セルディクは自らの武器で必死に防ぐが、矢は肩や足を掠める。

「くっ！」

「この技で沈め！翠緑の暴風！」

「まさかっ……！！！」

「アベンジャーバイト!!」

リチャードはセルディクが地面に付く寸前に術を発動する。
風の牙がセルディクを噛み砕く。

「やったか!？」

「いや…まだだ」

セルディクはゆっくりと立ち上がる。

「貴様らをガキだと思って少し油断していた。だが、もう先程のよう
に上手くいくと思うな!」

セルディクは武器を振り上げる。

「爆焰焼破!!」

武器を振り下ろすと、フェザントに向かって炎の衝撃波が飛び出す。
フェザントは躲す事ができず、直撃してしまう。

「ぐっ!」

「紡ぎしは寛容、その輝きに名を与うる、ピクシーサークル!」

フェザントを光が包む。

すると、体中にあった傷がみるみるうちに治っていく。

「あの娘…治療術が使えるのか。面倒だな」

セルディクは素早くシェリアに近付く。

「これで終わりだ！魔王！爆焰破あー！！」

武器に炎を纏わせシエリアを二度斬りつける。

シエリアは防御できず、吹き飛ばされてしまった。

「きゃあっ！！」

「あっ……」

フェザントは口をぽっかりと開け、弓を落としてしまう。

「お前……」

フェザントの周りを黒い気が漂う。

「女の子を傷つけるとは……男として最低じゃな……！！」

フェザントは腰を落として拳を構える。

「沈めてやる！」

フェザントはセルディクに駆け寄り腹を一発殴る。

「カハッ！」

「まだまだ終わりじゃねえで！」

その後も数発殴り最後に蹴り飛ばす。

そして背中にかけている矢を掴み、黒い気を矢に集中させる。

「はあああああ……！！」

フェザントは蹴り飛ばしたセルディクに向けて勢いよく矢を投げる。矢はただの矢ではなく、黒い気の影響で速度がかなり増していく。

「アウエイクスピリッツ！！！」

黒い気を纏った矢はセルディクを貫いた。

「ふう…はっ、シェリア！」

フェザントは急いでシェリアの下へ走り抱え起こす。

そして、ポケットからアップルグミを出し、食べさせる。

「まだだ…」

「！！！」

フェザントは驚いて振り返る。

数メートル先に倒したと思っていたセルディクがふらつきながらも立っていた。

「まだ私は…死ねないのだ…！！！」

だが、セルディクは一步前に進んだ所で膝をついてしまう。アスベル達も敵を倒したようで、セルディクを見ている。

「ようやく王位を手に入れ、これからという時に…」

「王座は王を選ぶ…」

リチャードは膝をついているセルディクの目の前まで来て言った。

「貴方は選ばれない存在だった。それだけの事です」

リチャードはしゃがみ込みセルディクの肩を掴む。
一同に緊張が走る。

「死ぬ前に理解できて良かったですね。叔父上」

ドスッ！

という鈍い音と共にセルディクの腹から大量の血が溢れ出す。
リチャードが剣を引き抜くと、セルディクは操り人形の糸が切れた
様に前に倒れた。

恐らくもう息は無い。

リチャードは立ち上がる。

そして何かを思い出したように倒れているセルディクを見下ろす。

「おっと忘れていた。これは父の分です」

そう言つてリチャードはもう動かないセルディクの背中を突き刺す。
当然の事ながらピクリとも動かないし声も出さない。

ただただ血が溢れ出るだけ。

見ていられなくなり、シェリアとエリーとメイリは顔を手で覆って
いる。

パスカルはソフィの目を手で覆い、自分は強く目を瞑っている。

「リチャード！もうやめろ！」

アスベルが言うと、リチャードは剣をセルディクから抜き、鞘に納
める。

「これでやるべき事はやった。同じ場所で倒れた父の無念も少しは
晴れるだろう…」

その時、アスベル達の後ろからデールと数名の兵が入ってくる。

「どうやら見事に本懐をお遂げになられたようですね。おめでとうございます」

デールは深々と礼をする。

「デール、外の首尾は？」

「内通していた兵が城門を開き、味方を無傷で王都に入れる事ができました。抵抗が続けている兵の数は多くありません。まもなく制圧できる筈です」

最後にデールはこう言った。

「これで…終わりましたな」

アスベルはその言葉を聞いて思った。

そうだ、これで終わったんだ。

俺の役目はこれで終わったんだ…。

だが、リチャードはデールの言葉に、いや、と言い否定した。

「終わりじゃない。これは始まりだ。今日ここからウィンドル王国の新たな歴史が始まるんだ」

リチャードは振り返る。

「そうだろうか？」

その時のリチャードの眼は優しく全てを包むような眼にも見えたが、

冷たく全てを突き刺すような眼にも見えた。

「ははっー！」

デールは慌てて片膝をつく。

それにつられて後ろの兵とアスベル達も片膝をつく。

ソフィは無理やりパスカルにしゃがむ様な体勢にされたが。

「まずは戴冠式だ。僕が王位に就いた事を内外に広く知らせめなれば」

ルイス&マリクサイド

「はあ、今頃あいつら何してんのかなあ……」

「恐らくバロニア城には着いているだろうな」

「ああもう！暇だ！さっさと出しやがれクソッ……」

ルイスは牢をガンガンと蹴る。
蹴っているうちに足が痛くなってきたので止めた。

「たくよお、俺達このままずっとこの中で暮らすとかねえよな？」
「……………」

「おい、何か答えてくれよ。頼むからなんか答えてくれよ！」
「少し静かに出来んのか」

「何それ！何でそんな急に冷たくなったの！？もう出してくれよお。
限界だよ。ストレスでどうになっちまいそうだよ……」

その時、ルイスの心からの叫びが通じたのか牢の扉が開いた。

「ほら、さっさと出る。釈放だ」

「……マジで？本当の本当に？」

「本当だ。ウソでこんな事はしない」

ルイスは感激のあまり少し泣きそうになっている。

だが、マリクは少し怪訝な顔をしている。

「……どうしてオレ達をここから出す気になったんだ？」

「そんな事どうでも良いだろ。ああ、日光が恋しい……早く外に出たい」

「答える」

兵ははあ、と溜め息をつき言った。

「リチャード殿下……いや、国王からの命令だ」

「！ 国王つて事は……」

「どうやら王都奪還に成功したようだな」

「流石だな！」

ルイスは早く外に出たいので走って外に出た。
マリクも後を歩いていく。

「さて、俺達もバロニアへ行きますか」

「ああ、そうだな」

二人の男がバロニアへ向かった。

バロニアの路地裏――

そこに無線機を耳に当てている男がいた。

「もしもし、聞こえてますかー？」

『聞こえている。一体どうした』

話している相手は声からして女の様だ。

「いやさあ、セルディクがやられちゃったっぽいんだよねえ」

『…そうか。だがあの男がやられた所で我々の計画に影響はない』

「さっすが！クールだねえ」

『貴様はその後も奴の監視をしておけよ』

「ああ、分かってるよ」

そう言つて男は無線機を切った。

「メンドクセエな…ここは一発接触してみつか？でもそんな事したら後でどやされるしなあ…」

男は路地裏を歩きながらブツブツ呟いている。
傍から見たらかなり怪しい。

「たかが一人に振り回されちゃって。なんかバカみてえ」

男はそう言つとニィツと笑った。

「でもあのメンバーにはいなかったな…アイツ。代わりに失敗作がいたけど」

男は路地裏から出ると姿を消した。

第21話 偽王は滅びる（後書き）

（雪龍）

「ではオリ技説明しますか」

ボムロック

【B技／？2／威力：420／クリティカル率：120／ヒット数：2】

有効特性：火傷／人間

使用者：メイリ

炎の弾で敵を挟み撃ちにする術。

詠唱は『燃やして燃えろ、聖なる炎』

233

クレードルアロー

【B技／？4／威力：720／クリティカル率：150／ヒット数：10】

有効特性：猛毒／爬虫類／妖魔

使用者：フェザント

魔法陣に矢を放ち、幾つもの（10発）矢を放つ術。

因みに敵が一匹の場合、矢はその一匹に全て行く。

二匹の時は五本ずつ。

詠唱は『闇を運ぶ暗黒の矢よ、仇なす者を虚空へ連れ去れ』

めいおうそうぶせん
冥王槍武閃

【秘奥義／威力：2000／ヒット数：4】

有効特性：衝撃／無機物

使用者：エリー

槍を地面に突き刺し、相手の地面を盛り上がらせて浮かせ、その後槍で地面に撃ち落とす秘奥義。

因みにエリーの秘奥義発動時の台詞は『一発逆転!』

秘奥義中の台詞は『一気に決めるよ!行くぞー!冥王槍武閃!』

(雪龍)

「はい、という訳でオリ技紹介終了」

(メイリ)

「今回は?」

(雪龍)

「次回のお楽しみに取っておきます」

(フェザント)

「しかしあれじゃろ。クレードルアローが秘奥義じゃと思っとった奴は少ないじゃろ」

(雪龍)

「そうそう、前回書いてたら急に良いのが浮かんできてさあ。急遽変更した訳だよ」

(フェザント)

「僕の知ってる中では一人には目論見がバレとったけどな」

(雪龍)

「とりあえず、次回からは『ラント奪還編』です」

(ルイス)

「ようやく俺が活躍できるぜ!」

(雪龍)

「では、お楽しみに」

第22話 帰還

「なあなあ、部屋何処だっつつたっけ」

「確か一番奥だ」

ルイスとマリクは部屋の手前まで来る。

中からパスカルの声がする。

という事は部屋はここで合っている。

「よし、開けるぞ」

ルイスはドアノブに手を掛ける。

だが回そうとしない。

「どうしたんだ？」

マリクが心配しルイスに声をかける。

ルイスはロボットのようにつくりと顔をマリクの方に向ける。
顔はかなり汗だくだった。

「な、何があっただ？」

「ひ、ひ、開いてくれない？」

「どういう事だ？」

マリクは怪訝な顔をする。

「いやさ、緊張してきた」

「ドアを開けるだけなのに何故緊張するんだ」

「仕方ねえじゃん！久し振りに会っただぜ！？」

「……一日ぶりだろ」

結局マリクがドアを開く事になった。

だがマリクもドアノブに手を掛けた所で固まる。

「やはりお前が開ける」

「んでだよ！！てめえも緊張してんのかよ！！」

その頃中では。

「な、何だ？」

「大声出して…誰やねん」

普通に聞こえていた。

「儂が様子を見て来るわ」

フェザントがドアを開けた。

「「うおあつ！！！！」」

「な、何！？」

突然ドアが開いた事に驚いたルイスとマリク。
突然大声を出されて驚いたフェザント。

「…ルイス？」

「よ、よお」

沈黙。

空気が重い。

出来る事なら今すぐにもエスケープしたい。

「あれ？教官？何故ここに？」

「お前達には一つ大きな借りがあるからな。オレも同行させてくれ」
「教官のお力をお借りできるのはとても心強いです」

アスベルは敬礼をする。

するとソフィも真似して敬礼し言った。

「よろしく…教官」

「…やれやれ、この分だと教官で定着してしまいそうだな」

「俺にとつて教官はずっと教官ですから」

「アスベル…」

「それではさっそくラント領へ向かいましょう」

「あり？何で？」

この場で何も説明を受けていないルイスとマリクは何故だか分からない。
特にルイスは驚いていた。

アスベルはラントから追放されたにもかかわらずラントへ行こうと言うのだ。

「そういえば何も説明してなかったね」

そう言つてエリーが説明を始めた。

エリーから説明を受けてルイスとマリクは大体分かった。

ラントの領民がウィンドルを離れ、ストラタへの正式編入という意見を主張している者がいるという事。

リチャードがラントへ侵攻し、ラントが戦場になるかもしれないという事。

だからヒューバートに交渉の席に着いてもらうためにラントへ説得しに行くのだという事らしい。

「成る程。だったら急がねえとな」

一行は急いでラントに向かう事にした。

オリジナルチャット――二度は無いよ――

(エリ) 「ルイスおかえり!」

(ルイ) 「おう、ただいま」

(フェ) 「しかし良かった。捕虜が処刑されるかもしれんて聞いて皆ヒヤヒヤしとった」

(ルイ) 「別に俺悪い事してねえんだけど…」

(エリ) 「いや、思い切りリチャード殴ったでしょ」

(マリ) 「そんな事をしたのか」

(メイ) 「でも今殴ったら即死刑やで。国王やもん」

(ルイ) 「危なかったな…」

(エリ) 「あの時点でも殴ったらいけないんだけどね」

(ルイ) 「…自重します」

船の甲板に立ち海を見ているマリク。

そこにアスベルとルイスがやってきた。

「教官、どうしたんですか？こんな所で」

アスベルの声にマリクは振り返る。

「今までの騎士生活を振り返っていたのさ」

「例えば？」

「…オレの手で守った命と奪った命……どちらが多かったのだろうか」

「守る命と奪う命…」

マリクは手を顎に当て目を閉じ言った。

「騎士になるという事は守る命よりも奪う命の方が多くなるのだと今更気付いた」

マリクも騎士になる前はウィンドルの国民を、人々の命を守ろうとしたのだろう。

だが、現実はそうではなかった。

「命の重さは数では測れない。だが、オレが奪った命にも守りたかった命があったはずだ」

騎士になってから日々剣を振るい、血を浴びてきたのだろう。
だがそんな事は望んでいなかった。

「その償いにと彼らを守るために戦ってもまた誰かが不幸になる…」

そんなのは皆同じの筈だ。

それでも国の為にと剣を振るうしかなかったのだ。

「この業からいつになったら抜け出せるのだろうな…」

「…いつかその答えは出るのでしょうか」

「出ねえだろ」

ルイスがキツパリと言う。

アスベルとマリクはルイスの方を見る。

「幸せな人間がいたらどっかに不幸な人間がいる。世の中の全員が
幸せになるのなんて不可能だ」

「だが…」

「だからその分幸せな奴は苦勞しなくちゃなんねえ。不幸な奴は努
力をしなくちゃなんねえ」

ルイスは少し笑って言った。

「それが人間ってもんだと思うぜ。俺は」

ルイスは踵を返し、歩き始める。

「ま、こんなのただの綺麗事かもしれねえけどな」

ルイスは船内に入って行つた。

アスベルもその後を追う。

マリクはもう一度海を見て思った。

（ルイスの様に考える事ができていたら…もしかしたらお前を失わずに済んだかもしれない…）

マリクは今更タラレバを考えても仕方ないと首を振り、自分も船内に戻った。

一行は船から降り、東ラント街道を通りラントの門の前まで来ていた。

「門が閉じられてるね」

パスカルが少し不安になって言う。

「頼めば開けてくれるわ。私はいつもそうしてたもの」

「俺達はな。ただ、アスベルはあいつらに顔を知られてる可能性がある」

「そっか…門を通らずに入る方法ってないの？」

「そんなのあつたら……あ」

ルイスは水路を見て気付いた。

「入れるぜ。誰にも気付かれずに、な」

ルイスは着いて来いと言って水路から中に入って行った。

他の者もルイスに続き水路から入った。

水路から一行は領主邸に行った。

ヒューバートは恐らく書斎にいるだろうと、一行は書斎に入って行った。

「…これは予想外の来客ですね。面会の約束をした覚えはありませんが」

書斎の椅子に座っていたのは、青い短髪に黒い縁の眼鏡、青を基調とした軍服を着た青年。

それは確かにヒューバート・オズウェルだ。

「ヒューバート、話があつて来た。無条件に勧告を受け入れるとは言わない。だがせめて交渉の席に着いてもらえないか？このままでは輝石クリアスの流通が滞り、ウィンドル国民の生活に深刻な影響が出るんだ」

最後に頼む、ヒューバートと言うと、ヒューバートは呆れたように

腰に手を当てた。

「新国王陛下はあなたを遣わせば僕が撤退勧告に応じるとでも思ったのでしょうか？」

「俺がここへやって来たのは自分で志願したからだ」

「だとしたらあなたの見通しは甘過ぎますね」

「ヒューバートめえ、随分嫌味を言うように…じゃねえや。偉そうになりやがって！」

全部言ってから訂正するルイス。

その後10秒ほど睨み合いが続いた。

だが、それは外からの爆発音と悲鳴で止めざるを得なかった。

第22話 帰還（後書き）

（雪龍）

「今回は全てフェザントです」

しきよう
矢響

【A技／？1／威力：1000／クリティカル率：1000／ヒット数：1】

有効特性：射撃

矢を放つ技。

台詞は『行けっ！』

れんさ
連叉

【A技／？2／威力：1300／クリティカル率：1200／ヒット数：2／ニュートラル】

有効特性：射撃、植物

スピードの違う二本の矢を放つ技。

遅い方の矢は敵を追跡し、突然速くなる。

台詞は『二発！』

ライズアップ
輝蒼天涯

【A技／？3／威力：3000／クリティカル率：1500／ヒット数：3／上下ステイック】

有効特性：射撃、衝撃

地面に矢を放ち、敵の足元から出し敵を浮かせる技。

因みに名前の元ネタは『奇想天外』

ヴァイオレット
刺矢墳塵

【A技/?4/威力:410/クリティカル率:210/ヒット数:8/上下ステイック】

空中にいる敵に容赦なく矢を放つ技。

空中にいないと当たらないので輝蒼天涯などで浮かせないといけな
い。

名前の元ネタは『獅子奮迅』

アウェイクンスピリッツ

【秘奥義/威力:2000/ヒット数:7】

有効特性:打撃/妖魔

敵を数発殴り最後に蹴り飛ばし、黒い気を纏わせた矢を投げつけ貫
く秘奥義。

因みにフェザントの秘奥義発動時の台詞は『沈めてやる!』

秘奥義中の台詞は『まだまだ終わじやねえで!はああああ!!
アウェイクンスピリッツ!!』

(雪龍)

「実は今回から人気投票始めます!」

(ルイス)

「一人最大7回まで。同じキャラには3度までお願いします」

(メイリ)

「必須の所は絶対に答えてな!」

(フェザント)

「目次下リンクから行けるけん」

(エリー)

「たくさんのお票待ってまーす!」

(ルイス)

「一票も集まらなかったらどうする?」

(雪龍)

「…集まると信じよう」

第23話 ウィンドル軍侵攻

外からの悲鳴が部屋にまで聞こえてくる。

全員が外を気にしていると、ドアから茶髪で眼鏡を掛けている男――

――レイモンが入ってくる。

「少佐！緊急事態です！ウィンドル軍が突然攻めてきました！」

「はあ！？」

ルイスが思わず声を上げる。

ルイスだけではなく、他の者も驚いている。

「ウィンドル軍の勢いは凄まじく、味方は既に市街地まで押しこまれています！」

「どういう事やねん！」

「戦争を止めるために来たんじゃないかったの！？」

メイリ、エリーと驚きの声を上げる中、ヒューバートが何かを分かったように腕を組み、なるほど、と言った。

「そういう事でしたか。僕を説得するふりをして軍勢を引き入れていたとはね」

「違う！俺はそんなつもりじゃ！……」

「ここま小馬鹿にされるといっそ小気味いい位ですよ」

「違うっつつてんだろ！！」

ルイスはヒューバートに向かってそう叫ぶと、窓に向かって走った。

「何をする気だ！？」

「止めに行くんだよ！」

ルイスは窓のサッシに上りそのまま外に飛び降りた。
いつも思うが何故窓からなのだろうか。
ドアでは駄目なのだろうか。

「…全軍に第三種迎撃態勢を指示！なんとしても持ち堪えろ！！」

レイモンは敬礼をして部屋を出て行った。
それを見送ってヒューバートも外に向かう。

「ヒューバート、信じてくれ！俺は何も知らないんだ！！」
「それが本当だとしたらあなたは惨めな使い捨ての駒に過ぎないと
言う事ですよ」

ヒューバートはドアを強く閉めて出て行った。
残された一行には数秒の間沈黙が続いた。
それを破ったのはシェリアだ。

「……どうするの？」

シェリアは少し俯きアスベルに尋ねた。

「…俺達も外に出よう。状況を確認しないと！」

オリジナルチャット——— 残念な人達———

(フエ) 「リチャード君…」

(シェ) 「何でこんな事に…」

(パス) 「も、もしかしたらリチャードじゃないかも!」

(シェ) 「ウィンドルの軍勢って言ったのよ? リチャードじゃないわけ――」

(フェ) 「おお! 確かにそうかもしれんな!」

(パス) 「でしょでしょ!」

(マリ) 「おい、シェリア!」

(シェ) 「どうしたんですか? 教官」

(マリ) 「こいつら、もしかして!」

(シェ) 「ええと!」

(メイ) 「頭弱いねん。要するにバカや」

(シェ) 「遠慮ないわね!」

兵達の怒号が飛び交う。

ウィンドルの兵がストラタの兵を斬ると別の兵がウィンドルの兵を斬る。

ラントが戦場になっている。

たくさんの血が流れている。
その様子を見てルイスは齒軋りをする。

「何でこんな事を……!!」

ルイスは戦場に向かおうと走り出す。

すると前方にリチャードがこちらに向かって歩いて来るのが見えた。

「ストラタの少佐を説得できたのかい？」

「リチャードッ!! てめええええ!!」

ルイスはリチャードに向かって走り出す。

そして、手の届く範囲まで近付くと殴りかかる。

だが、それは簡単に躲かれる。

「どうやら様子を見に来て正解だったようだね」

「何がだよッ!!」

ルイスはリチャードを足払いし倒す。

そのままりチャードの上に乗リ拳を構える。

「何でこんな事しやがった……!!」

「アスベルには伝えていたが聞いてないのか？ ラントを攻めると」

「だけどころならねえ様に俺達がヒューバートを説得しに来たんだろぅが……!!」

「これは君達のための戦いでもあるんだ。故郷を取り戻してあげると約束したじゃないか」

「こんな事してラントを取り戻せても嬉しかねえんだよ……!!」

ルイスが拳を振り下ろす。

だが、リチャードの顔面に拳が触れる前に風のようなものがルイスを襲った。

ルイスは何が起こったか分からないうちに吹き飛ばされる。

ルイスが地面に激突すると同時にアスベル達が領主邸から出てきた。

「ルイスー!!」

「君がどう思っているにもラント侵攻は実行したよ」

「リチャード君…!!」

アスベル達は全員リチャードの方を向く。

ルイスも体を起こす。

「僕に逆らう者は容赦しない。思い知らせてやらないとね」

「ふざけんなよ……てめえ最近そればっかじゃねえか…!!」

ルイスはよろよろと立ち上がる。

フェザントが肩を貸す。

「今のてめえのやり方はやり方は間違ってる!!」

「……どうやらラントを攻め落とす前に君と話をつける必要があるようだね」

ルイスが拳を構える。

他は皆武器を構える。

「シエリア、エリー、皆と一緒に街の人々を安全な場所に誘導してもらえないか」

アスベルが小声で呟くように言う。

そして振り返り言った。

「俺達が止めるから早く！戦いが本格化してからでは遅い！」

「……わかったわ。行きましようソフィ」

二人は頷き、シェリアはソフィの手を引いていこうとする。

だがソフィは首を横に振る。

それをシェリアは無理やり連れて行こうとする。

マリク、メイリ、パスカルも行く。

「ルイスもう一度聞く。僕の何が間違っているって？」

「力に頼って恐怖で縛るやり方は何も解決できねえ」

「そんなやり方じゃリチャード君が求めとった平和は手に入らんで」

「わかってくれ、リチャード。昔のお前に戻ってくれ！」

上からルイス、フェザント、アスベルが順にリチャードに訴えかける。

リチャードは目を閉じ、そうか、と言った。

アスベル達はわかってくれたのか、と安心したがしかし、

「本気なんだね。君達も僕に逆らうのか。所詮は君達も……」

リチャードは目をかつと開き、剣を抜く。

そしてアスベル達に切っ先を向けると、風が切っ先に集中し刃の様になってアスベル達を襲う。

それを見てヒューバートが懷から武器を取り出し、変形させて風の刃を防ぐ。

風の刃は受け止められたものの、その衝撃に耐えきれず膝をついてしまう。

「ぐっ……」

「ヒューバート！」

アスベルはヒューバートに駆け寄る。

「なんて凄まじい闘気だ……本当にあのリチャードか？」

ルイスはリチャードに駆け寄る。

幾度も風の刃が来るが全て躲し、近付いていく。
今度こそルイスの拳が触れるかと思つたが躲され、代わりに背中に刃を突きつけられる。

「ヤツベエ……」

「終わりだ！！」

リチャードは剣を振り下ろす。

だが、刃はルイスに触れる事はなく金属音が響いた。

「大丈夫か！ルイス！」

アスベルの剣がリチャードの剣を防いでいたのだ。

リチャードは一旦離れ、その代わりにヒューバートとフェザントがアスベルの近くに駆け寄る。

「こうなったら全員纏めて死ねえええ！！！！」

「だめ！！」

その時リチャードに向かって花の様に綺麗な紫が飛んで行った。

第23話 ウィンドル軍侵攻（後書き）

（雪龍）

「今回の皆の立ち位置が大変だったんだよね…」

（ルイス）

「皆気付いてるかもだけどずっと玄関の前にいたからな」

（雪龍）

「そういう描写が無いから余計分かり辛いつていうね」

（ルイス）

「急いで俺を動かして原作の位置と合わせたよな」

（雪龍）

「ところで人気投票はストラタに行くまでにします！」

（ルイス）

「ストラタに着いたら打ち切るのか」

（雪龍）

「皆さん！……まだ続いていますよ！」

（ルイス）

「投票よろしく！」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

第24話 止めるための刃（前書き）

最近ルイスが自己中になつてゐる気がする…。
やっぱ作者に似るものなのかな…。
途中おふざけが過ぎたような気がするし。
真面目な展開が苦手なのかな。

まあ、第24話スタートですっ！

第24話 止めるための刃

その場にいる全員が声のした方を見る。

そこにはリチャードに向かって跳んでいるソフィがいた。

リチャードがソフィに気付き、剣でソフィの攻撃を防ぐと激しい金属音が響いた。

「どおけええええ!!!」

リチャードは目を見開き剣を持っている手に力を込める。

ソフィは危険だと思ったのか軽い身のこなしで後ろに移動する。

「ソフィ！何故戻ってきた!？」

アスベルが怒鳴る。

ソフィはアスベルの言葉を見無視し、一言こう言った。

「守る！」

そう言っただけでソフィはリチャードに向かって駆け出す。

途中リチャードが風の刃を出して攻撃してきたが、全てリフレットで防ぐ。

だが4発目ほどで耐えきれず空中に逃げる。

着地したのは噴水の中だった。

するとその時ソフィのてが光り出しその光が全身も包む。

「この光は……あの時の……!!」

アスベルはその光を何度か見た事があった。

最初に見たのは七年前、妙な魔物に襲われたときにソフィが発していた。

次に見たのはこの間の実地任務での事だ。

この時も妙な魔物に襲われたときに、今度はアスベルが発したのだ。その後自由に光の力を使えるようになった。

「こ、これは…!？」

ヒューバートは自分の手を見る。

手から光が発せられ、その光がソフィに向かっていく。

「また貴様が……」

リチャードが剣を構える。

「またしても貴様が立ち塞がるのか!!」

リチャードは剣を突きだし、風の刃をだす。

ソフィはそれをジャンプして躲す。

風の刃は噴水に当たり噴水が粉々になる。

ソフィはリチャードの後方に着地し大きな光を発する。

「守る!あの時の様にはさせない!!」

アスベル、ルイスはその言葉に驚いた。

——あの時の様にはさせない

ソフィは確かにこう言った。

ソフィには記憶が無かったのに。

七年前のあの時の事は知らない筈なのに。

「まさか……でもソフィは……」

二人が困惑する中、ソフィとリチャードは拳と剣を交わらせた。その瞬間大きな光が放たれ、ソフィの体が先程とは反対側にある噴水まで吹き飛ばされる。

ソフィは苦しそうに倒れる。

リチャードはゆっくりとソフィに近付く。

「また……あの時と同じように……！！」

アスベルは七年前の事を思い出していた。

あの時は自分が非力なせいでソフィを失ってしまった。

「死ねえええええ！！！」

リチャードが剣を振りかぶる。

そのまま振り下ろしてしまえばあの時と同じようにまた……。そう思うとアスベルは走り出していた。

「やめろおおお！！！」

アスベルはすぐさま抜刀し、リチャードの脇腹を斬る。

ルイスはそれを見てはっとした。

今までルイスは剣を抜いていなかった。

それはリチャードが友達であり、友達に剣を向けるのは友達として最低だと思っていたからだ。

「裏切ったな……!!」

リチャードは俯いて言う。

「僕を……」

リチャードの左目がギロリと紅く光る。

「裏切ったなああああつっ!!!!」

リチャードが大声で叫ぶとリチャードの体から黒い何かが放たれる。そのリチャードの後ろからルイスが斬りかかる。リチャードはそれに気付き横に跳び躲す。

「すまねえな、リチャード。自分であんな事言っというて言い訳に聞こえるかしんねえけど……」

——冗談でも友達に刃を向けるなんて真似すんじゃないねえ!!
ウォールブリッジでリチャードに言った言葉が甦る。
ルイスは鼻で笑って続けた。

「別に冗談でお前に刃を向けてんじゃないやねえんだ。お前が嫌いだからでもねえ。むしろ……」

ルイスは笑って言った。

「大切な友達だから……お前を止める為に！俺は剣を振るんだ!!」

「なんかスゴイ音せえへんかった？」

メイリがマリクに問う。

マリクは領主邸の方を見て言った。

「アスベル達に任せていれば大丈夫だろう。それよりも今はこつちだ」

「そうそう、ルイスもいるんだし！」

マリクに続いてエリーも笑いながら言う。

メイリは不安になりつつも心の中で、全員が安全であるように祈った。

「あわわわ、どーしよう！」

「どうしたの！？」

「街の人達がどこにいるか分かんない！」

「せやから今捜してんねんやろが！！」

「あつ、そっか」

相も変わらずどんな状況でも空気をぶち壊してしまうパスカルだった。

パスカル称号：空気ブレイカー

「いや、いないから!」

リチャードは剣を構えてルイスに向かって走る。
ルイスも刀を構えて迎え撃てるようにする。

「風神剣!!」
きょうふうせん
「響風閃!!」

ルイスは風を纏った突きを横に開店して躲し、その勢いでリチャードの腹を一閃する。
ルイスの一閃は風を起こしそのままリチャードの体を吹き飛ばした。

ルイスは完全に入ったと思いリチャードの方を見る。

だがリチャードの腹に傷は無く、服が少し斬れているだけだった。

「なっ!？」

「来たれ妖魔の牙!リープウィル!」

リチャードから日本の黒いレーザーの様なものが放たれ、ルイスから体力を奪いリチャードの下へと戻っていく。

「雷斬衝!」

アスベルは横からリチャードに雷を帯びた剣を振り下ろす。
するとリチャードに纏わっていた黒い何かが無くなり、それなりのダメージを受けているようだった。

「斬り裂け!闇の刃!ダークスリヴァー!」

フェザントから黒い刃が二つ弧を描きリチャードに放たれる。
刃はリチャードの下で交差し、リチャードを斬り裂いた。
その後も各々が攻撃を繰り返す。

リチャードはかなり体力が無くなったが、また左目が紅く光る。

「雷神剣!」

フェザントにリチャードの剣が襲いかかる。

「生かしはしない!」

リチャードは剣を後ろに引く。

「鮮血よ散れ、薔薇のように！」

何度も何度もフェザントを突く。

最後にリチャードは紅い薔薇をフェザントの背後に具現化させる。

「ブラッディ・ローズ！」

最後に薔薇と共にフェザントを散らせた。

ヴァーテクス・ローズに似ていたが、先程の技は明確な殺意が籠っていた。

フェザントが力尽き倒れる。

「フェザントッ！」

「次はお前だ！！」

今度はルイスに狙いを定める。

「ちいっ！火弾衝！」

一振りで火球を出し、リチャードにぶつける。

リチャードはよろめきながらも術の詠唱を始める。

「来たれ安息なき剣、連なるは悲痛！レストレスソード！」

ルイスの上空から幾本もの黒い刃が振る。

全ては躲しきれず剣でいなすものの、全てはそう上手くいかずルイスの体を斬り裂いていく。

「衝皇震！」

アスベルがリチャードに向かって一閃する。

だがそれは躲され、代わりに剣が振り下ろされる。

アスベルは剣で受け止めるが、剣に罅が入ってしまう。

（ここに来て力が上がった！？）

アスベルは剣を鞘に納める。

ここからは帯刀技しか使えない。

抜刀術を使ってもすぐに折れてしまうだろう。

「フレアショット！」

ヒューバートの銃から小さな火球が何発も放たれる。

あまりダメージは与えられないがリチャードに隙が生まれる。

「アストラルベルト！」

ソフィがアスベルを真似た様に光を刃にして振る。

リチャードはそれを剣で受け止める。

「はっ！潜身脚！裂震虎砲！！」

アスベルはリチャードを足払いし蹴りあげた後、虎の咆哮でリチャードの体を吹き飛ばす。

吹き飛ばした先には刀を構えたルイスがいた。

「響風閃！！」

ルイスの一閃にをともに受け、リチャードは吹き飛ばされそのまま倒れた。

「じゅめん...リチャード.....」

第24話 止めるための刃（後書き）

（ルイス）

「毎度の事ながら戦闘って難しいよね」

（雪龍）

「うんうん、難しい。どうしても上手くできないよね」

（ルイス）

「安心しろ。どんな時でも上手くできてない」

（雪龍）

「か、辛口デスネ……とりあえずオリ技紹介です」

響風閃
きょうふうせん

【B技／？3／威力：350／クリティカル率：80／ヒット数：4】

有効特性：斬撃、植物

使用者：ルイス

素早く横に一閃しそのまま風と共に吹き飛ばす技。

（ルイス）

「ん？今回一つだけだったか？」

（雪龍）

「フェザントのはオリ技じゃなくて敵キャラのだし良いかって…」

…」

（ルイス）

「そういうもんなのか。ま、次回もお楽しみに」

（雪龍）

「次回の投稿は結構遅くなります。スイマセン」

（ルイス）

「そういう事は早く言えよっ!!」

（雪龍）

「投票も待ってまーす」

第25話 甦った記憶（前書き）

遅くなると言いつつそうでもなかったですね。

第25話 甦った記憶

「ぐっ…っ…」

リチャードは苦しそうにしながらも立ちあがろうとする。

「くっ…この…!」

リチャードはやつとの思いで立ち上がる。
だがかなりフラフラとしている。

「オオオオオ!!!」

リチャードの体からまた黒い何かが発せられる。

今度のは先程より大きい。

それを見た瞬間ソフィからも同じ程度の大きさの光が放たれる。

そして黒い何かと光がぶつかり激しい衝撃が地を駆ける。

兵達やシェリア達は何があつたかも分からずにただ吹き飛ばされそうになる。

それを必死に何かに掴まり踏みとどまる。

「おお おおおお!!!!」

「はああ ああああ!!!!」

二人の叫びに呼応するかのように二つの力は大きくなっていく。
二つの力は均衡していた。
だが、

「はあああああああ!!!!!!」

ソフィの光が増し、黒い何かを抑える。

そして完全に消し去るとリチャードの体のみが吹き飛ばされた。

「ぐあっ！……くそ……お、おのれ……！！」

「そのお怪我では無茶です、陛下！」

デールが数人の兵を引き連れリチャードに駆け寄る。

そしてデールが兵達に命令を出した。

「全軍に告ぐ！撤退だ！」

兵達は急いで他の戦っている兵にその命令を伝えに行く。

残った兵はリチャードに肩を貸し、ラントから出て行った。

「皆！大丈夫！？怪我はない！？」

シェリアが駆け寄り尋ねる。

「フェザントの傷が一番深い……治してやってくれ」

アスベルがそう言うと、わかったと言いフェザントに駆け寄った。

「ソフィ、大丈夫か？」

アスベルが尋ねるがソフィは返事をしない。

どうしたのか気になっているとゆっくりと振り返った。

「…平気」

その言葉を聞いてアスベルは胸を撫で下ろす。

「…わたし、思い出したの。小さな頃の…皆の事、思い出したの」

治療をしていたシェリアはその言葉に驚きソフィを見る。

アスベルも、ルイスも、ヒューバートも、エリーも。

全員がソフィを見る。

「ヒューバートは…大人しいけどしっかりしてて、いつも皆を気にかけていた」

「エリーは…皆の事を大切に思ってた、皆のお姉ちゃんみたいだった」

「シェリアは…体が弱いのに負けずにいつも元気だった」

「ルイスは…少しゃんちゃだっけど、わたしをいつも助けてくれた」
「そしてアスベルは…優しくて、強くて、わたしを…皆を守ってくれた」

ソフィは最後に全員の顔を見て言った。

「また…会えたね」

その言葉が全員の胸に響いた。
もう二度と会えないと思っていたソフィにまた会えた。
昔と同じ、花の様な少女に。

「…ああ」

アスベルがそう言うのと皆思い思いに声を掛けた。

「少佐！ご無事ですか！」

レイモンが庭に入ってくる。

何かの報告だったらしく、ヒューバートが何かを言うと、レイモンは敬礼して走って行った。

それにヒューバートも着いて行く。

「……結局俺は守れなかった…」

アスベルは空を見上げて悔しそうにする。

家は燃え、道は割れ、川は血で少し濁っている。

「そんな事ない」

ソフィが小さい声で呟くように言った。

「アスベルはわたしを守ってくれた。小さい頃と…同じ」

アスベルは微笑みソフィの頭を撫でる。

「ちょっとだけだけど思い出せて良かった…」

ソフィは少し俯く。

「良かった…筈なのに。なぜだろう…なんだか…不安なの。このまま色々な事を思い出していくのが怖い…」

「ソフィ…」

「思い出すのが、怖い…か…」

ルイスがそう言うともリク、パスカル、メイリの三人が走ってきた。そこでルイスの意識は途切れた。

アスベル、ソフィ、メイリの三人はラントの裏山の花畑に向かった。ルイスが倒れた後、アスベル、ソフィ、マリク、パスカル、メイリの五人で砦の様子を見に行った。

その時ソフィが花畑に行きたいと言ったのだ。

マリクとパスカルは先に帰り三人で行く事にした。

何故メイリがいるのかというと

「ウチメツチャ花好きやねん」

だそうだ。

三人は森を抜け、花畑に到着した。

「何やココ！メツチャキレイやん！」

花を見た途端メイリははしゃぎ出す。
だがソフィは少し浮かない顔をする。

「わたしとアスベル、ここで会ったんだよね」

「え？そうなん？」

「ああ、子供の時も今回もここで出会ったんだ」

「わたし、アスベル達を助けた後どうしていたんだろう……」

アスベルの頭に思い出したくない記憶が甦る。

あの時あの場にソフィはもういなかった。

「アスベル達に会う前はどうしていたんだろう……」

ソフィは空を見上げた。

「どこで何をしていたんだろう……」

「考えると…不安になるの……」

ソフィは振り返る。

「思い出さない方が良くから思い出せなくなってるんじゃないのかな……」

「…思い出した過去が嫌なものだとも限らないだろ？」

「せやで、マイナス思考はアカン。そんな考え方しとってもエエ事ないねん。笑顔が一番や」

「…うん……」

ソフィは頷く。

それを見てアスベルとメイリは少しホッとした。

「もし過去に何かあったとしても過去なんて問題じゃない。大事なのは今なんだ、ソフィ」

「今……」

「そろそろ家に帰ろう。皆が心配している」

「うん……」

ラントの広場では傷ついた兵達の手当てがされていた。
アスベル達はそれに近づく。
するとバリーが前から歩いて来た。

「何か手伝う事はあるか？」

アスベルはごく普通に尋ねた。
だがバリーは何も言わずアスベルの横を通り過ぎて止まる。

「……自分達の事は自分達でやれますから。肝心な時にいなくなっていたお方に頼るほど俺達は愚かではありません。頼るならヒューバート様を頼ります」

そう言うバリーは少し早足で行ってしまった。

「バリーさんは…誤解してるんです……」

「アイツ何も知らんくせに…シバいたるか……!!」

メイリは怒ってバリーの下へ行こうとするがアスベルに止められる。

「バリーは俺が七年間王都へ行ったきりだった事も含めてああ言っただ…」。俺がずっと不在だったのは事実だしな。立場をわきま

えず自分の事だけ考え行動していた」

アスベルは目を閉じる。

「俺は…ラントにいない方が良いのかもしれないな……」

「またいなくなってしまうの…？もしかしたらヒューバートだって
いなくなるかもしれないって言うのに……」

「どういう事だ！？シェリア」

シェリアが言うには、ヒューバートのやり方がストラタ本国によく
思われていないらしい。

そのせいで本国へ召還命令が出されたのだと言う。

「……ちよつとヒューバートの所へ行ってくる！」

（…また皆……離れ離れになってしまうの…？）

「……………んん、あ？」
「！ やつと起きたか」

ルイスが目を覚ますとシェリアを除く一行がいた。

「えーと…………皆して人の寝顔見てたの？」

「そうじゃなくて起きるのを待っていたんだ」

「…何で？」

「話すと長くなるんだが…………」

先程アスベルはヒューバートに真相を確かめるために会いに行った。
本国から召還命令が出されたのは本当だった。

ヒューバートは一度戻ったら二度と帰ってこない可能性がある。
だがヒューバートがラントにとつて必要だと思ったアスベルは、
信書を持ってストラタへ行き命令の撤回を頼む事にしたのだった。

「成る程な。じゃ、さっさと行きますか」

「大丈夫なのか？まだ体が…………」

「俺は大丈夫だよ。それよりフェザントの方が大怪我だったろ」

「俺は傷の治りが速えんよ」

そう言つてフェザントは服を捲る。

確かに傷は塞がっていた。

「なら行こうか」

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタ
へ行く事になった。

第25話 甦った記憶（後書き）

（ルイス）

「みてみんなにユーザ登録したって本当か？」

（雪龍）

「本当。いずれルイスの絵をアップすると思うから」

（ルイス）

「期待せずに待つとくよ」

（雪龍）

「そう言ったと思った……次回は「第26話 仲直り」です」

（ルイス）

「次回のタイトル出すなんて初めてじゃねえか？」

（雪龍）

「次回はこれしかないと思って」

（ルイス）

「成る程な。だけど次回は殆ど原作と同じだからもう良いんじゃないかね？」

「？」

（雪龍）

「駄目だよ……！」

（ルイス）

「……何で？」

（雪龍）

「あのシーン好きだから」

（ルイス）

「……そうか」

（雪龍）

「次回もお楽しみに」

第26話 仲直り

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタへ行く事になった。
の筈が。

「彼女の身柄は私が預からせてもらっている」

「何やねん、アンタ。今シエリア搜しとんねん。邪魔すんなや」
「厭らしい目付きしやがって。変態」ボソッ

ルイスが斜め下を向いて聞こえないように言う。
だが、レイモンにはちゃんと聞こえていた。

「厭らしい？私のどこが厭らしいと……」

「あれ？聞こえてたのか。目は悪いけど耳は（無駄に）良いんだな」

ルイスの挑発に乗らずにレイモンは一度咳払いをする。

「……言い過ぎたわ。レイモンさん、さっきの話はどういう意味？」
「彼女は重要機密を盗み聞きしていたんでね。ほんのお仕置きですよ」

「へえ、シエリアは今どこにいます？」

「教える訳ないでしょう。それでも彼女の罪を許してはあげますよ。条件付きですが」

レイモンは少し笑みを浮かべる。

それを見てフェザントがクスクスと笑いだす。

「何がおかしいのですか？」

「いや…ただの思い出し笑いじゃけえ…気にせんで…ププッ」

何故このタイミングでなのかは分からないがただの思い出し笑いだったので、レイモンは仕切り直して言った。

「彼女を助けたいならストラタ行きをやめてもらいたい」

「ちよつと！人質に取ったって事！？」

パスカルが少し強く言う。

「シエリアいじめる人……許さない」

ソフィも拳を構える。

他の者もそれぞれ武器を構える。

「私と事を構えるのはよした方が良いですよ。あの娘を無事に助け出したいのならね」

「くっ……！」

全員武器をしまう。

それを見てレイモンはまた少し笑みを浮かべる。
するとやはり――

「プッ」

「ちよつ、あかんて。今そういう空気ちゃうねんから」

「じゃけど…思い出し笑い…ププッ」

やはりフェザントが思い出し笑いをした。

「…信書を渡してもらいましょう。早くしないとあの娘が魔物の餌

になってしまいますよ」

「なるほど。あなたはそういう手できましたか」

レイモンが驚いて振り返る。

そこには青い髪に青い軍服の青年がいた。

「少佐……！」

「シェリアはどこです？ 言いなさい！！ 言わない場合この卑怯な脅迫の事実を本国に知らせなくてはならない」

ヒューバートはそれだけではないと続けた。

「あなたは……上官である僕の書いた信書を奪い取ろうとした。さあ……どうしますか？」

「くそっ……ここまでかつ！」

レイモンは懷からナイフを取り出す。

それを見てヒューバートは構えるが、レイモンはなんと自分の腹を刺した。

そして崩れるように倒れた。

「ななな、何しとんねんコイツ！ ど、どないすればエエんや！？」

「レイモン！ 早まった真似を……。レイモンの事は僕がなんとかします！ 皆さんはシェリアを！」

アスベルは齒軋りをする。

「くそっ！ シェリア……何処へ連れて行かれたんだ！？」

一行はラント中を捜しまわった。
しかしシェリアは見つからない。

「アスベル、もしかしたらラントにはもういねえんじゃねえか？」
「どういう事だ？」

「確かに、これだけ探していないとなるとそうかもしれないな」

マリクが顎に手を当てて言った。
ルイスはその言葉に頷く。

「それにさっきレイモンが言った言葉」

「そついや『早くしないとあの娘が魔物の餌になってしまいますよ』
とか言つとつたな」

「そつ、こんな街中に魔物を連れ込んだら間違いなく騒ぎになる。
つて事は外に…」

その時ソフィが何かに気付いたのか突然走りだし、何かを拾った。

「クロソフィの花……枯れてる」

そう言っただけで持ってきたのはクロソフィの花の押し花だった。
見るからに随分古そうだ。

「おしばなっ？」

「花を石と重しで挟んで乾かし思い出の花などを保存しておくんだ」

その言葉にアスベルはハツとした。

七年前、シエリアにクロソフィの花をあげた事があった。

（まさか……！）「皆！シエリアはこっちかもしれない！」

アスベルが言うそっちと言うのは西ラント道の方だった。

オリジナルチャット——同族嫌悪？類は友を呼ぶ？——

（エリ）「さっきのレイモンって人大丈夫かなあ？」

（メイ）「ほっとけばエエねん」

（エリ）「で、でも！」

（マリ）「エリーは優しいんだな」

（エリ）「そういう訳じゃ……」

（パス）「ちよつとちよつと！今はシエリアでしょ！」

（メイ）「せやで、それにああいう腹立つ奴はしぶといねん」

（エリ）「そういう……ものの？」

（メイ）「そこにおる奴がエエ例や」

（パス）「あたし！？いや、照れるなあ」

(マリ)「いや、褒めてないだろ」

(メイ)「こういう天然な所がたまにイラッと来んねん」

(マリ) (メイリも天然な所があると思うんだが……)

一行は西ラント道の小屋辺りまで来ていた。
そこで一行が目に見たものは

「シェリアーツ!!」

今にも魔物に襲われそうなシェリアと、その魔物を操っているのか
ストラタ兵がいた。

全員武器を構えて魔物へと向かっていった。
勝負はあっけなくついた。
もちろん一行の勝利で。

「な、何者だこいつら!!」

ストラタ兵が逃げようとする。

しかしそれをルイスが剣を突き付けて止めた。

「後で少佐様にお説教されろ」

「くそ……」

他のストラタ兵もマリクやメイリが捕まえている。
シエリアが安心して一行の下へと走る。

「ふう、危なかったね」

「シエリア、大丈夫？」

「うん……ありがとう、皆」

アスベルは一步前が出る。

「あ、ありが……」

「どうして無茶な事をしたんだ!!」

突然アスベルが怒鳴った。

それには全員驚いた。

「どうしてって……それは成り行きで……」

「成り行きで!? 俺達が間に合わなかったら死んでいたかもしれないな
いんだぞ!」

「私だって好きで捕まったんじゃないわ! 人の気も知らないで怒鳴
らなくても良いじゃない!」

「ま、まあエエやん。無事やったんやし……」

「「よくない!!」」

メイリがもの凄いスピードで後ろに下がる。

「どれだけ心配したと思ってるんだ！」

「それはこっちの台詞よ！そもそもアスベルが心配で様子を見に行ったらそこに……」

「大体再開してからずっとよそよそしい態度で……」

「……アスベルが悪いんだから。全部アスベルが悪いんだから！！」

シエリアの目から一粒の雫が落ちる。

「いつだって勝手にいなくなって……どうして七年間、一度も戻ってきてくれなかったの？」

雫は一つ、また一つと増えていき、シエリアの頬を伝った。

「待ってたのに……ずっと待ってたのに……！」

袖で目を擦る。

だんだんと袖が濡れていく。

「会いに行きたかった……でも迷惑なんじゃないかって……そう思ったら、行けなくて……」

「ごめん……騎士になるまでは帰れない。そう思ってた……」

「良いねえ、幼馴染み」

「だな」

パスカルとマリクが少し茶化す。

「からかわないで！！アスベルみたいな鈍感な奴、どうでもいいんだから！！」

「…ぷっ……」

アスベルは思わず笑う。

別にフェザントの様に思い出し笑いではない。

「そうそう、シエリアはこうでなくちゃ」

「こ、こうって…！な、な……」

「シエリア、そろそろ良いんじゃないか？」

「そうだね。もう肩の力抜いて良いと思うよ」

ルイスとエリーが続けて言う。

「…良かったよ。シエリアが全然変わってなくて」

アスベルは少し頬を赤くして俯く。

「それに…上手く言えないが…無事で良かったよ」

「アスベルが一番心配してたもんな」

「シエリアが連れて行かれた方向が分かったのもアスベルのおかげ
やしな」

パスカルが二人の顔を覗き込む。

その横をソフィが通りアスベルとシエリアの間に行く。

「けんか終わった？」

「けんか…ああ、うん、終わった。なあシエリア」

「え？…ええ、終わったわ」

「じゃあ…ともだち？」

「ああ」

「ええ」

「じゃあ友情の誓い……」

アスベルとシェリアの手を取り握らせる。

「いや、青春だね」

「茶化したらアカンやろ」

「よし、それでは無事に解決した事を報告しに帰るとするか」

一行はラントへ戻った。

今度こそストラタへ向かう事が出来るだろう。
幼馴染みであり、ともだちである少女と共に。

第26話 仲直り（後書き）

（雪龍）

「さて、そろそろ人気投票終わっちゃいますよ」

（メイリ）

「ウチの人気はどん位なん？」

（雪龍）

「まだそれは言えないね」

（メイリ）

「まあ、エエわ。それより可愛いウチの絵はまだなんか？」

（雪龍）

「あ、たぶん、メイリは書かないよ」

（メイリ）

「何でや!？」

（雪龍）

「女性キャラ書くの苦手なんだよね」

（メイリ）

「どういつ事やねん!ウチも書かんかい!」

（雪龍）

「自分、画力、皆無」

（メイリ）

「知るか!エエから...」

（雪龍）

「あ、ケータイでご覧になられている方に質問です」

（メイリ）

「おい」

（雪龍）

「ケータイでも挿絵が見れるのかどうか教えてくれませんか？」

（メイリ）

「おい…」

（雪龍）

「それでは次回もお楽しみに」

（メイリ）

「無視すんなやああああ！！！」

第27話 おやつは300ガルドまで！（前書き）

今回はストーリーに何の影響もないオリジナル話です。

第27話　おやつは300ガルドまで！

一行は灼熱の砂漠の国、ヒューバートの第二の故郷——ストラタへ行く事になった。
の筈が。

「って前回もこれだったろ!!」

ここはまだラント。

一行はストラタへ行くための準備をしていた。

「何で昨日の内にやっとかねえんだよ!」

ルイスが準備をしている女子たちに行った。
するとパスカルが近付いてきた。

「だってバナナがおやつに含まれるか分かんなかったんだもん」
「いや、遠足か!」

パスカルはそう言いつつ鞆の中に大量のバナナを詰めている。

「結局持つて行くのかよ……」

「ねえねえ、カニタマは?」

「それはストラタに行ってシェリアに作ってもらった方が良いと思うぞ?」

「わかった」

そう言つてソフィは鞆の中に大量のカニタマを…

「つて、話聞いてたか!？」

「だってパスカルもしてるよ？」

「あれは……真似しちゃいけないんだ。悪い人だから」

「悪い？パスカルは敵なの？怖いの？」

「……誰か助けてくれ」

その後ルイスはソフィに丁寧に説明した。

これでルイスもそうだが、ヒューバートも安心だろう。

次に近付いてきたのはシェリア。

「どうした？焼き鳥井もストラタで作った方が……」

「ええ!?!……じゃなくてルイス達はもう準備出来てるの？」

「俺とマリクは出来てる。アスベルは道具を買いに行ってる」

それを聞いてシェリアはまた準備を進めた。

次に近付いてきたのはメイリ。

「ウチな、今チーズケーキか、プリンかで迷ってんだけど、どないすればエエと思う？」

「どっちも鞆で持ち運んだらグツチャグチャになるだろ」

「そやな……だったら焼きまんじゅうで……」

「それもだろ!?!」

メイリは結局焼きまんじゅうを手で持って行く事にしたらしい。
最後はエリィ。

「ルイス、ホイコーローっておやつに……」

「ホイコーロー!?!入らねえしおやつじゃねえし!」

「え!?!ホイコーローだよ!?!おやつでしょ!」

「違うから!?!てかそれもストラタで作ってもらえよ!」

ルイスはそこで何かに気付いた。

「もしかしてお前らがしてる準備って……」

「……おやつ」「……」

「何でだよ!!」

とりあえずルイスは必要な物だけ持って行けと言って、フェザン
トの下へ向かった。

彼もまだ準備が出来ていない。

「入るぞー、フェザン……ト……」

「zzzz……」

「準備はどうしたああああ!!!!」

「おうっ!?!」

見事な張り手が鞆の前であぐらをかいて寝ていたフェザントに炸裂
した。

フェザントはその勢いで後ろに倒れた。

「いたた……何するんよ」

「何でデメエは寝てんだよ!!」

「何持つて行きやええか分からなかったんよ」

「着替えとかだろ!!」

「え?おやつは……」

「もうそのネタは良いんだよ!!」

そこに丁度道具を買いに行っていたアスベルが帰ってきた。
手に持っている袋にはたくさんのグミやボトルなどが入っていた。

「やっとまともなのが来てくれた……」

「え？どうしたんだ？」

ルイスはこれまでにあった事をアスベルに話した。
それを聞いてアスベルは驚く。

「ま、まさかお前、カレーを……？」

「いや、レトルトだから大丈夫だ！」

「何を根拠に言ってるの！？」

アスベルも先程までの者達と同じだった。
結局まともなのはルイスとマリクだけ……

「教官も鯛茶漬けを持って行くって……」

いや、ルイスだけだった。

「ちょっと皆こつち来い!!」

全員ルイスの下に来る。

「お前らに言いたい事がある」

ルイスは大きな紙を壁に張る。
そこには色々書かれていた。

「その壺! 持つて行って良いおやつは300ガルドまでだ」

「そんなじゃちよつとしか持つて行けないじゃん」

「鞆がパンパンになるまでおやつ持つてつてどうすんだよ!」

全員ぶーぶー言いながらも鞆から300ガルド分になるまで取りだす。

するとおやつ(食料)が山のように積まれた。

「どんだけ持つて行こうとしてたんだよ……」

「その式は?」

「持つて行くのは着替えや洗面用具など本当に必要な物と少しの大切な物だけ!」

「えゝ、あたしの発明品とかは?」

「却下」

これに反対したのはパスカルだけだった。

パスカルは鞆から鳥の様なカラクリを出した。

「……何これ?」

「全自動魚取り器」

「何でそんなもん持って行こうとしたの!？」
「いや、船の上って暇だからさ」

ルイスは一度深呼吸し自分を落ち着かせ続けた。

「その参!各自グミやボトルを持っておく事。以上だ」
「ルイス先生!」

手を上げたのはフェザントだった

「先生じゃないけど……どうした?」
「防寒具を持って行った方が良いでしょう?」
「いや、ストラタはかなり暑いらしい。逆に薄着の方が良いんじゃないか?」

「わかりましたー」
「よし、他に質問は?無いなら行くぞ」

誰も手を上げない。
もう無いのだろうか。

「よし、なら行くか。向こうに着いてから忘れ物した、とか行っても取りに帰れないからな」

その言葉に全員反応した。

―― 10 分後

「ちゃんとこれあるよね？えーと、後は……」

「危ない危ない、これを忘れる所だった！」

全員が荷物チェックを始めてしまった。

それを見てルイスは言った。

「……準備は早めにしような」

結局出発は次の日になった。

第27話　おやつは300ガルドまで！（後書き）

（雪龍）

「人気投票は次回の投稿と同時に終了させていただきます」

（ルイス）

「そういや今回が初めてのオリジナルの話だよな」

（雪龍）

「それなのにふざけ過ぎでしょ」

（ルイス）

「自分で言うのかよ」

（雪龍）

「次回こそはストラタなんで！」

（ルイス）

「お楽しみに」

今更気付きましたが、アスベル達って一度ストラタへ行こうとして
ましたね……。

なのに今準備してるって……。

その矛盾点についてはツツコまず優しく見て見ぬふりしてください。
本当にすいませんでした。

第28話 昔の話

一行はようやくストラタ息の船に乗ることができた。
今ここは甲板の上。

アスベルは先程ラントでヒューバートから貰ったお守りを見ていた。

「……一体何が入っているんだ？」

感触からして中には粉状の物が入っているだろう。
だがこういうお守りには大抵輝石クリアスを入れるのだ。

「それにどこかで見た気がするんだが……」
「どうしたの？アスベル」

後ろからシェリアが話しかける。
アスベルは振り返る。

「このお守りの事を考えてたんだ」
「ヒューバートから貰った物よね？」
「ああ、だがどこかで見た気がするんだ……」

その時アスベルは何かを思い出し、ポケットに手をつ突っ込む。
そして出したのはこの前拾った押し花だった。

「これこの前拾ったんだが……」

そう言って押し花を差し出す。
シェリアはそれを受け取り、眺める。

「失くしたと思ったらアスベルが持ってたの……良かった」

「それ、あの時のクロソフィか？」

「えー？あ、うん……い、いけない？」

シエリアは突然慌てる。

それを見てアスベルは微笑んだ。

「……子供の頃の思い出は私の宝物なの」

シエリアは海の方を見る。

「皆いなくなつて私一人になつてしまつてからはその思い出だけが支えだつた……」

その時ルイスが甲板に出ようとドアを開けた。

そして、アスベルとシエリアの良い雰囲気を見て反射的に隠れてしまった。

二人には気付かれていない。

「またこうして一緒にいられる日が来るなんて思わなかったから……」

（何の話してんだ？告白じゃなさそうだけど……）

「あ、アスベルだけの事を言つてるんじゃないわよ！？ソフィの事もよー！？」

（そんな慌てなくても……てか、そんな事言つたら流石のアスベルも……）

「……わかつてるよ」

（違う意味でわかつてねーよっ！）

ルイスは思わずにつけそうになる。

「俺も皆に再会できて本当に良かったと思ってる」

「……ちつともわかってないわよ。アスベルは……」

（シェリアにも言われてんじゃないかねーか）

シェリアの呟きはアスベルには聞こえておらず、何故か類すには聞こえていた。

恐るべし地獄耳。

「ルイス、何やってんの？」

「！！！！」

ルイスは首がもげるのではないか、という程の勢いで振り返る。そこにはエリーがいた。

急いでエリーの口を塞ぎ隠れる。

アスベル達には気付かれていない。

エリーは苦しいのか、もしくは別の意味でか、顔が真っ赤だ。

（ちょっと何すんの！？）

（あれ見ろ。あれ）

ルイスはアスベル達を指差す。

（アスベルとシェリア……まさか告白！？）

（ではなさそうだが良い雰囲気なのに違いはねえ）

（んー…そうだね）

二人は黙ってアスベル達を見ていた。

すると二人は船内に入って行った。

特にこれといった会話も無かった。

「ふー、焦った……」

「てか何で覗き見してたの？」

「いや、外出たらたまたま見ちゃったんだよ」

「何してるんだ？」

二人が振り返った先にはマリクが腕組みをしていた。

「あつ、教官」

「ちよつとした世間話だよ。世間話」

「そうか」

「あつ、そうだ！騎士学校時代のアスベルの話してよ！」

エリーがそう言うつとマリクは目を閉じる。

「アスベルは毎日のように故郷の友達や弟の話をしていたな」

「へえ……」

「他には？」

マリクは目を開けて海を眺める。

そして思い出す。

「水中訓練の時だ……」

「すいちゆうくんれん？」

「水中でも慌てず素早く動けるようになるための訓練の事だ」

「で、その時何があったんだ？」

あれは今から三年ほど前の事だ。
アスベルは常に優秀でな。トップの成績を誇っていたんだ。

「へー、アスベル優秀だったんだ」

そして水中訓練の時の事だ。

その日は町の外の少し広めの川で訓練をする事になっていたんだ。
だが、生憎天気が悪くてな。川も少し荒れていた。

その日の訓練は中止にして帰ろうとした時だ。
突然アスベルが川に飛び込んだんだ。

「えっ、どうして!？」

「話の途中なんだから少し静かにしてるよ……」

「あっ、ごめん。つい興奮しちゃって……」

続きを話すぞ。

その時の場は騒然となつてな。

急いで救助しろ、と生徒どころかオレ達まで慌ててしまつてな。
その時アスベルが川から顔を出し、岸まで泳いで行ったんだ。

オレは何故突然飛び込んだのか尋ねたんだ。

そしたらアスベルはこいつを助けるためです、と言って腕に抱えていたものをオレ達に見せたんだ。
それが何か分かるか？

「えーと、子供とか？」

いや、モンスター魔物だ。

「「魔物！！？」」

と言ってもピヨピヨだがな。

それを見てオレ達は驚いたさ。

その時のアスベルが何と言ったと思う？

「何て言っ たんだ？」

こいつが危なかったから……守りたかったんです。俺に守れる命を見捨てたくなかったんです。

アスベルはそう言った。

その時のアスベルの表情は忘れる事は出来ないだろうな。

「……………」

「どうした？」

「いや、アスベルらしいと思ってな」

その時アスベルがくしゃみをしながら船内から出て来た。

「あつ、ルイスとエリーと教官、こんな所にいたんですか。そろそろ着きそうなんで降りる準備をしてください」

「わかった」

そう言うとエリーとマリクは船内に入って行った。

「ルイスも早く……」

「ん、ああ、すまない」

ルイスは先程の話を聞いて思った。
アスベルが変わっていなくて良かった、と。

> i 2 9 2 8 8 — 3 6 6 6 <

第28話 昔の話（後書き）

（ルイス）

「おい、文の一番最後にあったやつって……」

（雪龍）

「君達のイラスト！ど、どうだった？」

（ルイス）

「何か……」

（メイリ）

「微妙やな？」

（エリー）

「可も無く不可も無くって感じ？」

（フェザント）

「儂とメイリは何故か横向きじゃな」

（ルイス）

「それどころか正面向いてんのいねえじゃねえか」

（雪龍）

「正面よりちょっと傾いてる方が得意なんだもん！とまあ、こんな感じですがちょっとしたイメージなんで」

（メイリ）

「ウチはもっと可愛いんやで！？」

（雪龍）

「という事です。あつ、絵の下手さにはツツ」まないでくださいね」

（ルイス）

「次回もお楽しみに」

第29話 ストラタに到着（前書き）

今回ヴェスperiaメンバーが名前だけ出演です。

第29話 ストラタに到着

「ふーん、ここがストラタの港か。ここから首都のユ・リベルテまでどれ位で行けるのかなあ？」

パスカルが手を頭の後ろに回し、少しウキウキしている。
やはり初めて来る地というのはテンションが上がるのだろう。

「失礼。あなた達は首都まで行くつもりなのか？」

青年が話しかけてくる。

アスベルがその青年と何かを話し始めた。
ルイスは横にいたエリーに話しかける。

「あの人誰なんだ？」

「分かんないけどここの人ってのは間違いなさそうだね」

「ウチの焼きまんじゅう知らん？」

「船に忘れたんじゃないかねえの？」

メイリがキョロキョロと周りを見ているとフェザントとソフィが歩いて来た。

二人とも何故か笑っている。

「どうしたんだ？」

ルイスは気になったのでソフィに聞いた。
フェザントに聞いても訳のわからない事を言われそうだったから。

「えっとね、船の中で二人で焼きまんじゅうを食べたの」

メイリの肩がピクツとなる。

「どこにあつたんだ？」

「椅子の横に置いてあつたの」

「勝手に食つたら駄目だろ」

「フェザントが、メイリのだから大丈夫って」

フェザントが急いでソフィの口を塞ぐ。
しかしもう遅かった。

「ソフィ……ちょっとあっち行つといてくれるか？」
「うん、わかった」

ソフィはルイス達と共に下がって行つた。
メイリの後ろに鬼が見えた。

「最後に言い残す事はないか？」
「え、あつと…その……」

食べ物の恨みは恐ろしい。
皆も気をつけようね。

「今首都へは行けないそうだ」

アスベルの言葉に全員驚く。

折角ストラタに来れたのに、ユ・リベルテに行けないとは。

「一体何があつたんだ!？」

「何でもロックガガンという魔物^{モンスター}が道を塞いで通れないらしい」

「ロックガガン？」

「魔物？たかが魔物だろ？」

リスの言葉に「いや」と反論したのはマリクだった。

「ロックガガンというのは超大型の魔物で、人間では相手にならな
いらしい。別名を『岩石獣』。だが……」

「だが、って……これ以上まだ何かあるのか？」

「ロックガガンは知能が高く、性格も大人しい為人に迷惑をかけな
いと聞いたが」

全員がアスベルを見る。

「セイブル・イゾレの先で暴れ回っていて、危険だから軍が封鎖し
ているとしか……」

「というかマリクはん、よおストラタの魔物の事なんか知った

な」

「ウインドルに来る前、ストラタにいた事もあつたのでな」

「つーか、どうするよ。俺達じゃ相手にもなんねえんだろ？」

「それにロックガガンはストラタ国民にとっても大切にされている。戦うのは国民全員に止められるかも知れんな」

一行に沈黙が流れる。

そして全員が計画していたかのようにアスベルを見る。

「とりあえずセイブル・イゾレに向かおう」

オリジナルチャット————生きるための知識 part・2——

（フェ）「誰か水をくれえ……」

（ルイ）「ならさつきマリクがやってたようにサボテンの中の水でも飲むか？」

（フェ）「水なら何でもええ！あるなら貰う！！」

（ルイ）「い、いや冗談……」

（フェ）「頼む、枯れる」

（ルイ）「どうなつても知らねえぞ」

ザシュッ

（ルイ）「…ほらよ」

（フェ）「サンキューー！ごくごく……」

（アス）「あれ温いし、緑臭いしで飲めたもんじゃないぞ！？」

（ルイ）「だって冗談を本気にしまうんだもんよ！アイツ何考え
てんだ！？」

（アス）「そ、それより……」

(ルイ) 「フェ、フェザント……それ……不味いだろ……？」
(フェ) 「は？何言うとん？ぼっけえ美味かつたよ」
(ルイ) 「え……？」
(フェ) 「じゃけえ美味かつたつて。ありがとな」
(アス) 「フェザントの味覚って一体……」

？術研究市——セイブル・イゾレ

「ここまでは無事に来れたね。ロック何とかが出るのってこの先だっけ」

「ロックガガンな」

「それぞれ」

「町の人に何か聞いてみよう。何か分かるかもしれない」

それに反対する者はおらず、3チームに分かれて情報収集をする事になった。

？アスベル、ソフィ、シェリアチーム
？マリク、フェザント、エリーチーム
？ルイス、パスカル、メイリチーム
というチームなのは良かったのだが、このチーム割ではやはりサボるチームが出た。
それは

「やり〜、衣装ゲット！」
「あつ、ルイスだけズルイで！ウチもやるわ！」
「じゃあ、あたしも〜」

ルイス、パスカル、メイリチームだ。
彼らは今魔法カルタで衣装ゲットに励んでいる。

「えっと、アスベルにはユーリ、シェリアにはリタ、エリーにはエステルで良いか……ユーリとリタとエステルって誰だ？」
「ウチはこのジュデイスがエエ！」
「じゃあ、あたしは余ってるラピードだね。ワン！」
「俺は……カロールしかねえじゃねえか！！」

結局ルイスは貰わなかった。

数時間後。

「えーと……お前達は何をしていたんだ？」
「魔法カルタで衣装狩り」

「何故にっ!？」

「楽しそうだったからつい……」

何だかんだでルイス以外は皆ゲットした衣装を着たんだとさ。

第30話 ロックでガガン！

一行は研究所の前を通りかかった。

入口付近にはたくさんの人がストラタ兵に何かの抗議をしていた。少し聞いていて分かったが、人々は「ロックガガンを殺すな」という事を言っているようだ。

「うーん、本当にロックガガンって人気なんだね」

「これじゃ下手に手を出せないよ」

「ロックガガン保護の声は日増しに高まって来ている」

一人の年配の男性が話しかけてくる。

その男性にソフィだけは警戒してアスベルの後ろに隠れる。

「しかし一方で街道を通れなくて困っているからロックガガンを始末してくれ、という声もある。どちらも民衆の本音だ……」

「そりゃ軍も大変だわな」

「いずれにせよ、この状況に具体的な対策をせず放置すれば良くない結果しか生まないな」

ルイスは思った。

民衆の中にも冷静な考えを持つ者もいるのだなと。

「困ったな……急いでユ・リベルテに行かなければならないのに……」

「首都方面へ急ぐのか？それは生憎だったな。すぐにはこの状況は打開すまい」

そう言うと男性は去って行った。

（あの男……只者の気配ではなかったな）

マリクは男性の後ろ姿を見て思った。

恐らく一行の中でそう感じているのはマリクだけだろう。

「どうする？」

シエリアが尋ねる。

どうしようもないかもしれないが、何もしないという訳にはいかなかった。

「教官、ロックガガンというのはよほど危険な魔物モンスターなんですか？」

その言葉にマリクは首を横に振る。

「オレも見ただ事がないので大きいという事しか知らん。具体的な事は研究者達に聞くのが良いだろう」

「けどあの状態じゃ研究所には入れねえと思うぜ」

「まあ行くだけ行ってみたら？最悪逃げれば良いんだし」

その案に誰も反論せず一行は一応ユ・リベルテへと向かうことにした。

オリジナルチャット——どの位大きい？——

（ソフ）「ロックガガンってどの位大きいのかな？」

（メイ）「そやなあ……マリクはんよりは大きいと思うで」

(アス) 「いや、それは魔物なんだし……」

(ソフ) 「教官よりも大きいのか？じゃあ、あのサボテンとどっちが大きいかな？」

(メイ) 「あれより大きいと思うで」

(アス) 「だから魔物何だからその位は……」

(ソフ) 「じゃあ、海とロックガガン？」

(メイ) 「そろもうロックガガンやろ」

(アス) 「……それは大きすぎるだろ」

「あちいなあ」

「そだね」

ルイスとエリーは暑すぎて目が虚ろだ。

二人だけではない。

ソフィ、マリク、パスカル以外は皆死人の様だ。

「こんな状況でロックガガンに会って俺達大丈夫か？」

「大丈夫じゃないかもね」
「……揺れてる」

ソフィが立ち止まって言う。

「ああ、そうだな。目の前が揺れて見える」

「違う。地面が揺れてるの」

「ん？……本当だ」

ルイスは立ち止まってやつと気付いた。

他の皆も立ち止まる。

揺れは段々大きくなってくる。

「ロックガガンが暴れてる上に地震。ストラタって大変だな」

「……いや、もしかするとその二つには関係があるかもしれない」

「どういう事——うっ」

ルイスが尋ねようとする今度は砂嵐が吹き荒れる。

「皆！向こうを見て！」

シエリアが前方を指差す。

他の者は何とか目を開けて指差す方を見る。

「あ、あれは……！！」

「山が……」

「動いてる！？」

その言葉通り山が動いている、様に見えた。
しかしそれは山ではなかった。

何故ならその山から手の様なものが出てきたからだ。

「えっと……あれは生き物なの？」

「だとしたら……でか過ぎるだろ」

「あの大きさは流石に予想外だな」

「言ってる場合か！」

本当に山の様な生き物が頭と体を砂から出す。
それだけでも十分大抵の生き物より大きい。

「まさかあれがロックガガン……？」

そう、あの超下級の大型生物こそがロックガガンなのだ。
鋭い爪と牙、ごつごつした体、そしてその巨体。

『岩石獣』という二つ名は伊達じゃなかった。

「と、とりあえず逃げた方がええんじゃないかね？」

「よし、逃げるぞ」

一行は全速力で来た道を逃げる。

しかしロックガガンも追って来た。

「何で！？何で着いてくんの！？」

「このままオレ達が逃げれば奴は町まで着いて来るかもしれんな」

そんな事を言っている間にロックガガンは真後ろまで来ていた。
いくら本気で逃げようと歩幅が違い過ぎる。

ロックガガンが咆哮する。

そして次の瞬間、

「ちよつ、まさか……」

「食べられちゃう!!」

「「「わああーっつっ!!?」」」

一行の姿は砂漠から消えていた。

そしてロックガガンは地中に潜った。

第30話 ロックでガガン！（後書き）

（雪龍）

「さて人気投票結果発表です！投票総数11票！投票してくれた皆様ありがとうございます！まずは選ばれなかった方々」

（全員）

『ゴクリ…』

ソフィ

ヒューバート・オズウェル

リチャード

マリク・シザース

パスカル

（ルイス）

「多っ！」

（雪龍）

「それだけ票が寄ってるって事だね。さて第五位！同率で三人！」

1票

シェリア・バーンズ

フェザント・エドセル

（雪龍）

「と」

フリーエ

（ルイス）

「ええっ！？パーティ以外！？」

（雪龍）

「いやゝ、流石ですねゝ。伊達にパスカルのお姉さんじゃないですね」

（エリー）

「続いては第二位！こちらも同率で三人だよ」

2票

アスベル・ラント

ルイス・ラグゼリア

メイリ・アル・スロツテス

（ルイス）

「来たー！！」

（雪龍）

「ルイスは第二位！本編の主人公と同率って凄いじゃなか！」

（エリー）

「アスベルを選んだ理由がありません。『やっぱり主人公だし、カッコイイから！みんなを守ろうとしてるのが憧れます』だそうです！」

（雪龍）

「さて、第一回『TOGα』キャラクター人気投票第一位は……」

3票

エリス・ライレージ

（エリー）

「やったあー！」

（雪龍）

「第一位はエリーです！主人公を抜いて一位だよ！」

（エリー）

「皆ありがとう！」

（雪龍）

「これからエリーが主人公で行っちゃう？」

（エリー）

「行っちゃおう！」

（ルイス）

（勝手に話進めてる……）

（雪龍）

「投票してくれた皆様、本当にありがとうございました。これから
も『TOGα』をよろしくお願いします！」

（ルイス）

「という事で次回も」

（エリー）

「お楽しみに」

第31話 ロックガガンを救え！

ここは——どこだ？

何か臭いな。

ベタベタしてるし。

「…イス…きろ」

俺達確か信書を渡しにユ・リベルテに行く途中でロックガガンに呑み込まれて…。

そうか、ここは天国か。

にしては汚いな…夢がぶっ壊れた…

「ルイス、起きろ」

誰だよ、もうちょっと寝させて…

「ルイス、起きろ！！」

「うわっ！！」

アスベルに突然大声で呼ばれた為、ルイスの意識が一瞬にして覚醒する。

ルイスは皆の様子を見ている。

ソフィは腹の辺りを擦っていて、マリクは顎に手を当て周りを観察している。

パスカルは何故かウキウキしており、対してシェリアは口に手を当て「何でこんな所に…もう嫌…」と言っている。

フェザントは岩らしきものを突いているし、エリーとメイリはかなり慌てている。

「ここはどこだ？皆仲良く天国に…？」

「いや、ここはロックガガンの腹の中だよ」

アスベルは苦笑して言う。

ルイスは「へえ」と大して驚かない。

「大変やルイス！」

「そうそう！私達食べられちゃったんだよ！？」

「うん、そうらしいな。アレだろ？ここは天国なんだろう？もうちょっと綺麗な場所を期待してたんだけどなあ……」

「私達まだ生きてるって！！」

「……何いいいい！！？まだ生きてんの！？じゃあここどこだよ！！」

「さっきロックガガンの腹の中だって言っただろ」

アスベルはまた苦笑する。

それに対してルイスはかなり焦り出す。

「どうすんだ！？こんな所ずっといたら胃液とかで溶かされるんじゃないか！？」

「せやねん！どないすればエエんや〜！」

「二人とも静かにしてくれん？」

フェザントが真剣な顔をする。

流石にこんな状況ではしゃげないのだろうか。

「皆も。こんな状況でこそ冷静にならにやおえんじやろ。というこ
とで……」

フェザントはポケットから大量のカードを出して言った。

「皆で落ち着いて魔法カルタやろっや」

その言葉にマリクとソフィを除く全員がずっこけた。

「何だよ！！何でこんな状況で魔法カルタなんだよ！！てかどこで貰ったんだそれ！！」

「タルカさんに言ったら500ガルドで売ってくれたんよ」

「そんな事答えなくても良いんだよ！！って、聞いたの俺じゃねえか！！」

「ちよっ、ルイス落ち着いて！」

そう言った瞬間エリーの後ろに何かが降りて来た。

振り返って見てみるとメールパラサイトという気持ち悪い虫の魔物がいた。

エリーは顔が青褪める。

そして取った行動はというと、

「きゃあーっ！！！！！！」

自身の武器である槍を振り回した。

近くにいたルイスは何とか逃げたもののその場に残っていたら危なかっただろう。

「エリー！」

「きゃあーっ！！！！！！」

「落ち着けエリー！！もう倒したぞ！！」

「え……？」

エリーが涙目になりながらも足元を見ると、力尽き倒れている魔物がいた。

自分でも気付かない間に倒していたのだ。
恐るべしエリークオリティー。

「エリーって虫が苦手だったのね」

「けどこの前普通にビーと戦ってたぞ？」

「小さいのは大丈夫だけど大きいのは無理……」

エリーの苦手なものを知った瞬間だった。

オリジナルチャット——苦手なものは苦手——

(シエ) 「エリーって大きい虫が苦手だったのね」

(エリ) 「うん、あとスライム系みたいにベトベトしてるのも嫌いなんだ……」

(ルイ) 「でもクイーンスライムとは普通に戦ってたじゃんか」

(エリ) 「アレも本当は嫌だったの！」

(シエ) 「大変ね……」

(ルイ) 「あ……シエリア、後ろに……」

(シエ) 「な、何……!？」

(ルイ) 「お化けが……!！」

(シエ) 「いやああああ——っ……!……!……!」
タタタッ!

(ルイ) 「シエリアは怖いのが昔から苦手だよな」

(エリ) 「それにしてもここ暗いよね」

(ルイ) 「そ、それを言うなよ! 気にしないようにしてたのに!」

(エリ) 「ルイスって黒色は好きなのに暗いのは苦手だよね……」

あまりにも広過ぎる。

そこはロックガガンの腹の中。

暑くはないのだが、地面が滑って歩き辛い。

そんな時に小屋を見つけたので皆で勝手に邪魔させてもらっている。

何故こんな所に小屋があるかは疑問だが…。

「うーん、誰か居ると思ったんだけどなあ」

「ん？何だコレ」

ルイスが拾ったのは四つ穴が開いた笛だった。

「何でこんな所に笛が？」

「とりあえず持って行こう」

パスカルがドロボウの様な発言には誰一人としてツッコまず、笛は持って行く事にした。

マリクは床に散らばっている紙を拾った。

「誰かが残した記録日誌の様だな……ここに書かれた記述が確かならロックガガンが暴れた原因はエリーが倒した魔物にあるようだ」

「どういう事？教官」

「奴らはロックガガンを苦しめている寄生虫らしい」

「という事は、寄生虫を全部倒せばロックガガンは大人しくなる
って事？」

「恐らくな。寄生虫の親玉は紫色らしい。そいつを倒せば全ての寄
生虫を根絶できるそうだ」

その時エリーは思っていた。

（え…まだあんなのがいるの…？）

そんな事を考えているとも知らずマリクは書かれてある事を話し続
ける。

「それと先程拾った笛は、吹けばロックガガンを呼び寄せる事がで
きるそうだ」

マリクは紙から目を離し顔を上げた。

「最後にこう書かれてある——」

「『これを見た人よ。私に代わってロックガガンを救ってほしい』」

第31話 ロックガガンを救え！（後書き）

（雪龍）

「本日、9月8日テイルズオブシリーズ最新作『テイルズオブエクシリア』発売です！！」

（ルイス）

「だけど？」

（雪龍）

「まだ買ってない！！」

（ルイス）

「予約すらしてねえもんな」

（雪龍）

「だって色々と忙しかったんだもん」

（ルイス）

「まあ、俺にとってはどっちでも良いんだけど」

（雪龍）

「しかしロックガガンから出れないとは思ってなかったよ」

（ルイス）

「前半遊び過ぎだろ」

（雪龍）

「なんかシリアスな感じって苦手な上にシリアスなシーンじゃなかったし」

（ルイス）

「言い訳は良いんだよ！」

（雪龍）

「ゴメンね。次回は出れるから」

（ルイス）

「本当だな？頼むぞ？」

（雪龍）

「任せろ！では次回もお楽しみに！」

第32話 お守りに守られて

一行はここから脱出する事を最優先として、その道すがら寄生虫と出逢ったら倒していくという事にした。

の筈だったのだが、何故か行く先々で寄生虫、メールパラサイトに逢ってしまい、その度にエリーが槍を振り回して薙ぎ倒した。流石に危険なので次の戦闘では後ろに下がる事になったが。

「はあ、どこまで行けば外に出れるの？」

一行の中でシエリアに並んでここから出たいのはエリーだった。一秒たりともこんな寄生虫の巣窟になど居たくない。五匹ほど倒した後、一行は行き止まりに着いてしまった。

「もう嫌あ……早く出たい〜！」

項垂れるエリー。

しかしその横で何故かパスカルは嬉しそうだ。

「はあ〜、いつになったら出れるの〜？」

「もしかしたら一生この中で暮らす事になったりしてね〜」

「や、やめてよ、パスカル」

パスカルの縁起の悪い言葉にシエリアが青褪める。そんな事はお構いなしにパスカルは続けた。

「もしそうになったら、アスベルがお父さんでシエリアはお母さんでしょ〜」

アスベルとシエリアの目が合う。
そして気まずそうに二人とも目を逸らした。

「あたしとソフィとエリーが仲良し姉妹で、教官はおじいちゃん！」
「おじいちゃんだと!？」

「うんうん、ロックガガンの中の家族!良いね」
「ちよつと待て。俺とメイリとフェザントは？」

そう言われてパスカルは考える。

「じゃあルイスとフェザントはいとこのお兄ちゃん！」

「随分適当じゃねえか……？」

「ほんでウチは何なん？」

「メイリは……隣の家のお姉ちゃん！」

「家族ですら無いやないか!!」

その時、マリクが何かに気付き、武器に手を掛ける。

「パスカル！」

パスカルがマリクの方を見ると、マリクが今にも武器を投げてきそうだった。

「ちよつ!いやだなあ、さっきのは冗談だつて!そんな怒らないでよ」

「違う後ろだ!」

驚いて後ろを見ると、先程までとは違う色の寄生虫、パールパラサイトが現れた。

パールパラサイトは爪でパスカルに攻撃する。

反応が遅れて避けられないと思い目を閉じたが、銃弾で爪が弾かれる。

メイリが守ってくれたのだ。

「大丈夫か？パスカル」

「う、うん、ありがとうメイリ！」

全員が武器を構えて臨戦態勢を取る。

「紫色の寄生虫……コイツが親玉か！」

「つてことはコイツを倒せばロックガガンが暴れなくなるんだな？」

「エリーは後ろで目を閉じてて」

「は、はい……」

エリーは言われたとおりに後ろに下がり、しゃがみ込んで目を閉じる。

知らない人が見ても何かに脅えているという事がよく分かる。

「さて、エリーの為にもさっさと終わらせるか」

「斬り裂け！闇の刃！ダークスリヴァー！」

二つの黒い刃がフェザントから弧を描き地を駆ける。

二つの刃はペールパラサイトを斬り裂いた。

「この名を以ちて戒めを刻め！」

「みくら陵、其は崩壊の序曲を刻みし者！ 重圧！」

「咲き狂う空の生命よ！」

シエリア、マリク、メイリの三人が同時に詠唱を始め発動の準備をする。

「フラッシュティア！！」

「サイフォンタングル！！」

「エアールーム！！」

パールパラサイトの足を黒い沼が絡め取り、聖なる刻印による攻撃の後、そして銃弾が被弾して花の様に爆発する。

「アストラルベルト！」

ソフィが光子を剣の形に変えて一気に振る。

「ブレイクシュート
星屑の覇者！」

パスカル杖からレーザーが放たれ、パールパラサイトを呑み込む。ここまでの連続攻撃で既にふらふらになっている。

「行くぜ！火弾衝！」

ルイスの剣から火の玉が放たれパールパラサイトを燃やす。そしてアスベルがとどめの

「崩雷殺！！」

で、パールパラサイトは息絶えた。

「エリー、終わったぞー」

「う、うん、わかった」

エリーはゆっくりと近付いて来る。

倒したというのにまだ怯えているのだろう。

「これで寄生虫は居なくなつた訳だけど……どうすればここから出れるんだ？」

「早く信書を届けに行かないといけないのに……」

「……お守り、破れちゃつた」

「え……？」

アスベルが手に握っているヒューバートから貰つたお守りを見ている。

お守りは布が破れ、中から何かの粉が出てきた。

「何だ？この粉」

「ちよつと見せてね……へ、へつくしゅん！」

「コシヨウか！？」

アスベルの言葉にその場にいる殆どの者（ソフィとフェザントを除く全員）が疑問を抱いた。

『何でお守りにコシヨウ？』

上手い事全員の声が重なる。

アスベルが考えていると突然地面が揺れ出した。

「一体何なんだ！？」

「まさか……」

一瞬浮遊感を感じ、何かに吸い込まれた。
いや、正確に言うと吐き出された。

気付けば全員砂の上で寝ていた。

「……皆、大丈夫か？」

ちゃんと全員起きた事で大丈夫だった事は確認する事ができた。

「やっと出れたのか……コショウのおかげか？」

「ヒューバートから貰った物がこんな所で役に立つとはな」

「何でヒューバートはコショウなんかを渡したのかな？まさかエスパードこうなる事を予想してたとか！？」

エリーに対して全員が口をそろえて『それはない』と言った。
アスベルは考える。

そして何かを思い出したのか、あつと声を上げた。

「思い出した！これは俺が昔ヒューバートにあげた物だ！そう言え
クリアス
ば輝石が見つからなかったからコショウを詰めたんだっけ……」

そう言い、アスベルは苦笑する。

「まさかまだ持っていてくれてたなんてな……」

「ストラタに行つてからのアイツにはそれだけが支えだったのかも
しれねえな」

「輝石のお守りには持ち主を護る力があると言われている。まさか
コショウでも効力があつたとはな」

マリクの言葉に全員が笑う。

（ヒューバート、お前のおかげで助かったよ。ありがとう）

ラントのある方角を見て、アスベルは穴の開いてしまったお守りを
握りしめて静かに目を閉じた。

第32話 お守りに守られて（後書き）

（雪龍）

「やっぱり戦闘シーンって難しいですね。今回なんてすぐ終わっちゃいましたよ。難易度シンプルでももうちょっと強いですよ。頑張らないといけないなあ。そう言えば『テイルズオブイノセンスR』と『テイルズオブザヒーローズ ツインブレイブ』の発売が決まりましたね。『TOIR』に関しては新キャラがパーテイインするそうで。今から楽しみですな。それから……」

（ルイス）

「ちよつ、ストップ！一人で喋り過ぎだ！何があつたんだ！？」

（雪龍）

「最近何かグダグダじゃん。そのグダグダ感がここでも……」

（ルイス）

「大丈夫だって！ストラタ来る前までは殆ど真面目だったんだから！息抜きも必要なんだって！！」（何で俺こんなに必死なんだ……？）

（雪龍）

「そうだよな……どうせまたすぐに真面目モードに入るもんね！それまでは息抜きしてもいいよね！？」

（ルイス）

「そう言う事」

（雪龍）

「ということで次回もお楽しみに！」

（ルイス）

（……これで解決で良いのだろうか……？）

第33話 情報収集は旅の基本

一行はロツクガガンの腹の中、もとい寄生虫の巣窟だった場所から脱出した後、そのままユ・リベルテへと向かっている。

途中でパスカルがバナナの木を見つけ、「本場のバナナだ！食べたーい」と言っではしゃいでいたが、ユ・リベルテに行ったら買ってあげると言ったらすぐに落ち着きを取り戻した。

そんなこんなで一行はユ・リベルテの正門まで辿り着いた。

（かなりはしょったな……）

「おお！ここがストラタの首都か！初めて来たで」

どうやら初めて来たのはメイリだけではないらしく、マリク以外は心なしかウキウキしているように見える。（パスカルは誰がどう見てもウキウキしている）

「街に入ったらあんまし暑くなくなっただな」

「そうね、少し涼しいわ」

「砂漠のオアシスみたいだな」

そんな時フェザントが宿屋から走ってこっちに来た。

……いつの間に行っていたのだろうか。

というより何故行っていたのだろうか。

「皆！宿屋ん中凄かったぞ！雪！雪だるまがあったー！！」

「……それで？」

「へ？それだけじゃけど？」

フェザントの奇行にはいつも溜め息をつかされる。

そんなこんなで一行は、情報収集という名の自由時間に入った。
あ、アスベル、ソフィ、シェリア、マリクの四人は信書を渡しに行った。

「……他の皆、何でサボってるの？」と思うのは少し待ってもらいたい。

自由時間と言ったが、実はアイテムの調達などに赴いている者もある。

ルイスとエリーは道具屋へ、メイリは武具屋の下見に行っている（良いのがあれば買う）。

残りのパスカルとフェザントには、「何でサボってるの？」と言っていただけで構わない。

アスベルが部屋から出てくる。

大統領との話は終わったらしく、少し驚いているような顔だった。

「どうだったアスベル？」

「あ、ああ」

「どうした？」

「驚かないで聞いてくれ……大統領は俺達も一度会った事のある人だった」

「ええっ!？」

シエリアだけが声を上げる。

一瞬空気がシーンとなったのでかなり気まづくなってしまったが、アスベルはそんな事も気にせずに続けた。

「大統領は……セイブル・イゾレで会ったあの男の人だったんだ……！」

「あの男の人？」

「成る程な。道理で只者ではない気がした筈だ」

「教官、気付いてたんですか？」（ていうかあの男の人って誰……？）

マリクは「いや、大統領だとは知らなかった」と返す。

シエリアは『あの男の人』を思い出していない。

ソフィは思い出そうともせずに、ただアスベルの話を真剣に聞いていた。

「それで結果はどうだったんだ？」

「それは……」

いつも通り要約して説明しよう。

まず大統領はオズウェルにより間違った情報（ヒューバートが総督として資質に欠ける等の内容）を伝えられていたらしい。

そこでヒューバートに詳しく話を聞こうと思い、召喚命令を出したそうだ。

それでオズウェルは更に自分勝手にラントに積極的侵攻をするようにヒューバートに命令を出したのだとか。

要するに

「オズウェルってのはセコイ奴だったって事だろ？」

「ルイス！？それにエリーまで！いつの間にそこに！？……」

アイテム買いに行つてたんじゃ……」

「宿屋に行つても誰もいなかったからこっちに来ました。以上です」

ルイスが珍しく敬語で言う。

……気分的にだろうか。（どんな気分？）

「まあ、続けてくれ」

その後、オズウェルは大統領に説教され、なんやかんやで部屋を追い出された。

ここから話は変わって？クリアス石の話。

今のままではストラタの？石の需要量に達しないらしい。

このままではどっちみちヒューバートが総督の座を降りる事になつてしまう。

そうならないようにアスベルは、自分達がどうにかしてみせる、と行つて話は終わった。

「あと、ロックガガンの事について感謝されたな」

「そうか、しかしそれほど大きな問題となると個人の力ではどうにもならないのではないか？」

「バルキネスクリアスそういやストラタにも大？石あつたよな？何でウィンドルの？石が欲しいんだ？」

「うーん、それは大？石に何かあつたと見て」

「間違いなさそうやな」

いつの間にかパスカル、メイリ、フェザントの三人が会話に入っていた。

何故ここにいるのかはルイス達と同じ。

「とりあえず地道に情報収集と行きますか」

「今度のはちゃんとした情報収集だからな？」
「……バレたか」

一行は誰もサボらないように全員で情報収集へと向かった。

第33話 情報収集は旅の基本（後書き）

（雪龍）

「今回はお題の様なものを貰ったのでそれをします。アスベルの勝利後の台詞の『俺達は』に続くオリキャラ達の台詞を考えれば良いのかな？とりあえず5パターンだけやってみます」

《ルイス・エリー・メイリの場合》

（アスベル）

「俺達は…」

（メイリ）

「負けへんで!!」

（ルイス）

「負けねえよ!!」

（エリー）

「負けないよ!!」

（アスベル）

「……うん、負けない」

《ルイス・メイリ・フェザントの場合》

（アスベル）

「俺達は…」

（アスベル&ルイス&メイリ）

「負けない!!」

（フェザント）

「でもさっき危なくなつて逃げたよな」

（ルイス）

「それは……逃げるが勝ちって言つたろ？」

《エリー・メイリ・フェザントの場合》

(アスベル)

「俺達は…」

(アスベル&エリー)

「負けない!!」

(メイリ)

「負けへん!!」

(フェザント)

「負けんけえ!!」

(エリー)

「二人とも! 共通語でお願い!」

《ルイス・エリー・フェザントの場合》

(アスベル)

「俺達は…」

(アスベル&ルイス&エリー)

「負けない!!」

(フェザント)

「幼馴染みってええなあ」

(ルイス)

「お前もやれよ!」

《最後、オリキャラ全員の場合》

(ルイス)

「行くぞ? 俺達は…」

(エリー)

「メイリ！さっきのカッコよかったよ！」

（メイリ）

「エリーもよかったで！」

（フェザント）

「儂はどうじゃった？」

（ルイス）

「こうなる事は大体予想できたよ……」

（雪龍）

「すいません、こんな感じで良かったでしょうか？」

（ルイス）

「全部失敗したな」

（雪龍）

「原作の方でも上手くいくパターンは少ないんだよ？」

（ルイス）

「……まあ良いや。次回もお楽しみに」

第34話 灼熱の砂漠

一行は宿屋に戻って仕入れた情報の整理をしていた。

「えっと、要するに大？石の調子が悪いのか」
バルキネスクリアス クリアス

「だからウィンドルの？石が欲しかったってわけか」

原因は分かったが解決策は浮かばない。

そんな中ソフィ、パスカル、フェザントは何やら絵を描いている。

「どうするかなあ……って何描いてんだ？」

「もうちょつと待って……出来た！」

パスカルは紙に描いた物を全員に見せる。

描いたあったのは青い大？石、デューフルマル大蒼海石だった。
因みにかなり上手い。

「これを大統領に見せてきなよ。大？石の事で困っているなら詳しい仲間がいるから見てあげますよ」って

「詳しい仲間って？」

パスカルは笑顔で手を上げる。

「パスカル、大？石の事なんて分かるのか？」

「少し位ならね。前に文献でちらっと見たんだよね」

「パスカルってなんでも知ってるわね」

パスカルはその言葉に胸を張り

「へへ……何でも知りたくなっちゃう性分なんだよね」
「アンマルチア族やしな……」

メイリが小声で呟くが、誰も聞いていない、否、聞こえていなかった。

「まあ、行つてきなよ」

「ああ、ありがとう！行つてくるよ」

アスベルは紙を持って走って行ってしまった。
それを見てエリーは

「私達も行かなくて良いの？」

ごもつともである。

「あづいいい……」

パスカルが早くも熱さにうだっている。

「大丈夫かパスカル？」

「全然……ない……」

「えーっと、何だって？」

突然声が小さくなって全然聞こえない。

ルイスは困ってメイリの方を見る。

メイリは面倒そうに耳をパスカルに近付ける。

相槌をしていることからちゃんと聞こえている事がわかる。

メイリは全て聞き終え、ルイスの方に向き直る。

「大丈夫なのか？」

「パスカルの言葉通り言うと『全然大丈夫じゃないよ……。暑くて喋るのが面倒になってきた』やって」

「……そんなので大丈夫なのか？」

というのもこれからパスカルには仕事があるのだ。

アスベルは大統領と交渉して、大蒼海石を調査する機会を得たのだ。大統領によると、大蒼海石の根元からアンマルチャ族の遺構が見つかったそうだ。

しかし、ストラタにアンマルチャ族に詳しいものがおらず困っていたのだ。

そこに丁度一行が来たという訳だ。

「けど良かったな。これでヒューバートの事は考え直してもらえらんだろ？」

「いや、まだ原因を取り除かないとな……」

「そうか……。と言う事で頼んだぞパスカル」

「……………」

「『頑張る』やって」

オリジナルチャット——皆で涼もう——

(フェ) 「フッフッフ、これから皆は儂を敬うじやろつな」

(ルイ) 「暑くて判断力が鈍ってるからってそれは無いと思うぞ」

(フェ) 「余裕でいられるのも今のうちじゃ！わしはアイスクャン
デイーを持っている！！」

(全員) 『えっ！！？』

(メイ) 「た、頼む！それウチにくれへん？」

(エリ) 「あつ！メイリだけずるい！私も！！」

(アス) 「俺もだ！！」

(フェ) 「心配するな。全員分ある……これだ！！」
ドロドロ……

(エリ) 「あの…これ溶けてない？」

(フェ) 「あれ？ホンマじゃ。暑さには勝てんかったか……」

(ルイ) 「その位考えろよ！」

(マリ) 「仕方ないな。ここは一つ背筋も凍るような怪談話でも…

…」

(シェ) 「却下でお願いします！！」

しばらく歩くとアスベルが空を見上げた。

「しかし本当に暑いな……。汗も出ない」

「ええっ！？それって脱水症状じゃないの！？」

「違うよ……。それは……」

「何やねんお前！！ちゃんと喋らんかい！！」

と言いつつもメイリは一応通訳をする。

何だかんだ言つてメイリは優しいのだ。

「パスカルが言うには『大氣中に水の原素^{エレス}が無いから汗も出ないんだよ』やって」

「そ、そうなの……？」

エリーはやはり心配でアスベルの額を触ってみる。

「大変！熱があるよ！！」

「周りが暑いんだから体温も上がるだろ」

「……なるほど」

暑いが皆それなりに元気だ。

そんな様子をフェザントとマリクが後ろで見ていた。

「教官は暑くねん？」

「いや、暑いのは暑い」

「そうか……」

フェザントも中々に暑いのが苦手なようで元気が無くなっている。
その時フェザントは数メートル先にサボテンを見つけた。

「教官！あのサボテンで水分補給しよう！なっ？」

「街で貰った水があるだろう。それを飲め」

フェザントは渋々街で貰った水を飲む。

何気にサボテンの水が気に入ったようだ。

「はあ、若い奴は元気じゃなあ……」

「フェザント、お前何歳だ？」

「19……」

「十分若いだろ」

また戻ってアスベル達の方。

ルイスが振り返ったりして気付いた事がある。

「そう言えばシェリアとソフィは？」

「あの二人はディスカバリーする為に走って行っちゃったよ」

そんな事を言っていると、そんな二人に追いついた。

人の形に固められた砂をディスカバリーしていた。

因みにディスカバリーはソフィの役目である。（ソフィがやりたいと言った為）

「ははは、ソフィは全然暑がったりしないんだな」

良く見たらソフィは全然汗をかいていない。

（あの服ってそんなに通気性良いのかな）

アスベルはそんな事を考えているとソフィは周りを見渡す。

ディスカバリー出来そうなものを探しているんだろう。

「ソフィ、はぐれるといけないから皆と一緒に行こう」
「わかった」

一行はまだこの暑い砂漠を進むのだった。

第34話 灼熱の砂漠（後書き）

（雪龍）

「皆さんお久しぶりです」

（ルイス）

「確かに遅かったな。何してたんだ？」

（雪龍）

「いや、執筆してたんだよ？それで火曜日にできて投稿しようと思ったら……間違えて消しちゃったんだ」

（ルイス）

「そ、そんなことがあったのか……」（作者から負のオーラが……）

（エリー）

「えーっと、次回の後書きでオリジナル勝利の会話ネタをやるんで今回は勘弁して下さい」

（雪龍）

「本当にスイマセン……」

（エリー）

「じ、次回もお楽しみに」（この人大丈夫かなあ……？）

第35話 変わってしまったリチャード

「しっかし大きいな。やっぱ大翠緑石グローアムンディと同じ、大？石なんだな」
「……………それどういう事？」

フェザントがルイスに尋ねる。

「……………いや、どういう事ってどういう事だ？」
「じゃけえ、さっきの……………あれ？何じゃったつけ？」
「もうお前訳分かんねえ」

ルイスが溜め息をつく、フェザントが笑いながらどこかに行ってしまう。

ルイスがフェザントの後ろ姿を見送っていると、何故かエリーが着いて行ってしまった。

「……………まあここの敵位なら大丈夫か」

そう言っただけルイスはその辺にあった石を蹴飛ばした。
その石は紅く光っていた。

「おおゝ凄い！これがストラタの大？石、大蒼海石かゝ」

バルキネスクリアチユーブルマル

大蒼海石の前まで来るとパスカルが更に元気になった。
本当に魚類なのだろうか。

「でも何かくすんでへん？」

「うゝん、そうだね」

パスカルが大蒼海石の下に走って行く。
それをメイリが歩いて着いて行く。

「お待ちしております。貴方達が大？石を調査して下さる方達ですよね？」

金髪の男が話しかけてくる。

アスベルは一礼し、それに答えた。

「私はリバインと申します。では早速ですがよろしくお願いします」
「早速というより既にやっているのだが」

マリクが指差した方には、パスカルとメイリが興味深そうに大蒼海石を見ている姿があった。

「あゝなるほど。こうなってるのかゝ」

「もう分かったん？ウチは何も分からんけどな」

分からないのも無理はない。

むしろ分かる者の方が少ないだろう。

「うん、見るからに壊れてる所があるからそれが辺に干渉してるんじゃないかなあ」

「ウチはよう分からんけど……どうするん？」

「えっと、こんな時には……これ！」

パスカルがポシエットから出したのはそれなりに大きなドリルだった。

一体どうやって入れていたのだろう。

「グルグルやって……!!」

「お、おい、大丈夫なのか？」

「心配あらへんよ」

心配ない、と言われても心配せざるを得ない。

なんせ大蒼海石をドリルで掘っているのだから。

誰が見ても普通に壊れると思ってしまう。

「最後にガツとね!!」

今度はドリルで掘った所をこれまたそれなりに大きなハンマーで殴った。

やはりどこに持っていたのか気になる。

「ちよつ、絶対壊れるだろ！あれ！」

「心配あらへんて、ルイス」

メイリが言った通り、大蒼海石は元の色を取り戻した。

「ふうー、適当にいじっただけなんだけど結果オーライだね」

「適当って……貴女は一体……」

とりあえずリベインは一礼し、仲間の下に歩いて行った。

「流石はアンマルチャ族の末裔、か……」

「いやあ、良かった良かった。これで一件落着だな……」

「て、敵襲ー！！」

そう上手くはいかない物で、ストラタ兵が急いで走ってきた。

「敵襲？どこのバカがそんな事……」

ルイスがそう言って入口の方を見ると、見覚えのある金髪の人物がドラゴンの様な魔物、モンスターデイス・パテルというワイバーンに乗っていた。

いや、見覚えのあるなんてものじゃない。

その人物は

「リチャード……！？」

ウィンドルの現国王であり、アスベルやルイス達の親友だった。

「何でリチャードが…？」

「何か雰囲気が違うな……」

「リチャード！」

アスベルはリチャードに向かって走り出す。

リチャードが面倒そうに剣を振るわせると、アスベルに風の刃が飛んでいく。

「アスベル！伏せろ！火弾衝！！」

伏せたアスベルの上を火の弾が通過し、風の刃を相殺する。

「まったく、何やってんだよ。てか何で魔物に乗ってんだ？」

リチャードは全く表情を変えず、剣を振りかぶる。

その時、ルイスの前にソフィが「やめて！」と叫んで割って入った。

「う……駄目…これはリチャード……戦っちゃ…いけない……」
「危ねえ！！」

ルイスがソフィを引き寄せる。

直後、ソフィのいた場所が風の刃によって抉れた。

「邪魔をする気が…！」

リチャードが載っているのは別のワイバーンがソフィに襲いかかる。

ルイスが刀で攻撃を防ぐ。

「リチャード！どういう事だよ！」

リチャードは何も答えない。

そしてワイバーンを操り大蒼海石に近付いて行く。

「大蒼海石に何かする気が…！？させねえぞ！」

ルイスがリチャードを追って走り出す。

走り出した直後、ルイスの脇腹に途轍もない衝撃が走った。
ワイバーンが突進してきたのだ。

「ぐっ…！」

「ルイス…！」

ルイスは数メートル吹き飛び、岩に激突する。
ワイバーンは尚、ルイスに向かって突進する。

「ヤッベエ……」

ルイスは立ち上がろうとするが、手に力が入らない。

「マジかよ…！！！」

ルイスが内心かなり焦っていると、アスベルがワイバーンを斬りつける。

ワイバーンの軌道がそれ、地面に落ち、滑っていく。

「立てるか？ルイス」

「……グミください」

アスベルはルイスにアップルグミを渡し、またワイバーンの方を見る。

当然先程の攻撃では倒せていない。

「ルイス・ラグゼリア18歳、復活！」

「ルイス…頭でも打ったのか？」

アスベルにしては少しきつい言葉だ。

「どっかのワイバーンのせいで頭どころか全身打ったよ」

ルイスはそう言い苦笑する。

そして立ち上がりアスベルの横に立つ。

「アスベル、先にリチャードを止めた方が良くないか？」

「そうは言ってもワイバーンをどうにかしないと行けないぞ」

誰かに手を貸してもらおうかとも思ったが、全員他の二体のワイバーンの相手をしており無理だった。

「つーか、こんな時にフェザントとエリーはどこ行っただよ！」

「暇だからここの仕掛けで遊んでくるって言ってたな」

「あのバカ共！！」

ワイバーンの突進を二人共躲す。

ルイスはまたリチャードに向かって走り出す。
だがワイバーンを振りきれない。

「早くリチャードを止めに行かねえと……」

「焰、其は乱れ狂う龍神の咆哮！ 焦炎、バーンストライク！」

ワイバーンに向かって幾つもの火球が点から降り注ぐ。

「アスベル！ルイス！今の内に行け！！」

マリクの言葉を聞いて二人は一斉に走り出す。
だがワイバーンはすぐに持ち直し追いかけてくる。

「ッ！しつこい！」

ルイスが振り返った瞬間、ドゴオン、という音と共に砂煙が上がった。

その煙の中には人影が二つ。

「まさか儂達がおらん間にこんな事になつとは思わんかったな」
「ルイス！アスベル！行って！」

「良いタイミングで来てくれた！ありがとう！」

エリーとフェザントに麗を言つて二人はまた走り出す。
そしてリチャードの下に着いて二人は驚いた。
リチャードが大？石から何かを吸い取っているのだ。

「何やってんだ！？」

「話は後だ！とりあえず止めよう！」

「もう遅いよ」

リチャードはそう言つて二人を見下ろしている。
隣にある大？石は完全に色褪せていた。

「そんな……大？石から^{エレス}元素が無くなった……」

「何だつて!？」

研究者達が騒ぎ出す。

先程リチャードが吸い取っていたのは原素だったらしい。
用が終わったとしても言わんばかりにワイバーン達はリチャードの下に戻る。

「……貴様の顔を見ると……虫唾が走る……貴様がいる限り、安息の 때가訪れる事はない」

リチャードはソフィを睨む。

「いずれ決着は着けてやる……覚悟しておけ」

「待つて!うつ……」

ソフィが腹を抱えて蹲る。

「駄目……リチャードは、ともだち……戦っちゃ、いけない……」
「ソフィ、とりあえず深呼吸して!」

何回か深呼吸をするとソフィの息が幾分か整ってきた。

「なあ、アスベル」

「どうした?ルイス」

「リチャードの事、あのまま放っておいたらマズイ気がする」

「でも、リチャードはともだち……戦っちゃいけない」

ソフィの言葉に全員黙る。

「なのになわたし戦おうとして……ごめんなさい」

「別にソフィが謝る事じゃない」

「ああ、俺達も皆同じ気持ちだ。ただ、戦う前に何故あんな事をしたのか確かめないと」

アスベルは立ち上がり、リチャードが去っていった方の空を見上げる。

「リチャード、もう元には戻らないのかな……。そんなの嫌だよ……」

「安心しろ。絶対俺が……いや、俺達が元に戻る」

「とりあえず大統領の下に戻るう」

一行が遺跡を出て行くところ、フェザントはリバインに呼び止められた。

「何か用か？」

「いや、用と言うほどではないんだが……僕達の下に戻って来ないか？」

「！ お前まさか……！！」

フェザントは弓に手を掛ける。

だがそれをリバインが手で制した。

「止めとけよ。失敗作には僕は倒せない」

「言っとくけど戻る気はねえけん」

「だろうね。そう言うと思ったよ。けど、一つ覚えておくと良い」

リバインはニッと笑う。

「実験はまだ続いているよ」

リバインは踵を返し、どこかに行ってしまった。

フェザントはその後ろ姿を怒りの籠った眼で見るだけだった。

第35話 変わってしまったリチャード（後書き）

（雪龍）

「投稿遅れてすいません！最近忙しいです！そしてこれからも忙しいです！」

（ルイス）

「今回は予定通りオリジナル勝利後の台詞行くぜ！」

《ルイス、ソフィ、シェリアの場合》

（ソフィ）

「ねえ、ルイスは何で真っ黒い服を着ているの？」

（ルイス）

「えっ、何となく好きだから、かな」

（シェリア）

「アスベルとは違って早かったわね」

（ルイス）

「何の事？」

《メイリ、エリー、マリクの場合》

（マリク）

「今日はお前達に偉人の名言を教えてやるっ」

（メイリ）

「『戦場では勝った者が正義』っていうのは聞き飽きたで？」

（マリク）

「そうか……」

（エリー）

「えっと、もしかしてそれ言おうとしてたんですか?」

《ルイス、ヒューバート、フェザントの場合》

(フェザント)

「僕の歯ブラシは?」

(ヒューバート)

「知りません」

(フェザント)

「じゃあ僕のアイマスクは?」

(ヒューバート)

「知りません!というより何に使うんですか!?!」

(ルイス)

「ヒューバート、フェザントの行動に一タツツコんでたら身が持たないぞ」

《パスカル、メイリ、マリク、エリーの場合》

(パスカル)

「ここは...こうして.....」

(メイリ)

「ちゃうって!ここはこーや!」

(エリー)

「教官、あの二人は何をしているんですか?」

(マリク)

「バナナパイを自動で作る機械を作っているらしい」

(エリー)

「それって今する事...?」

（ルイス、エリー、メイリ、フェザントの場合）

（ルイス）

「俺達の武器は！」

（エリー）

「元気と！」

（メイリ）

「若さと！」

（フェザント）

「この弓と矢じゃ！」

（ルイス）

「いや、そう言う事じゃなくてだな……」

（雪龍）

「久々にアクセス解析見たらPVが50000、ユニークが10000を超えてました。これも全て皆様のおかげです！ありがとうございます」

（ルイス）

「何か記念みたいなの無いのか？」

（雪龍）

「……要望があつたらやるかも」

（ルイス）

「……もし要望があつたらどんなのが良いか言ってくれ、ってこれ殆ど他人任せじゃねえか」

（雪龍）

「じ、次回もお楽しみに！」

第36話 弟とピエロ

「はあ、大統領に何て言うんだ？」

「ありのままを説明するよ」

一行に流れる空気が重い。

普段ならパスカルやフェザントが変な事を言って和ませたりするのだが、先程の事があってからテンションが低い。

一行は今大統領府の前まで来ていた。

（誰かこの空気を変えてくれ…！俺じゃ耐えきれねえ…！！）

「そんな時にはあたしにお任せっ！皆の気分を盛り上げちゃうよお！」

一行は声のする方を見るとそこには変な仮面をしたピエロの様な者がいた。

しかもフード付きのコートを着ており、このストラタではかなり目立つ格好だ。

そして全員こう思った。怪し過ぎる、と。

「今怪しいと思ったよねえ？人を見かけで判断しちゃ駄目なんだよ？」

「見かけていうか仮面被ってて顔見えてないんだが」

「あははっ、そうだったねえ」

全員はこう思った。ますます怪し過ぎる、と。

このままスルーして行こうとしたが、ピエロに「待って」と止められた。

「あの、俺達急いでるんで……」

「そんな殺生なあ。あたしだって生きていくのに必死なんだよお」

「……何か関係あるん？」

メイリの言葉にピエロは数秒固まって、

「それは置いて……」

「置いてっちゃうの!？」

エリーがツツコむがピエロはスルー。

ピエロは何も言わずに鞆からテニスボールほどの球を取り出した。

「さあ、寄ってらっしゃい!見てらっしゃい!」

(すごいマイペース……)

「アスベル、お前はオレ達がコイツに付き合っている間に大統領に報告して来い」

「わかりました」

マリクの言葉によりアスベルだけは何とか抜け出し大統領府に入っ
た。

だが問題はここからだと思う。

街の中とはいえここはストラタ。もちろん暑い。

そんな中暑さが苦手なパスカルやフェザント達が芸を見ている間、
暑さに耐えられるだろうか。

「まずは…それぞれそれえ!」

ピエロはジャグリングを始める。

回し始めいつの間にか球は一つ、また一つと増えていき最終的には
十個ほどになった。

「おゝ！凄いな」

パスカルのテンションが上がり出す。

ピエロはジャグリングを止め球を鞆にしまい、今度は細い剣と紙を取り出す。

そして紙を剣で斬る。

「次はこの剣を呑み込んでみせましょー！」

「ええ！？そんな事したら危ないじゃない」

「もしもの事があつたら応急処置だけでもお願いしますねえ」

ピエロは上を向き、剣を口に近付ける。

しかし仮面に当たって口に入らない。

何回もカツツ、カツツと当てていると痺れを切らして、

「ああもう！この仮面ウザりたい！！」

「「「取っちゃうの！？」「」」

ピエロが仮面を外し、地面に投げつける。

仮面は地面に当たり粉々に割れる。

シエリア、ルイス、エリーの三人は驚き、パスカルとフェザントは何故か感心している。

マリクは顎に手を当て見ていられないと目を閉じる。

「あの……ん？」

ルイスはピエロの正体を見て驚いた。

ピエロは女性だったのだ。

容姿はオレンジ色の髪で目にかからず、肩にかからず位の長さ。

そして額に初代主人公を思わせる赤いバンダナ。
更にポニーテール。

「あははは……。失敗失敗」

「皆、もう芸は終わったのか？」

アスベルがやってくる。

もう話が終わったらしい。

そしてその後ろには

「「「ヒューバート!?!?!」」」

「げっ」

ラント出身三人は驚き、元ピエロはヒューバートを見るなり顔をひきつらせた。

「貴女もしかして……ライトルーンですか？」

「やっぱヒューだ……。逃げるっきゃない！」

「ちよつと！」

元ピエロ——ライトルーンはヒューバートの制止も聞かず、さっさと走って逃げてしまった。

「色々聞きたい事があるんだが……まず何でお前がいるんだ？」

出来る限り簡潔に説明しよう。

デュープルマル

まずリチャードは大蒼海石だけではなく、グローアンディ大翠緑石の原素まで吸い

エレス

取り失踪。

それが理由でウィンドル軍は撤退。王都は混乱中。

ウィンドルは大変らしい。

「ここからがさっきの質問の答えだ」

そして、二つの大？石が狙われた今、最後の大？石も狙われるだろうと予想された。

そこでアスベルはフェンデルに向かい、リチャードを追跡せよ、と大統領から命令が出た。

しかもそれをストラタが全面的に協力してくれるのだ。更に、ヒューバートと一緒に行くよう、大統領が命令したのだ。

「へえ、ストラタが全面協力ね」

「ああ、これから闘技島経由でフェンデルに入る。皆、良いか？」

全員頷く。

それを見てアスベルも頷く。

「よし、行く――」

「ちょっと待って下さい」

アスベルを遮りヒューバートが言う。

「皆さん、少し財布を確認していただいても良いですか？」

言葉通り全員財布の中を見る。

その時ルイスだけが「あっ」と声を出した。

「中身がなくなってる――！」

『え？』

「やはりそうでしたか……」

「ど、どうということだ？」

ルイスはかなり焦りながら、ヒューバートに尋ねる。
落とした覚えはない。ましてや誰かにあげた覚えもない。

「さっきのライトルーン……ピエロはスリなんです」

「何だつて!？」

「まさかこんな身近に被害者が出るとは……」

「よし、今すぐ取り返しに行くぞ!」

「それは無理ですよ」

「何でだよ!」

ライトルーンは逃げ足がかなり速らしい。
被害が半年も前から出ているのにまだ捕まっていないのがその証拠だ。

「くっそー!あの野郎……覚えてろよ……!!」

「まあ全員分が盗られた訳ではありませんし、早くフェンデルに向かいたい」

「……分かったよ。ならさっさと行こうぜ」

一行は一旦闘技島へ向かった。
もちろん船で。

闘技島行きの船上。

「ふう、まさかあんな所でヒューと出くわすなんて……」

ライトルーンは甲板で寝転がっていた。

日差しがやけに暑い。

「まだストラタ出たばっかだから暑いなあ。にしてもヒューはしつこいからなあ。案外ここまで追ってきたりして」

「誰がしつこいんですか？」

「ひゃあ!？」

ライトルーンは起き上がり後ろに飛び退く。

目の前にいたのは青い髪に、青い軍服の青尽くしの青年がいた。

「ライトルーン、貴女何故ここにいるんですか？」

「そ、それはこっちの台詞だよっ!あたしはやつとお金が溜まったからストラタを抜けたただだよ!？」

「港の者にも手配書が回っていた筈なんですが……何故乗れたんですか？」

「えっ?あははっ、企業秘密で教えらんないよ」

ライトルーンはニコツと笑う。

その時ライトルーンは誰かに後ろから肩を掴まれた。

「テメエ、俺の……」

「へ？」

「ガルド返せーっ!……!」

ライトルーンの叫び声が大海原を超えて、フェンデルまで聞こえた。
……その位大きかったという意味ですよ？

数分後、ライトルーンはルイスに縄でぐるぐる巻きにされていた。

「ヒューバート、コイツをさっさと牢屋でも物置でも良いからとりあえずどっかにぶち込んでくれよ」

「……残念ながらここは僕の管轄内ではないのでできません」
ストラタ

「そんな事言わずに……やっぱ良いや、ガルドさえ返してくれれば」

「乗船する時に使っちゃった」

「この野郎……っ！……！！」

その後、ライトルーンは更にグルグル巻きにされて、その辺にあった樽に押し込まれたそうだ。

第36話 弟とピエロ（後書き）

（雪龍）

「皆様、お久しぶりです」

（ルイス）

「もう二週間以上経ってんじゃないか」

（雪龍）

「すいません、こんなに遅れた理由は……活動報告見てください」

（ルイス）

「それはそうとヒューバートがやっと入ってきたな」

（雪龍）

「うん！更に新オリキャラ、ライトルーン」

（ルイス）

「あのスリ女……絶対ガルド返させてやる」

（雪龍）

「まあ頑張つて。では次回もお楽しみに」

第37話 ルイス奮闘！

闘技島、それは戦士達の集う場所。
彼らは高みに挑み、強くなる。

故にそこには強者ばかり。

戦士たちは今日も強くなる為に挑み続ける。

そして今そこに一人の青年が挑んでいる——！！

「……………」

「頑張れー！ルイスー！！」

ルイスを除く一行（＋ライトルーン）が観客席で見ている。

「何でこうなっただっけ……」

それは数十分前まで遡る——

「ここが闘技島、ライオットピークか」
「何か暗くない？」

エリーは周りを見て少し不安になる。

ここにいる人間はゴツイ男ばかりだからだ。

「何だお前!!」

「ん?何だ?」

一行は声のした方を見る。

そちらには武器を持ったフェンデル兵とパスカルがいた。

「パスカル何しとんのや?」

「あつ、メイリ、見てよこの武器……つてあれ?」

「フェンデル兵なら行ってもうたけど?」

「うゝん……ちよつと見てこよゝつと」

パスカルはメイリの手を引いて走り出す。

それをヒューバートが止める。

「軽率な行動は慎んでください。目を付けられたらどうするんですか」

「大丈夫大丈夫。遠くから見ただけだから」

そう言う二人は行ってしまう。

それと入れ替わるように一人の男がやってきた。

そしてヒューバートと何か話して、紙を渡して行ってしまった。

「どしたん?何かあったんか?」

「ええ……ストラタ軍の密偵が上官に疑いを掛けられ身動きが取れなくなつたようです」

「つて事は潜入出来なくなつたんか?」

「別の方法を考えた方が良くもしれません」

そうこうしていると今度はパスカルとメイリがフェンデル兵に追いかけられてきた。

フェザントはそれを見てフェンデル兵の持っている武器に弓を放った。

弓の刺さった武器は使い物にならないだろう。

「ちょっと、あなた何をしているんですか！」

「いや、二人が痴漢に追われとったから……」

「どう見たって違うでしょ！」

「おい貴様！何てことしやる！」

フェンデル兵がフェザントの胸倉を掴む。

「じゃってお前らが二人をストーキングしょーたから……」

「違う！奴らは我々の武器を持ち去ろうとしたのだ！」

「……そりゃあ二人が悪いな」

「その武器を壊したデメエが一番悪いんだよ！！」

フェンデル兵は拳を振りかぶる。

その時フェンデル兵が吹っ飛んだ。

「えーっと……ルイス、何をしているんですか？」

「あつ……ついやつちまった」

「ついじゃないでしょ！兄さんから何か言ってくださいよー！」

「いや、リチャードを殴っちゃった位だし……」

「というかあたしもつかい見せてって言っただけなんだけど」

「女は捕えたか？」

見た目から少し位が高そうなフェンデル兵が歩いて来た。

区別するためにフェンデル上級兵と呼ぼう。

「貴様たち……例のスパイの関係者か」

「スパイ？何の事です？意味の分からない言いがかりは止めてくれませんか？」

「そうだ。俺達はここの猛者達に挑みに来ただけだ」

「ほう、あくまでシラを切るか。まあ良い。なんなら俺達が相手をしてやるうか？」

フェンデル上級兵は「だが」と続けた。

「ただ勝負するだけではつまらない。賭けをしよう」

「賭け？」

「我々が勝つたら話を全て聞かせてもらう。だが万一我々が負ければスパイは返してやろう」

「ああ良いぜ！その賭け受けてやるよ！なあ、ヒューバート」

「ええ、そうですね。どうせ僕達はここに挑みに来たんです。肩慣らしくらいにはなるでしょう」

「ふん、言っておけ」

そう言うとフェンデル兵達は上に上がっていった。

ルイスとヒューバートの息の合い方はさすが幼馴染と言うべきだ。少し落ち着いた所で先程のフェンデル兵が走って帰ってきた。

「おい！黒髪！」

「呼ばれてるぞ！黒髪」

「黒髪はお前しかいないだろうが！！」

確かにこのメンバーの中に黒髪はルイスしかいない。

今思ったが一行の髪は少しカラフルだ。

目立って仕方ない。

「貴様が挑戦を受ける！良いな！」

「はあ？やだよ。このアスベル様が挑戦するんだから」

「俺なのか？教官の方が良いと思うんだが」

「オレはフェザントだと……」

「僕はヒューバートじゃと思つとつた」

「ええい！うるさい！とにかくお前が挑戦しろ！でなければスパイは返さんからな！」

「お前にそんな権限あんの？」

凶星だったのかフェンデル兵は焦る。

「くっ……この頬の痛み、忘れてはいないからな」

「？」

そう言うフェンデル兵は走っていった。

何の事かと考えたが、先程ルイスに殴られたのを根に持っていたのだろう。

「ありやりや、ご指名受けちゃったね。どうすんの？」

ライトルーンがルイスに言う。

「つてか、いたんだね。」

「はあ、しかたねえ。お前に奪われたガルドを稼ぐついでにやってやるか」

「殴るの自重するって言ったのになあ」

ルイスは刀を鞘に納めたまま魔物を殴る。

モンスター

闘技島という位だから腕の立つ者がたくさんいるのかと思ったら、ザコ敵ばかりだ。

「余裕過ぎ……。本当にここ闘技島か？」

さつきからスイカみたいなのやスライムが出てくるが全部軽くあしらっている。

そして四階。

出てきたのはフォシルリザード二体、ワイバーン二体、ウラガンドラゴン一体だ。

うん、言った所でどんなのか分かんないよね。

「そろそろ真面目にやるか」

ルイスは刀を抜く。

そして火弾衝でフォシルリザードを一体倒す。

「ここのも弱いな。もういっちょ！」

もう一体のフォシルリザードも火弾衝も倒した。

ルイスはワイバーンの攻撃を躲し、ワイバーンの横に回る。

「翔風輪！」
しょうふうりん

刃に風を纏わせ、打ち上げる。

そして空中で風による追撃がワイバーンを襲う。

ルイスは瞬時に刀を鞘に納め、もう一方のワイバーンに瞬突、刹牙と打ち込んでいく。

「裂震虎砲！」

虎の咆哮でワイバーンを吹き飛ばす。

ワイバーンは地に落ちて動かなくなる。

次に先程打ち上げたワイバーンをもう一度標的にする。

「喰らえ！！」

高速の居合——葬刃でワイバーンを斬り伏せた。

残るはウラガンドラゴンのみ。

ウラガンドラゴンは爪を振り下ろすが、ルイスは簡単に避ける。

「遅え！！」

ルイスは先程と同じように鞘に刀を納めたまま攻撃し、葬刃で仕留めた。

「……ようやくか」

「ふん、下で野垂れ死ぬと思っていたんだがな」

「んな訳あるか。ってかそっち五人もいんの？」

先程のフェンデル上級兵とフェンデル兵が四人いた。
いや少し違う、先程より増えている。

「まあこっちも二人だけだな」
「そうですね」

ルイスの後方から現れたのはヒューバートだ。

「貴様！いつの間に！」
「さっきからですよ」

ヒューバートは眼鏡をクイツと上げる。

「やられんなよ、ヒューバート」
「誰に言ってるんです？こんな奴らに僕がやられる訳ないでしょう？」

「それもそうか」

二人はそれぞれの武器を構える。

これが闘技島の伝説となる、『黒と青の閃光』の始まりだった。

第37話 ルイス奮闘！（後書き）

（雪龍）

「今回の反省点」

（ルイス）

「何の事だ？」

（雪龍）

「まず一つ目、ルイスとヒューバート以外が空気に近かった」

（ルイス）

「なるほど、次は？」

（雪龍）

「二つ目、ルイスが強過ぎる」

（エリー）

「確かに一人であそこまで簡単に勝ち上がるのは難しいよね」

（雪龍）

「三つ目、色々都合悪くなったから途中でヒューバート乱入」

（ルイス）

「うんそうだな。ダメダメだな。はい、オリ技紹介ドーン」

翔風輪
しやうふうりん

【B技／？3／威力：310／クリティカル率：90／ヒット数：6】

有効特性：斬撃／射撃

使用者：ルイス

風を纏わせた刃で敵を打ち上げる技。

打ち上げた敵は空中で風の追撃を受け、回転しながら落ちる。

（雪龍）

「次回はカッコよく出来ると良いな」

（ルイス）

「頼むぜ？伝説とまで言っちゃったんだから」

（雪龍）

「頑張るよ！では次回もお楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5820r/>

テイルズオブグレイセス + α ~ 守る強さを炎と共に ~

2011年11月18日08時18分発行